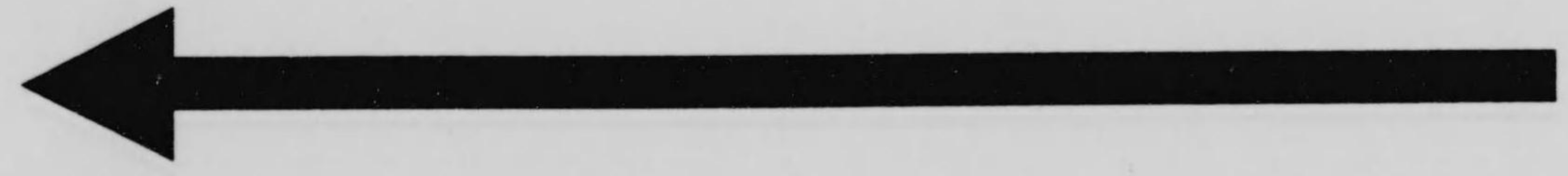




始

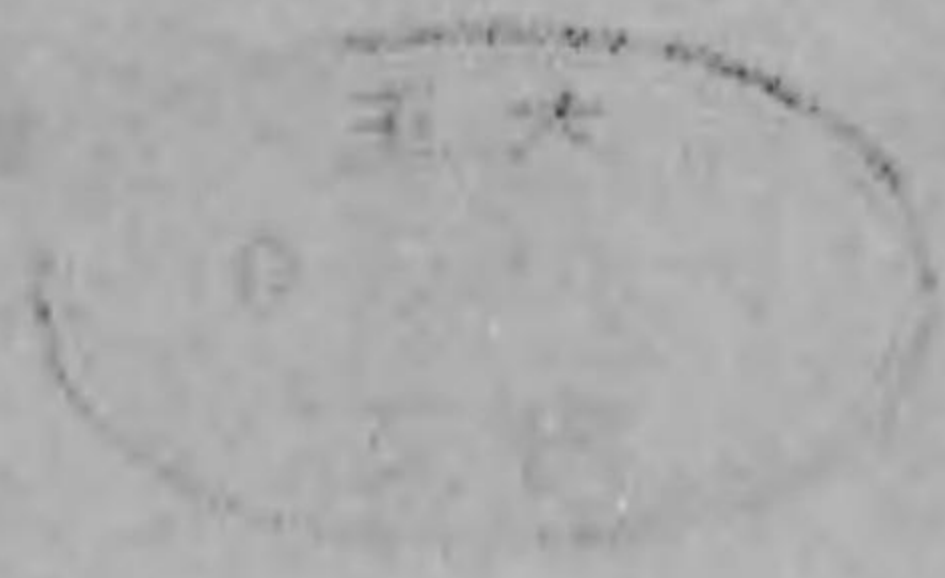


371-53



木材
之
秋
田

大正
7. 1. 9
内交



序

秋田縣の重要物産は、米と酒と鑛石と木材とである。全國の杉の年伐量は、約七百五十萬石で其内百五十萬石は秋田の杉である。即ち全國の杉の五分の一は秋田の杉である。杉て有名なる奈良縣の如きですら、僅に三十五萬石に過ぎない。又全國の製材工場は約千五百であつて、其消費能力は千七百萬石である。秋田縣の製材工場は其數六十、其消費能力は二百萬石である。工場の數に於ては必ずしも多しと謂ふ可らざるも、工場能力の點に於ては、是亦全國の覇者である。今回北羽實業協會が「木材の秋田」を云ふ一冊子を發行して、木材と製材工場との状況を、汎く世間に紹介せんとするは甚だ結構ある企だと思ふ。

秋田縣民は澤山の米を作り乍ら、之を自分で食つて了ふ、芳醇ある酒を醸し乍ら、之を飲んで了ふ。吾々は互に相警めて、米と酒との節約を計

り、縣民の懷を暖かにする必要は有るまい乎。木材は流石に食ひは爲まい、随分少なからぬ數量を關の東西に輸出しては居るけれども、試みに吾々住宅の構造を見よ、一ヶ月十五圓の安普譜ですら、天井は總柱である、長押や障子は勿論、浴場の腰板迄無節である。木材の節約云ふ事は柄は或は米酒の節約以上に急務であるかも知れぬ。若し本書の刊行に由つて秋田木材の狀況が普く世に知れ亘り、依つて以て木材節約の一助ともあるならば眞に天下の慶事である。

大正六年十一月

秋田大林區署長 三浦實生

上梓に當りて

▼秋田縣に於ける森林は日本に於ても有数のものにして、三美林の一に數へられ、殊に杉の生産に至りては、全國より産出する總額の五分の一を占めて居る。されば木材の秋田としての價値は全國に認識せられ、又た甚の將來は大に世人の期待する處とあつてゐる。然し、かから之れを具體的に世に紹介されてゐない。之れは吾人の常に遺憾とする處である。

▼尤も大林區署より、秋田縣廳より、秋田山林會より、印刷に附して上梓されたものあれども、何れも局部的のものにして、殊に最も紹介を要すべき製材工場に關しては、單に各工場に於て營業案内的の印刷をなして居るものを散見するのみにして、之れを統轄し、各工場全般に亘りて一目瞭然たる如きものは一もふい。之れ本縣木材業の隆昌を期するに於て、一の欠點と稱しおければならぬ。

▼然るに今回北羽實業協會に於て「木材之秋田」なる一圖書を刊行し、國有林、民有林の過去現在將來より林産物の事を叙述し、併せて本縣の誇りとする製板工場の現狀を叙して秋田縣に於ける木材界を世に紹介せんとし、予に之を謀る。予大に其の趣旨に賛成し、不肖淺學非才、敢て其の任に非ずと雖も、編輯の衝に當り、茲に上梓の運びに至つた。

▼編輯に關しては、専門的智識を有せざる予の、三浦秋田大林區署長、武井同林業課長、倉林、北の兩縣林業技師其他の援助に據る所多く、又材料に關しては、國有林經營要録、秋田縣統計摘要、秋田縣林業一覽、秋田大林區署管内産業調査、同民設製材工場一覽表其他の印刷物を參考とし、又營業者に就き直接聴取した。斯くて萬事粗漏なきを期した。

▼乍併、或は多少事實と相違の點あるやも圖られざるを以て、萬一斯かる點あるに於ては更に機を見て訂正増補すべく、殊に歳末多忙裡、校正を依頼したるを以て、誤字脱字等あるやも知れぬ。此の點も併せて深謝する。

大正丁巳十二月

著者 識

木材之秋田目次

第一章 総説

第一項	位置及地勢……………	一
第二項	地質及氣象……………	二
第三項	林野の分布……………	三

第二章 國有林

第一項	國有林野面積……………	五
第二項	森林と材積……………	七
第三項	施業の方針……………	一〇
第四項	利用の方法……………	一八
第五項	造林と保護林……………	三三

目次

第三章 民有林

第一項 民有林野現況……………二
 第二項 公有林野整理……………二七
 第三項 模範林と苗圃……………三〇
 第四項 植樹奨勵及補助……………三三
 第五項 人工及天然造林……………三七
 第六項 森林組合と山林會……………三九

第四章 林産物

第一項 林産價格……………四一
 第二項 製炭事業……………四三
 第三項 椎茸の栽培……………四五
 第四項 醋酸石灰と紫蕨……………四七
 第五項 有望なる副産物……………五〇

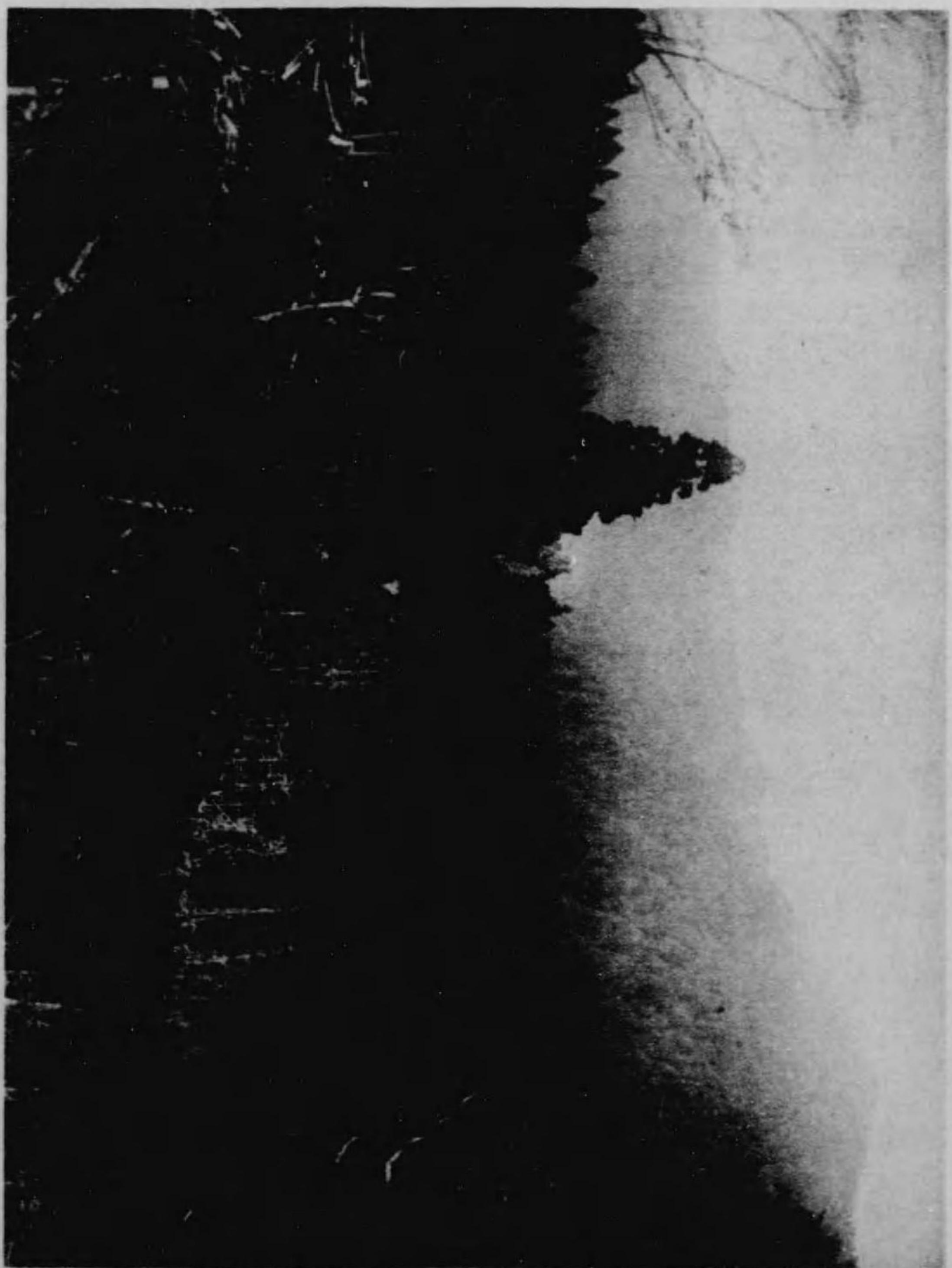
第五章 製材工場(附木材商)……………五三

木材市場	秋田木材株式會社	杉本製材所
秩父製材所	金野製材所	柳谷製材所
深井製材所	材木商會商店	館岡製材所
二瓶製材所	塚本製材所	友榮製材所
播摩製材所	安岡製材所	小川製材所
三浦製材所	西村龜松商店	安井丑吉商店
菱善兵衛商店	相澤卯吉商店	塚本久三郎商店
瀬川勘五郎商店	平川清吉商店	塚本勘三商店
塚本佐一商店	塚本勘兵衛商店	大塚米吉商店
進藤製材精米所	菱藤商店	小林製材所
中川口製材所	鈴木勘左衛門商店	鈴木彌兵衛商店
野田商店	齋藤合資會社	工藤材木商店
加賀谷長之助商店	鎌田貞治商店	佐藤木材店
丸か商店製材所	齋藤製材所	前田製材所
田中製材所	村金製材所	館山製材所
菊地製材所	船川製材株式會社	倉部喜太郎商店
俵松商店東北製材部	平泉製材所	大館製材株式會社

附 錄

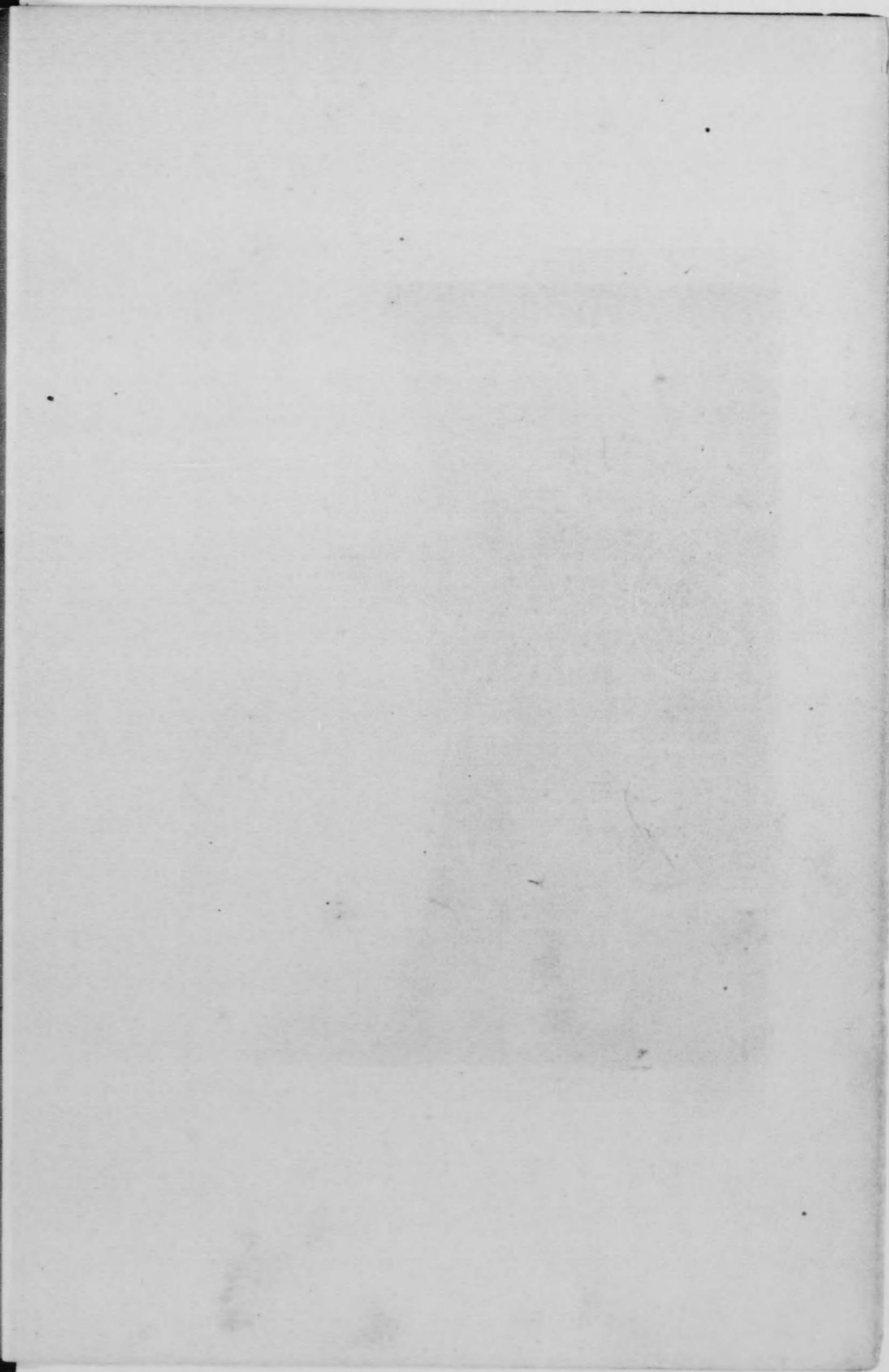
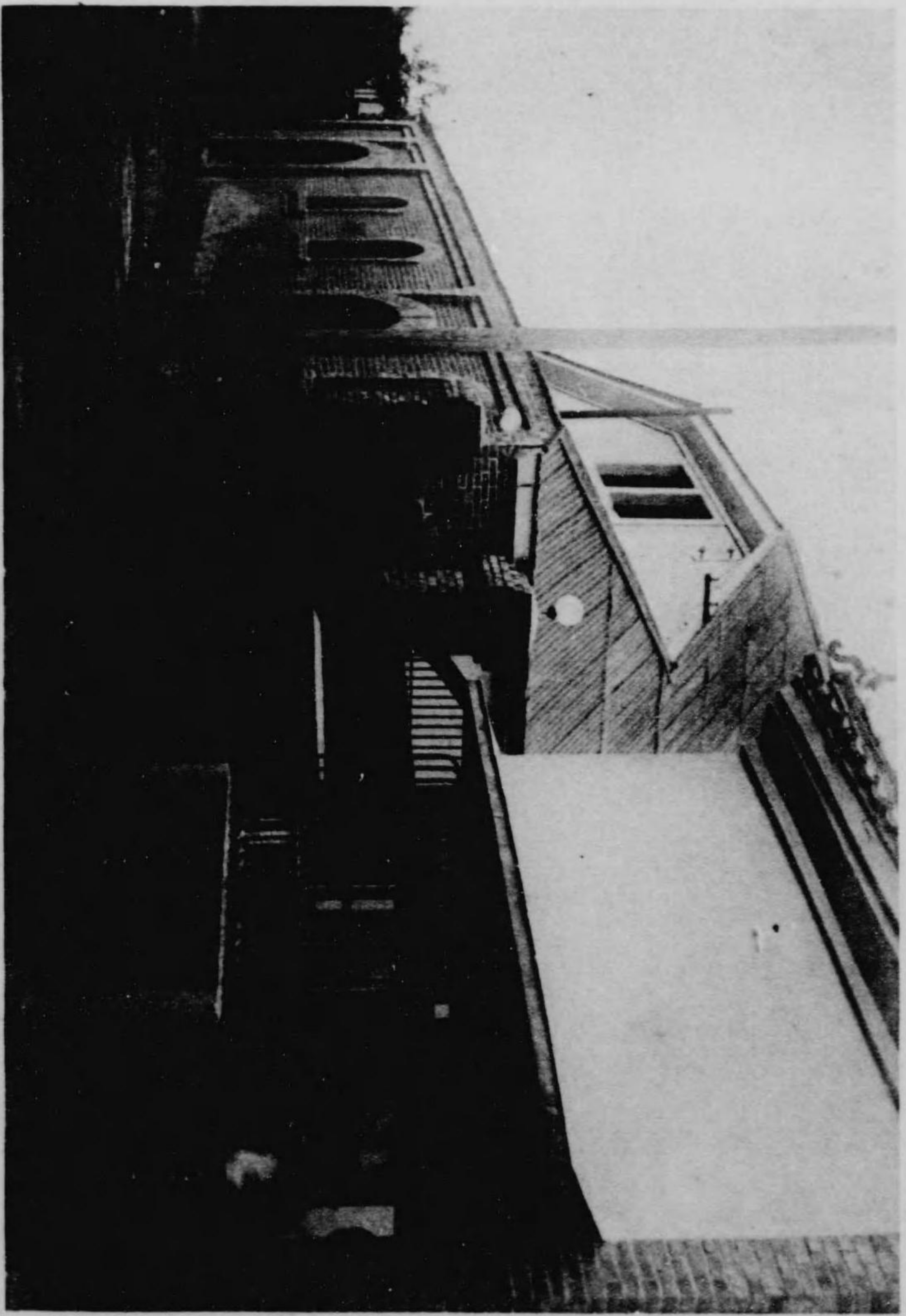
秋田縣製板同業組合.....一五三

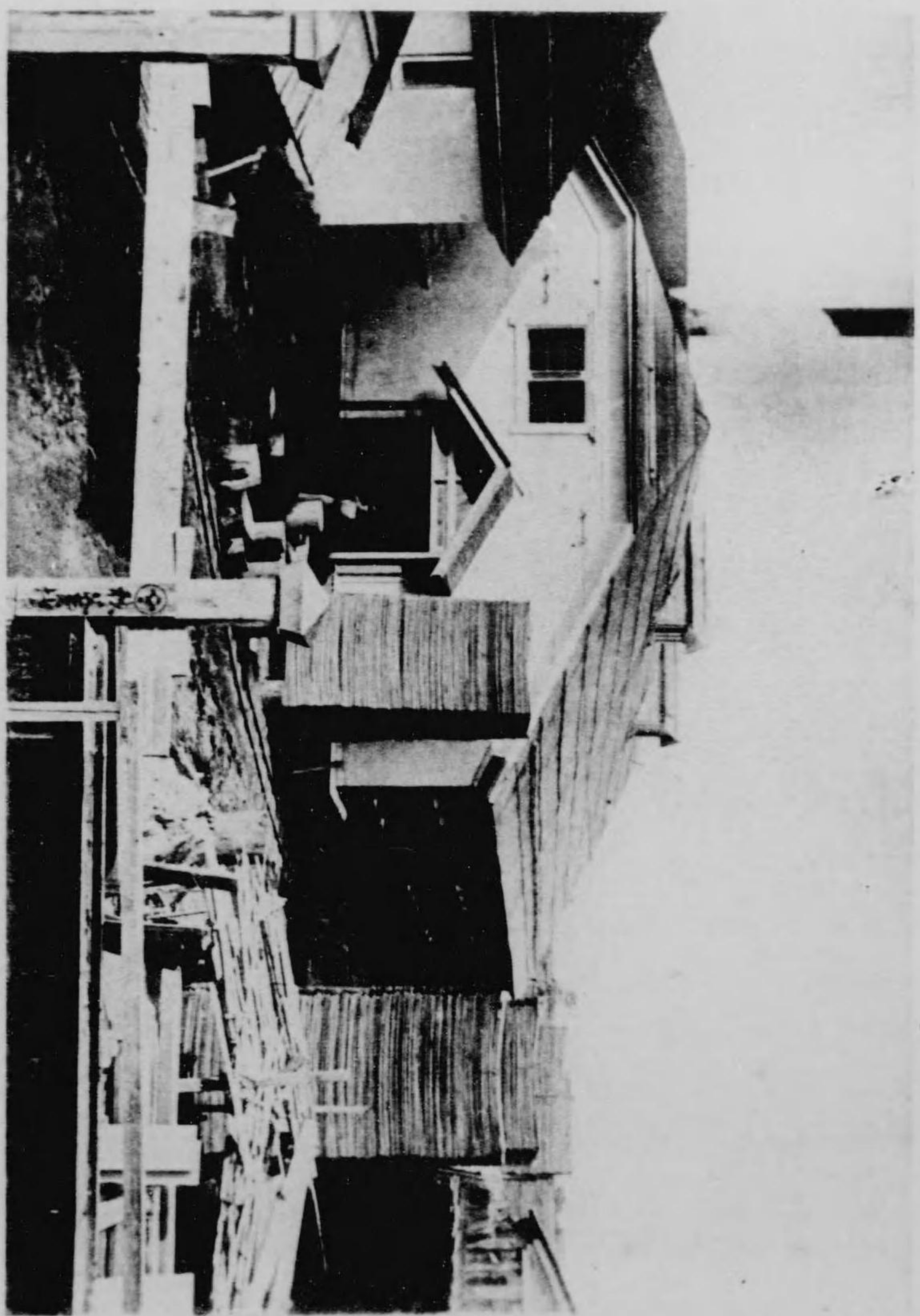
- 長木澤製材所
- 三丁目製材所
- 渡邊直一郎商店
- 長田商店
- 湯澤木工場
- 秋田林業株式會社
- 菅原季次郎商店
- 武茂製材所
- 淺野製材株式會社
- 丸中組合製材所
- 本莊商會
- 木材共同販賣店
- 雄勝木工場
- 澤口淺治商店
- 藤原製材所
- 入辰川林業株式會社
- 丸正製材所
- 大塚祐助商店
- 佐藤喜八郎商店
- 秋田木工株式會社
- 雄西製材所
- 齋藤木材店
- 大宮製材所



相々林有國澤木長澤雪村木長郡田秋北

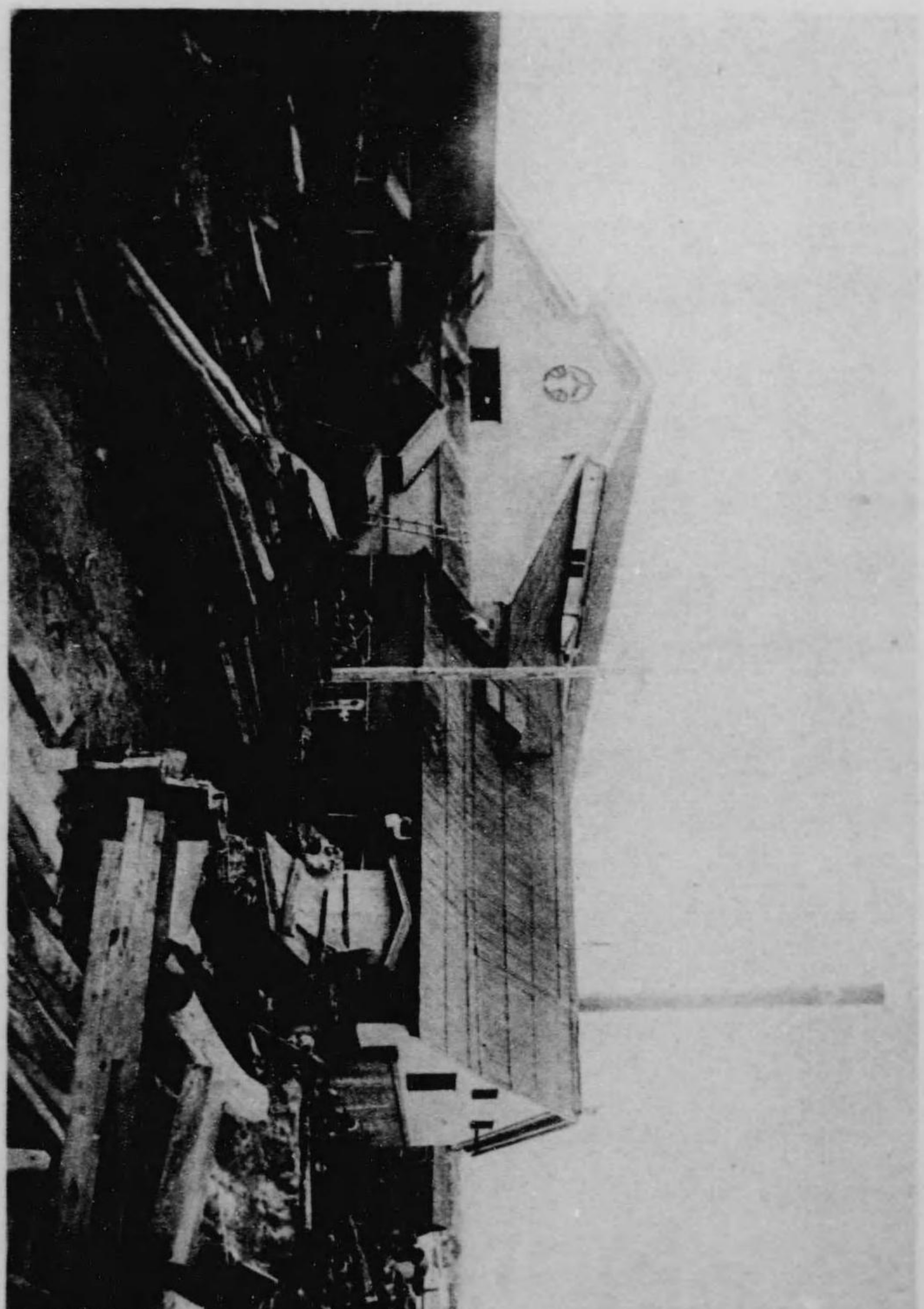
杉本製材工場

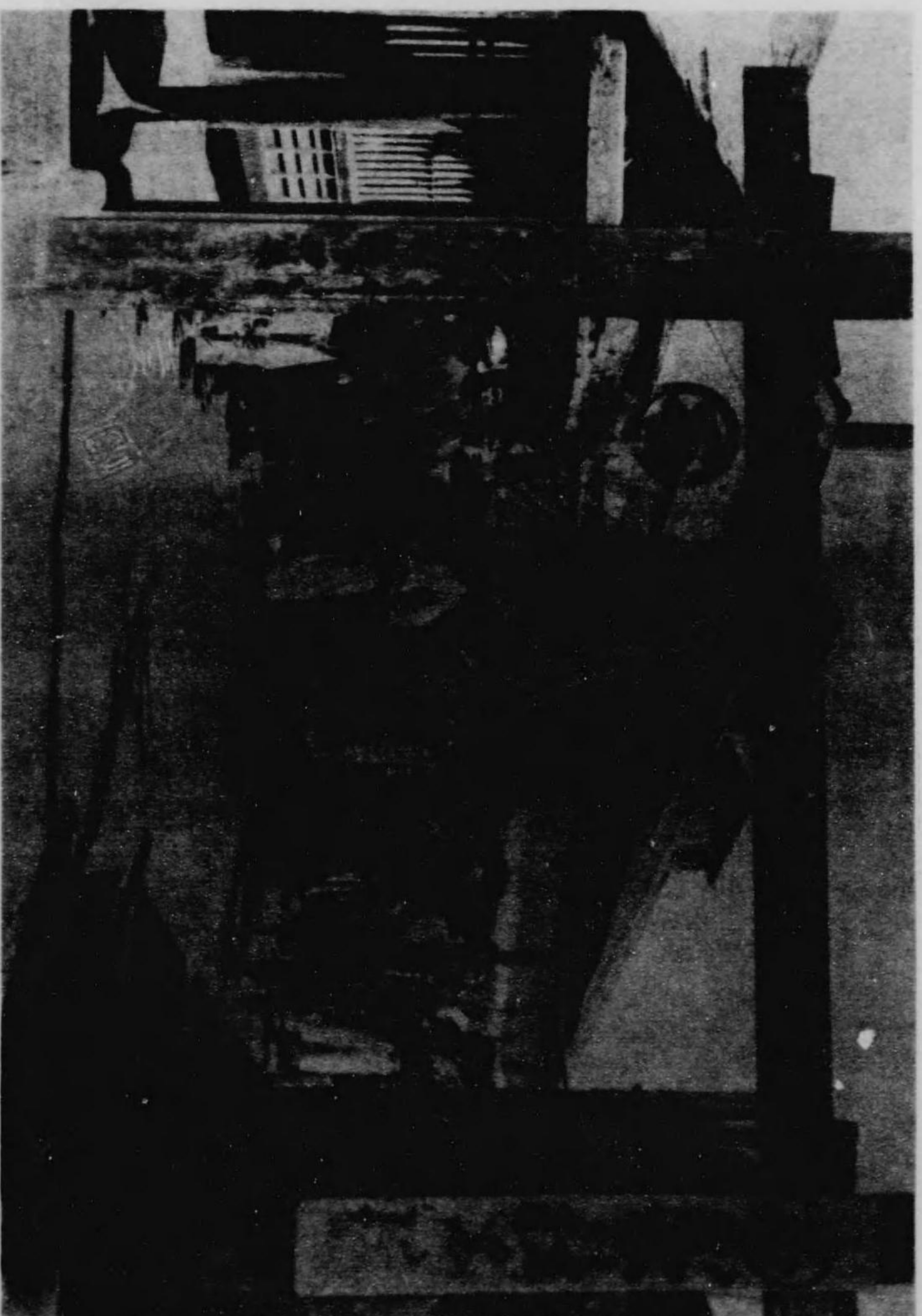




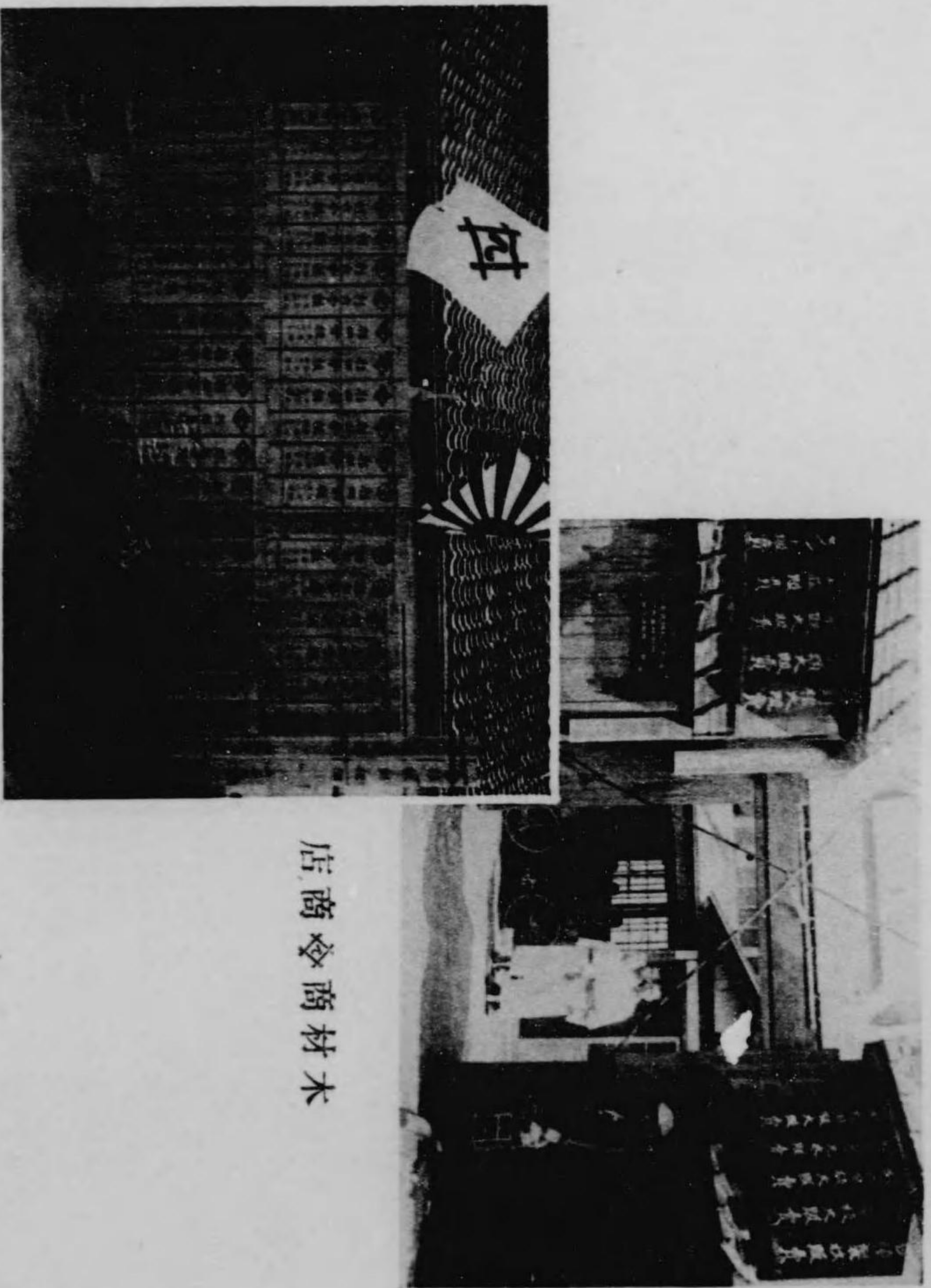
秩父製材工場

柳谷製材工場





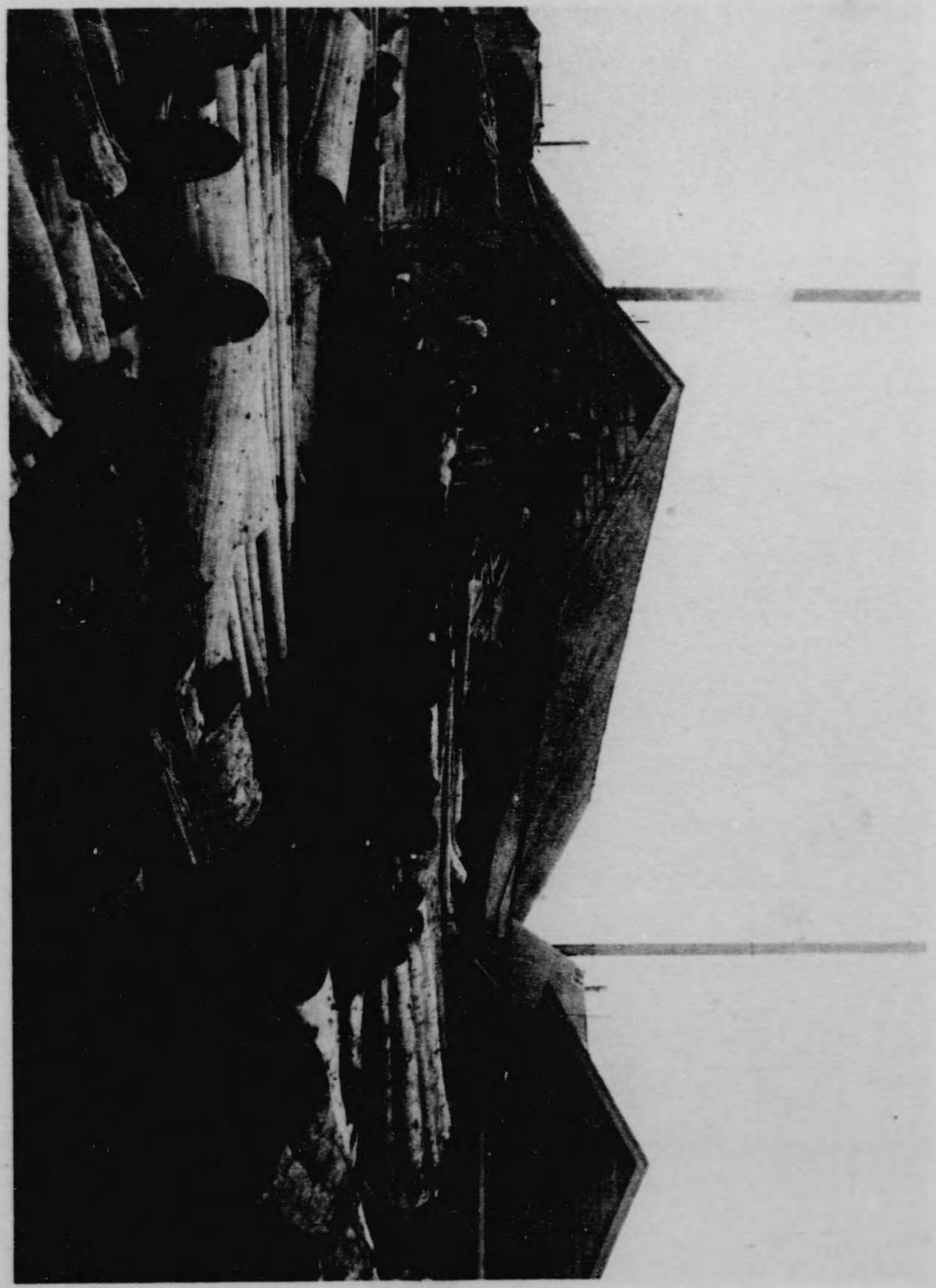
深井製材工場



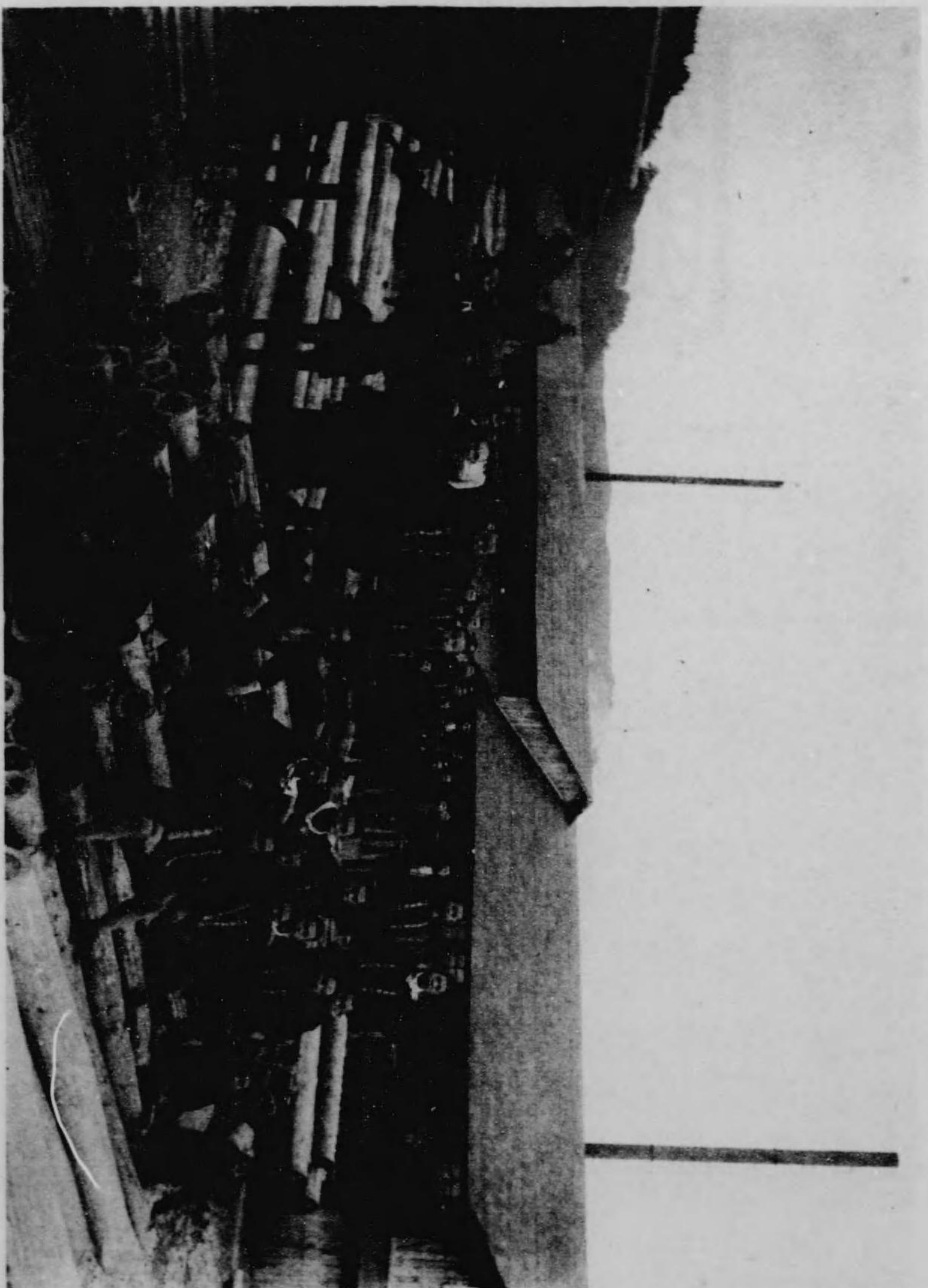
店商 商材 木

場列陳品製同

場 工 材 製 藤 齋



27



湯澤木工製材工場

87



木材之秋田

小貫修一郎著

第一章 總說

一、位地及地勢



秋田縣は羽後國に於ける一市八郡及び陸中國一郡より成り、西方は日本海に面して濶くも他の三面は山岳を以て青森、岩手、宮城、山形の諸縣に境し、奥羽脊梁山脈の支脈は廣く縣内に展びて山番重疊し、森吉山、白子森等の高嶺中央に聳へ、太平山脈其の西に當りて南北に縦走し、南部山形縣境には烏海の高峯屹立して西方に支脈を連ぬ。又西北部日本海に突出せる男鹿半嶋には、眞山、本山、寒風山等相對峙するが、然かも縣内地勢一般に甚しく急峻ならず。河川の主なるものは雄物、米代、子吉の三川にして雄物川は其の源を秋田縣の東南境奥羽脊梁山脈に發して北流し、大小幾多の支流を合せ土崎港に至りて海に注ぐ。本縣第一の河にして流路三十五里、其の流域には仙北、平鹿の平野あり。米代川は陸中國四角岳附近に源を發し、

西流して能代港に至りて日本海に注ぎ、流路二十六里。子吉川は其の源を海拔八千尺の烏海山に發し由利全郡を流域として延長約二十里、西北に流れて本莊港に至り海に注ぐが、皆共に舟楫の便あり。而して河川沿岸には大小幾多の平野を有するも、縣内を通觀するに概ね山岳地にして、大体より云へば平野は僅に一小部分に過ぎざるなり。

我邦林野の面積は、最近の統計に據るに全面積(但朝鮮臺灣樺太を除く)の約七割三分なるが本縣の林野は全縣面積百十四萬町步中八十八萬三千餘町步にして約八割を占め、全國平均率を超過すること約七分なり、本縣の森林原野に富めるは斯く統計の示すが如くにして、従つて林業の發達如何が秋田縣の經濟上に重要な地位を占むるは、敢て吾人の贅言を要せざる處なり。

二、地質及氣象

本縣に於ける地質は雄物川及び米代川等の沿岸に於ける洪積層及び沖積層を除くの外は、山岳地方概ね第三紀層及び火山岩の二種を以て成立するものと謂ふを得べし。即ち其の東北部及び山形縣界地方一帶は火山岩に屬する主なるものにして、米代川流域の海岸及び本縣中部一帶の山岳の如きは第三紀層に屬せり。火山岩は流紋岩、輝石安山岩、英雲安山岩等にして、其の内最も廣く存在するは輝石安山岩なり。花崗岩、石英閃綠岩其の間に迸發し、太平山、馬場目

岳附近及び東部秋田、岩手縣界の一部等は其の主なる所在地なり。

氣候は概して寒冷なるが、年平均氣温は攝氏十度餘にして、一ヶ年内の最高最低の差は四十五度乃至五十度なるが、沿岸近く流るゝ對嶋暖流の餘温を享け海岸地方は稍氣候を緩和せらる。而して内地に入るに従ひ漸次其の度を減じ、奥羽脊梁山脈地方に至れば温度最も低く、之れを温暖なる海岸地方に比すれば、年平均氣温に於ては約二度の差異あり。雨量は頗る多くして年平均千七百耗に達す。之を要するに、本縣は高峯の一部を除けば一体に温暖にして雨雪多く、常に温氣に富むを以て頗る樹種に富み、殆んど温帯重要樹木にして存せざるものなく、就中杉の成育に好適するを以て、所謂秋田杉の美林を形成して壯觀を呈し、其の聲價全國に冠たるなり。

三、林野の分布

森林の分布に就ては縣内の三大河川流域に依りて大別する事を得べし。即ち雄物川流域及び子吉川流域は潤葉樹林中に針葉樹を交へ、上流地方特に潤葉樹多きが、其の漸く北するに及び針葉樹の數を増し、米代川流域に至りては針葉樹頗る多くして、所々に其の純林を見る事を得べし。其の針葉樹中主たるもの所謂秋田杉にして、一般に枝下長く樹幹通直にして邊材薄しく、

木理緻密にして色澤頗る鮮明なり。其の純林は三十平方里に渉り、林相整齊鬱鬱として翠綠滴たるが如し。樹齡は概ね百二十年乃至二百年にして、大なるものは胸高直徑四尺、樹高三十間に達し、一町歩の材積五千石に上るものあり、世の日本三大美林の一として秋田杉を推稱して措かざるもの、實に此の米代川流域の隨所に産する林相を指稱するものにして、此蓄積國有林のみにて凡そ三萬五千町歩、年伐額三十五萬石の良材を産出しつゝあり。

潤葉樹林は海面二千尺以上の地及び二千尺以下にして薪炭材の需要多く、針葉樹の成立少なき地に繁茂し、縣内幾多の鑛山に支柱材及燃料として供給せられ、又薪炭材として年々伐採せらるゝもの甚大なるが、近年更に潤葉樹利用の進歩と共に諸工藝用材としての需用尠からざるあり。樹種はアナ、ナラ等を主とし、其他器具施作等諸種の用途を有する有用樹種に富み、老木枝を交へて鬱蒼たる林相を呈せり。其の面積は廣漠にして一言に盡し得ざるも十和田湖附近早口川及岩瀬川の上流、米代川の上流田山地方、森吉山より太平山に亘る本縣の中央山脈地方子吉川の上流鳥海山附近、雄物川上流宮城縣界附近、仙北郡の岩手縣界附近等其の主なるものにして、至る所鬱然として太古の影を存し居れり。

而して本縣内約九十萬町歩の地積を有する林野が、如何に分布せられ居るやを其の所有別面積を最近の調査に依り表示すれば左の如し。

所有別	面積		推定面積	
	山林	野	立木地	未立木地
御料	三九八、五一〇	一、一五七	九〇	一、〇六七
國有	六〇三	一、一五七	三七八、八三八	二〇、二七六
公有	三三二、九四三	六七、二六六	七八、一一四	二〇七、五三七
社寺	六〇五	六七	二五五	七一
私有	八一、一六五	三六、一六八	一四九、二〇一	四八、三七一
計	五一三、二二三	一〇五、二六一	六〇六、四九八	二七七、三二二
				八八三、八二〇

第二章 國有林

一、國有林野面積

秋田縣内の國有林は悉く秋田大林區署管内に屬すれども、地勢の關係上鹿角郡七瀧村大字上向の一部は青森大林區署の管轄とし、岩手縣二戸郡の内田山村は秋田大林區署の管轄なり。其の實測面積四十萬二千八百十二町歩餘にして、其の林野種別は要存置林野三十九萬七千四百四十一町五反一畝歩、不要存置林野五千二百三十四町五反五畝歩、森林附屬地百三十六町九反一

畝歩なり。而して要存置林野は三角點を基礎とし細部を測量せるものにして正確を期す可く、此内原野は僅少にして殆んど全部森林に屬せり。是等約四十萬町歩の國有林野は秋田大林區署内十六小林區署に依りて管理せられ居るが、要存置國有林野の實測面積を小林區別にすれば左の如し

小林區名	實測面積
毛馬内小林區署	二八、五四二、五四二
花輪小林區署	四一、六七五、五二一八
扇田小林區署	一一、一二七、二五二三
大館小林區署	一二、六九四、七八二五
早口小林區署	二一、八九四、四一二九
七上市小林區署	一〇、五一四、五四二二
阿仁合小林區署	四四、四〇三、八八二一
上小阿仁小林區署	二一、五六〇、〇三二一
荷上場小林區署	二〇、五二二、四八〇四
能代小林區署	一一、九二二、二二一九

二、森林と材積

秋田小林區署	三五、九七一、八九二四
本莊小林區署	二三、七六九、〇八〇〇
大曲小林區署	二〇、八五七、四〇〇七
角館小林區署	二〇、三二九、九八〇〇
生保内小林區署	四七、二七一、三六〇〇
湯澤小林區署	四三、六七一、一一二一

約四十萬町歩を有する本縣内の國有林が如何に分布せられ居るを見るに、針葉樹即ち杉林の分布と闊葉樹林の分布とを區別して其の状況を述ぶるを適當とすべく、然して杉林の分布を明瞭なりしむる爲め米代川北岸地方(米代川北岸全部)、同南岸地方(鹿角北秋田兩郡と仙北河邊南秋田三郡との界線以北及男鹿國有林)、雄物川北岸地方(角館町と境驛とを連繫する一線を境とし其以北)の三區に分ちて之を述べ可し。

先づ米代川北岸地方に就て述べんに、鹿角仙北兩郡の界は其海面高杉の郷土以上に位し、シラベの山頂を占領するものあり。其下流十二所町の對岸に至りて始めて千數百町歩の杉林ありて

毎年一萬一千石を伐採する事を得べく、秋田鐵道通じ輸送の便あり。又大館附近に於て合流する長木下内の二川あるが長木川の水源地は有名なる長木澤にして九千町歩の純林を成し、老杉鬱然として晝尚暗く、樹齡百五六十にして長幹通直、材質秀美、色澤鮮明、秋田杉の巨擘として知らる。一方下内川の流域長木澤の北端に連り三千町歩の杉純林を有し、毎年四萬五千石を伐採し得べく、續いて早口小林區部内に岩瀬川ありて其の流域に約五千町歩の杉の純林を有し、毎年の斫伐額杉六萬五千石、ヒバ四千石に達す。早口川流域には約三千町歩の杉純林ありて年伐額三萬石を得べし。早口川の西に、糠澤川、綴子川及今泉川の三支流あるが、其の水源地に約二千町歩の杉の純林ありて三萬石の年伐額を有し、藤琴川流域には毎年四萬石の伐採額を有する杉純林及び杉雜混濬林あり。

米代川南岸地方に在りては、扇田附近に於て合流する才川流域に三萬五千石の年伐額を有する杉の純林及び杉雜混濬林あり。西に隣りて日影川の流域亦二千町歩の杉純林を有し毎年二萬五千石を伐採する事を得べく、七日市川の流域には五萬三千石の年伐額を有する三千町歩の杉純林及び一萬三千石の年伐額を有する五千町歩の杉雜混濬林あり、阿仁川の上流には杉雜混濬林を有し、其支流小阿仁川の流域には著大の蓄積ありて、杉の純林は九千町歩に及び年伐額十一萬石を超え、又西に隣れる仁鮎川流域は有名なる仁鮎の大森林にして巨大なる良材を産し、

餘勢尙西方に延びて一は米代川最終の支流たる母体川流域地方に至りて一萬石の年伐額を有する森林を成し、他は八郎湖に注ぐ三種川流域地方に及び、一萬六千石の年伐額を有する森林を形成せり。男鹿山國有林千七百町歩は男鹿半嶋の西端に孤立し、大岱と稱する個所の如きは一町歩材積五千石に餘り、鬱然として樹幹鑲立の狀、眞に壯觀を極めつゝありて、其の年伐額二萬六千石を算せり。

雄物川北岸地方に於ては、支流玉川の上流地方田澤湖湖南岸に五千町歩の杉雜混濬林ありて一萬石を伐採し得べく、其東境岩手縣界には面積三千町歩、年伐額八千石を有する杉ヒバ雜の混濬林あり。淀川流域なる荒川鑛山附近には六萬八千石の年伐額を有する二千町歩の杉純林を有し岩見川の水源地なる三内鶴養附近には杉及ヒバと雜木との混濬林ありて一萬九千石の杉を伐採し得べく、旭川の上流に於ては太平山の西麓より馬場目岳の東麓に亘りて三千町歩の杉林ありて毎年三萬四千石の伐採額を有し、西隣して新城川の流域に於ては千町歩餘の杉林ありて八千石の年伐額を有せり。

潤葉樹林にありては占領する面積廣漠なれども、大体に於て青森縣界地方、北部岩手縣界地方、森吉山より太平山に亘る秋田縣の中央山脈地方、秋田山形縣界に連亘する中央橫斷山脈地方等に區別するを得べく、其の主なるものを擧ぐれば十和田湖附近に二萬町歩、岩瀬川の上流

に四千町歩、早口川の上流に六千町歩、藤琴川の上流に一萬三千町歩、米代川の上流田山地方に於て約二萬町歩の面積を有する潤葉樹林あり。中央山脈地方に在りては鹿角仙北兩郡界に凡そ三萬町歩、阿仁川の上流地方に凡そ四萬町歩、小阿仁川の上流地方に六千町歩、河邊南秋田郡界に亘れるもの凡そ一五萬千町歩、合計約十萬町歩の潤葉樹林鬱然として太古の面影を存す。更に子吉川の上流地方烏海山附近には凡そ一萬五千町歩の潤葉樹林ありて老樹繁茂し、中には樹幹轟々として美良なるフナノ林相を有する部分あり。雄物川上流地方宮城縣界には四萬町歩に亘る大森林ありて多少のヒバを混淆するも其の蓄積頗る多く、又岩手縣界に亘りて六郷町附近に約一萬町歩の潤葉樹林を有せり。

斯くの如く約四千萬町歩の國有林野中其の大部分は森林にして、其の蓄材積總計約一億五千三百六十三萬石に達し、内杉蓄材約七千二百三十七萬石、潤葉樹材積約八千二百二十七萬石を算せり。實に盛んなりと謂ふ可く、秋田の森林國と稱せらるゝ故ある哉。

三、施業の方針と利用

秋田縣に於ける國有林の狀況は前項に於て既述せるが如く、面積約四千萬町歩、材積一億五千萬石を超へ、内杉七千二百萬石餘、潤葉樹八千百萬石餘を算するが、其の所轄なる秋田大林

區署に於ては林相を改善し、保續的の施業を經營し且つ國土の安定を期する方針の下に、去る三十二年以來順次施業案を編成し、已に其の全部に對し完了を告げたり。今之を最も簡明に表すすれば左の如し

作業級別	面積表
すぎ、ひのき	連年皆伐喬林 一八六、五五九、五八
すぎ、ひのき、からまつ	二〇、二四八、四九
すぎ、ひのき、からまつ、ざつ	六、九四二、三七
すぎ、ひのき、あかまつ	二〇、一八〇、九二
すぎ、ひのき、まつ	三三、八五五、六一
すぎ、ひのき、あかまつ、からまつ	四、九三六、〇九
すぎ、ひのき、あかまつ、ひめこまつ	一五、三八〇、五六
すぎ、からまつ	五、九九〇、二八
すぎ、からまつ、ひば、ねづこ	四、七二九、四四
	四、〇一六、〇〇

すぎ、ひば	同	二
ひのき、あかまつ	同	八、六七一、八九
ひのき、からまつ	同	一四、〇三二、五五
ひめこまつ、あかまつ、しらべ、さつ	同	五、三一、三〇
あかまつ	同	六、四六九、七〇
けやき、しおじ、くるみ、ほ、さつ	同	二、〇〇一、〇三
けやき、しおじ、ほ、なら、ぶな、さつ	同	四、五二〇、〇四
けやき、しおじ、ほ、さつ	同	一三、三五六、六〇
けやき、しおじ、ほ、とねりこ、なら、ぶな	同	二〇、〇五四、三六
けやき、ほ、しおじ、くり、くるみ、さつ	同	七、二一八、四九
ぶな、さつ	同	八六二、九三
しおじ、ほ、さつ	同	一、四九一、五六
さつ	同	一〇、八六三、〇八
くり	同	三、五二七、八五
なら、さつ	同	六一、五一
	同	五、八八一、三七

隔年皆伐喬林
數段喬林

すぎ、ひば	連年擇伐喬林	五、五七一、三九
すぎ、ひば、ひめこまつ、さつ	同	五、六一一、六〇
すぎ、ひば、ねづこ、ひめこまつ、さつ	同	三三、三六六、四七
すぎ	同	六、九四一、四六
すぎ、ねづこ、あかまつ、さつ	同	四、五一五、九七
すぎ、ひめこまつ、さつ	同	三、六九九、四七
すぎ、さつ	同	三三四、五八
ひば	同	四一八、七五
しらべ、ひめこまつ、ねづこ、さつ	同	二七、八四八、七一
しらべ、さつ	同	一、一五四、七五
ひめこまつ、ねづこ、さつ	同	五、八九三、二五
ひめこまつ、さつ	同	五、八二三、〇四
なら、ぶな、さつ	同	一三、〇〇二、二三
ぶな、さつ	同	一二六、八八
さつ	同	一五、二七八、八六

針濶	同	六八七、三二
ひば	連年前更喬林	六七八、八八
からまつ	同	四、一七二、八一
まつ、ざつ	連年中林	二、三一一、五五
けやき、ざつ	同	三七一、七八
くり、ざつ	同	六六、四四
くり、なら、ぶな	同	一、一四七、三五
くり、おにぐるみ、かしは、なら	同	一、二九七、二三
けやき、ざつ	隔年中林	二四七、六一
なら	連年矯林	一、二〇八、四六
なら、かしは	同	二、六九七、四七
かしは、ざつ	同	四、五四三、二七
くぬき、かしは	同	一、五六一、一六
くぬき、かしは、ざつ	同	三、八八〇、五七
くぬき、なら、ざつ	同	六、二六六、一九

一四

ざつ	同	六五八、〇〇
なら	隔年喬林	五、四四
合	計	五六六、五五三、四四

國有林の作業級別は如上示す處に依り知るを得べきが、此の内皆伐喬林作業級は概ね地勢急峻ならず然かも氣候穏和なる個所に在りて、針葉樹は輪伐期百年、整理期八十年を標準とし、濶葉樹に在りては樹種により異なるも其大材を産するものに在りては百八十年を標準とせり。此等の期間は民有地に比し稍長きが如きも、是れ國有林は多く深山にして氣候荒き所に在るが故に林木の生長遅緩なるに加へ、大材を産出する目的に出でたるが爲めなり。而かも國土保安上の關係を顧慮し同作業級に於ても大面積の伐採更新を許さざる各個所に於ては、皆伐面積を十町歩以下に制限せり。

擇伐作業級は主として地勢險阻にして氣候互寒なる個所を以てし、加ふるに専ら國土の保安上重要な個所たり。輪伐期百二十年、回歸年四十年を標準とし、直徑一尺以上の林木を擇伐するを普通とするも、地勢轉緩幹にして地味肥沃なる個所は小面積の皆伐を行ひ、跡地に造林を行ふ事あるなり。

正分皆伐作業級は水源涵養其他保安上の目的を有する林地に施業するものにして、元來擇伐

作業を以て理想の施業法とするも、實行の容易なるを尙ひて小面積の皆伐を行ひ、擇伐を實行すると同様の効果を收めんとする方法なり。而して其の斫伐材積は總材積の三分一及び五分一を限度とせり。其他前更喬林、矮林等の諸作業級は亦夫々適當の個所に在りて益々林況の改善せらる可きを期しつゝあり。其の施業の正確なるは茲に贅言を要せざるなり。

以上の如く縣内各國有林野は各事業區の地況に應じ林況に照して夫々適當の作業種を設定し伐採序に準し植栽の時を失せず、以て合理の施業を行ふに依り百年後に於ける縣内の國有林は概ね改良せられて樹種各其所を得、林木は老幼別を正し、齡級の配置整然として土地の生産力は充分發揮せられ、林木木正の生長自ら期し待つ可きものあらん。而して此の時に至り秋田を代表する杉は其の純林十九萬町歩となりて現在の面積の五倍に近く、密林鬱々、巨幹森々空を摩するの偉觀は想像するに難からず。尙ほスギ、ヒバ、ネズコ、カラマツ及び雜其他の混はる混森林は十七萬餘町歩となりて、秋田杉の名譽永久に盡くる所なきと共に、汎く必要の建築用材を生産するに至る可し。而して世人或は秋田縣が杉を以て全部を蔽ふに至らば、遂には域材の供給過多を來し、且つ薪炭材の缺乏を告ぐるに至らざるかと杞憂する者あらんも、凡そ科學の發達と共に諸種工藝進歩し、之に従ひて用途の廣き針葉樹は益々其の重要を増加し、僅かに一部の用途に過ぎざる特殊材の森林は漸次針葉樹に換り行くは當然にして、今日各國林業の

趨勢皆同轍なるか如く、殊に杉、檜は材質鮮麗、木理通直にして工作容易なるか故に、林木の霸王と稱すべく、實に我國を措て他に求む可らざるなり。加ふるに造林容易にして土地に對する要求も潤葉樹に比し少きに反し、其の收穫は潤葉樹に比して更に大なるものあるが故に、杉の造林は國家經濟上より見ても遙かに其の利益多きは言ふ迄もなし。されば秋田が杉の産地として永久に其の聲價を有す可きは時代に適合せるの計劃に基くものと謂ふ可し。

一方薪炭材の欠乏に關しても亦毫も憂ふるに足らざるなり。即ち用材と燃料とは兩立すべからざるは勿論なれども、施業案は大体の計劃にして作業種必ずしも其の標榜する樹種の成立を許さざる個所、即ち他の樹種を植栽せざる可らざる土地あり。之れが爲め杉の作業中に潤葉樹あり。又潤葉樹作業中に杉ある所以にして、假令若し作業級の全体に杉が成育したりとするも其の間伐材は以て燃料に供するを得るなり。而して保安的作業、水源の涵養其他各保安の目的を遂行するに遺憾なきを期し、他面諸種産業の發達と共に、農地、牛馬の放牧地、生草肥料の採取地等林地に對して要求する所鮮少なからざるを以て、其の調節を圖りて要求を満足せしむるが爲めに、特に林地の一部を割きて除地となし制限地となし、以て普通の施業地と區別して各々其の目的に供する事とせり。

四、利用の方法

今より十數年以前に在りては、林産物の大部分は林地に於て立木の儘賣却し、其の傍ら杉材に就きて小規模の官行斫伐造材を行ひたりしが薪炭材の如き、或は特に林地生立の儘にて賣却するを以て便利とする針葉樹の如きは立木の儘賣却するも、其他は努めて官行を以て斫伐造林を行ひ一定の個所に搬出して廣く販賣するの方針を採り來り。而して斫伐は夏季又は冬季に於て行ふが、總て地況及び操業の便否等を査察して伐採の時季を決し、其の造材は丸太と寸甫の二種にして、丸太は甲乙二種とし、甲種は長さ六尺五寸、乙種は十三尺五寸を主とし、全國孰れの方面にも適當する寸法に造材するの方針にして、特種の必要ある場合若くは注文等ある場合の外は特別長材を取る事なし。寸甫は秋田獨特の造材法にして、主として樽樽に供せらる。其の運材に至りては、從來雄物、米代、子吉の三大河川及び其の支流を利用して流木せるが、流木は損傷を來す事多きのみならず其他諸種の不利あるを以て、最も安全敏速に多量の木材を運搬するの目的を以て、數年前より漸次林道を開き、將來は地勢の許るす限り其の設備を普及せしむるの計劃なり。而して現在固定線路は、秋田縣内に於て牛馬道三、車道六、軌道二十七ありて、殊に長木澤國有林及び仁船國有林の如きは伐採量多大なるを以て森林鐵道を布設し、汽鐘車に依りて運材しつゝあり。此の森林鐵道は十二封度軌條四噸汽鐘車を使用しつゝあるが

長木澤森林鐵道は小坂鐵道二ツ屋驛より長木澤本流に沿ひて林地に至る三千九百〇六間の延長を有し、仁船森林鐵道は其の延長九千六百十二間にして、仁船より濁川に至り終點となり居れり。造材せられたるものは夏季に在りては土橋、冬季に在りては雪橋に依り小澤出をなし、軌道其他の林道を利用し或は水運に依り一定の貯木場に搬出して捲立をなすが、捲立は普通出材個所、樹種、品質の良否及び材の長短大小に依り各別にし、而して最後の檢尺をなして數量と材積とを明確ならしむ。

貯木場は縣内數十個所に在りて孰れも便宜の位置なるが、將來陸運の設備の進行に伴ひ尙ほ擴張増設の見込なりといふ。今參考の爲め現在秋田縣内に於ける主要なるものを掲記せむ。

小林區署名	貯木場名	所在地	面積	貯材置
大館 小林區署	新澤 貯木場	長木村大字雪澤字新澤	〇、三四二五	一五、三〇〇
同	深澤 貯木場	同村大字同字深澤	〇、二〇〇五	一五、三〇〇
同	代野 貯木場	同村大字同字上代野	二〇、九八二四	三七〇、〇〇〇
同	二ツ屋 貯木場	同村大字同字二ツ屋	七、六一一四	三七〇、〇〇〇
同	陣場 貯木場	矢立村陣場驛	二、五九〇八	三二、四〇〇
同	白澤 貯木場	同村白澤驛	〇、八四〇三	二四、〇〇〇

早口小林區署	早口驛貯木場	早口村早口驛	二、六四〇五	五〇、〇〇〇
同	糠澤貯木場	糠澤子村糠澤	〇、三八〇九	九、六〇〇
七目市小林區署	堂ヶ岱貯木場	澤口村大字脇神	二、二〇〇七	五、四〇〇
荷上場小林區署	荷上場貯木場	荷上場村荷上場	〇、五七一八	三、八四〇〇
同	加護山貯木場	荷上場	〇、六八一四	三〇、〇〇〇
秋田小林區署	男鹿貯木場	羽立	一、一五〇三	三二、四〇〇
同	船川貯木場	比詰海岸	〇、一〇一九	四、二〇〇
同	秋田驛貯木場	秋田驛	二、〇〇〇二	二四、〇〇〇
能代小林區署	仁壽貯木場	響村仁壽	二、二〇二八	七一、六〇〇
同	能代貯木場	能代港	七、一七〇〇	二四〇、〇〇〇
同	鹿渡貯木場	鹿渡	〇、三三〇〇	一五、五〇〇
大曲小林區署	境貯木場	境	〇、六七二七	二四、〇〇〇
生保内小林區署	廣久内貯木場	白岩村白岩廣久内驛	一、一四二六	二〇、五〇〇

是等の貯木場に集積せられたる木材は之を販賣處分をするが、近年多數の製造工場縣内各地に創立せられ、國有林より生産する杉材の大部分は製材原料として民間に消費せらるゝの盛況に進み、根株末木類の断片に至るまで屋根小羽、桶樽樽の外、果物、菓子、煙草容函の材料、壁下地材料、箸類、櫛の栓等を使用せられ、益々集約に利用せらるゝに至れり、而して丸太の

消費量最も多きは能代港町にして秋田市、大館町、土崎港町等之に亞ぐの現況にあり。能代に於ては大小十餘の製造工場を有し、特に秋田木材株式會社の如きは機械鋸約九十臺を据付け、一ケ年の製材力約四千萬石、其他工場の製材力亦合計卅餘萬石を算す。之に加ふるに猶多數の手挽工場ありて木材の消費量莫大なれども、原料生産量に比し、民間に於ける製材能力遙かに大なるを以て、各工場孰れも其の製材力を充分に發揮する事不可能の狀況なり。秋田は大小七ヶの製材工場を有し、其の製材力合計二十餘萬石に達すれども、雄物川流域國有林の出材量少なきと、民有林の生産僅少なる爲め孰れも材料の欠乏を感じつゝあり。而して從來秋田市に於ける製材の大部分は土崎を経て京阪地方に輸送され、一部は直接東京方面に移出せしが、近來陸運の量を増し土崎を経て海運に依るもの漸次減少せらるゝに至れり。大館は從來製材業者比較的少數にして、同地附近國有林に於ける生産材の多くは能代に集中したりしが、近時長木澤國有林鑛煙被害木の伐採量多となりたると共に、漸次民間製材力著しく増加し、今や能代、秋田に次ぐに至れり。土崎は從來能代に亞く木材市場として知られ、仙北郡地方より輸送せらるゝ木材多く、秋田市より輸送さるゝものも尠からざりしが、諸種の關係に依り今や昔日の如くならずと雖も製材工場大小四ヶを有し、孰れも數臺の機械鋸を据付け盛んに製材しつゝあり。以上の外本莊は子吉川流域國有林の出材集中するを以て比較的有名なるが、將來羽越沿岸線の

完成するに於ては、秋田杉は一層其の需用増加するに至る可きは、火を見るよりも瞭かなるなり。

五、造林と保護林

斫伐と造林とは密接なる關係を有し、斫伐の跡地には必ず造林して新林の造成に助むるは森林經營上最も緊要なる事項にして、逐年斫伐利用の發展に伴ひ造林事業も亦漸次擴張しつつあるか、秋田縣内國有林は施業案の編成を終りて施業の基礎定まり、斫伐跡地に行ふ年々の造林計劃確立して植伐平衡を得ると共に、人口増殖し、工業の進歩は從來利用せられざりし林地をも漸次利用區域に誘致するに至り、斫伐の増加に従ひ造林は歳と共に増加の傾向を有せり。然かも其の中に在りて天然更新法に依る所なきに非ざるも、大部分は人工植栽を行ふ。斫伐跡地の造林の外、從來の未立木地に於ける造林あり。明治三十二年以來一定の計劃を樹て着々之を實行し、現今尙ほ毎年約二千町歩の造林を施行しつゝありて、大正十年度迄には略完了すべき豫定なり。而して特別經營部事業なる未立木地の造林に在りては、明治三十三年度始めて之を實行し、又經營部事業なる斫伐跡地造林に在りては明治二十二年以來實行して今日に至り、其の造林面積を集計すれば、大正三年度末現在に於て斫伐跡地造林二萬一千八百五十五町九反

二歩、未立木地造林二萬三百五十五町七反一畝三步、合計四萬三千二百一十一町六反一畝五歩を算す。而して其の植栽事業に伴ふ苗木養成に關しては、官行を以て力めて地元にて種子を採取し且つ縣内樞要なる箇所にも苗圃を設け、直接苗木養成の事業を經營し以て強健なる苗木を得る事に努め居れり。

新植事業は春秋二季に於て之を行ひ、地帯は春季植栽のものに對しては前年秋冬の頃に之を行ふを普通とし、一町歩常植栽木数は、土地の便否、地味の良否、氣候の如何等に依り一定せざれども、普通スギ、カラマツ、アカマツ等は四千三百本植とし、シラジ、カシワ、オニグルミ、ナラ、クリ等の潤葉樹は五百本乃至二千本を標準とせり。其の補植は新植後一回又は二回行ひ、新植本数の約一割乃至二割にして、手入は新植後五回乃至六回行ふを普通とせり。而して大正三年度末現在に於ける四萬二千二百餘町歩の造林地中には、既に成育を遂げで最早下刈の必要なに至り、専ら蔓切、枝打、間伐、倒木引起等の所謂撫育的の事業を必要とするもの頗る多きが、此等の事業は今後新植事業の擴張に伴ひ年々其の面積を増加し來るのみならず、造林技術上亦特殊の技能を要し、是れが成績如何は森林施業上重大なる影響を及ぼすものなるを以て、周到なる注意を拂ひ實行しつゝあるなり。

以上述ぶる處を以て本縣内國有林に對する概略を盡せるが、別に保護林と稱するものあり。

之れは國有林施業經營上、學術研究、森林施業其他公共の利益増進上必要なる林地を、特種の取扱を爲すの制度にして、秋田縣に於て第一に之を設定せられたるは七座山保護林なり。七座山保護林は秋田縣北秋田郡七座村麻生字七座山國有林外一ヶ字にして、上小阿仁小林區署の管轄に屬し、其の面積百十六町六反三畝歩なり。此保護林は北秋田、山本の郡界に聳立せる山地にして、奥羽線二ツ井驛より一里餘にして達し得べく、國道中七座村字小繫部落の對岸に在りて、米代川其の脚下を流る。地勢は一般に急斜にして一部分は杉新混滑林なるも、其他は殆んど杉の純林をなし、天然に成立せる秋田杉の漸次伐採せられて人工林に變らんとする今日、學術及森林施業上の考証として存置せんとするものなりといふ。

七座山は南北に長く連亘する山地にして、其の間七ヶの奇巖突兀として高く懸崖をなし、古來土人の權現として崇敬する所なるが、此の七座山の對岸小繫部落に七座山神社あり。縣社にして天神七代を奉祀し、古來上下の尊崇頗る篤きが、七座山は即ち此の神社に對し風致上至大の關係を有し、鬱蒼たる山容は神社の尊嚴を一層助長せしむ。又國道上なる北秋田、山本郡界の加護山は、曾て明治十四年、先帝陛下御巡幸の砌り開鑿して國道を通じたる所にして、以後後后坂と稱し北秋の一名所たり。奇岩怪石聳立して米代川の清流脚下を迂曲し、水深く砂清くして紺碧の色を湛へ、之を隔て、一帯の老松あり。七座山の森林鬱蒼として遠く連亘し、後后

坂と相對して一帯の風光頗る絶佳なり。此の如く七座山國有林は學術及森林施業上の考証たるのみならず、附近由緒古き七座山神社、先帝陛下御巡幸に因る後后坂に對し、風致維持の目的をも含みて保護林に設定せりといふ。秋田杉の聲名と共に將來此の保護林が秋田を代表するもの、一たるに至る可きなり。

第三章 民有林

一、民有林野現況

本縣に於ける國有林の狀況及び施業計劃に關しては、第二章に於て述ふる處の如し。而して翻つて民有林野を見るに其の推定面積は公有林野約二十八萬五千町歩、私有林野約二十萬町歩、社寺有林野約三百町歩、合計約四十八萬五千餘町歩にして優に本縣林野面積の過半に達せり。然りと雖も極めて貧弱なる蓄積と放縱する利用とに委ねつゝある狀況にして、就中公有林野に於て一層甚だしきを見つゝあるなり。

此の民有林中立木地に屬するもの約二十三萬七千町歩を有するが、其の蓄積に至りては僅かに二千五百萬石を算するに過ぎずして、他は殆んど廢頽せる原野狀態にあり。殊に其部落有林

野に至りては其の管理の方法定まらざるが爲の荒廢し、是が整理開發を俟つ事急なり。是等の點を考ふるに、本縣民有林の前途は頗る遠遠なるに共にも又多望なりと言はざる可らず。蓋し是等大面積の上に睡眠せる生産力の拓殖は新たに産業の振興に齎らす所尠少にあらざればなり。斯くの如き状態に陥れる本縣民有林野の將來を如何にすべきかは、本縣林政上に於ける本義にして根本問題たり。即ち此等の荒廢せる林野の整理開發と共に本縣民有林に對する林政完備し、土地生産業の分賦も亦永遠に樹立せらるゝに至る可し。試みに立木地を見るに一町歩平均僅かに百石内外に止まり、然かも其の蓄材たるや保安林若くは奥界にして利用完全を期し難き地積に於て、劣等なる樹種に多く、有利たる樹種に至りては一部近時の植栽に係はるもの、外は、殆んど成林の影を認めざるの状況なるは遺憾に堪はず、而して民有林野の整理開發を圖るは、須らく先づ民有林中最も荒廢の激甚なる公有林野の整理開發を促進するより急なるはなし。即ち此の方針にして確立せんか、本縣民有林も茲に全く面目を一新するに至る可く、國有林と相俟て本縣に於ける寶庫たるに至る可し。

縣當局に於ても夙に此の點に留意し、公有林野の整理開發に關しては最も力を注ぎ、過去の實績に鑑みて將來を企劃し、民有林の健全なる發揚に努めん事を期し、極力是が開拓に努力しつゝあるを以て、流石に荒廢せる本縣民有林も年を逐ふて、其の面目を改めんとしつゝあるなり。

二、公有林野整理

秋田縣に於ける公有林野推定面積は實に二十八萬町歩餘に達し、内町村有に屬するもの約九萬町歩、部落有に屬するもの約十九萬町歩にして、其面積の大なる事各府縣を通じて第三位にあり。更に之を内譯するに立木地八萬町歩、未立木地二十萬町歩ありて、其の立木地たるものも積年の濫伐暴探に依りて敗殘の跡を止むるのみにして、其の大部分は林相最も低級のものに屬し、未立木地に至りては蓋し想ひ半に過ぐるものあり、本縣當局も大に之を遺憾とし、明治四十年より公有林野整理調査を開始し、調査員三組を置きて之に當て、大正二年度よりは模範林を縮少して得たる餘力を加へ、大正四年度に於ては國庫より補助を得たるを以て更に増員をなし、専ら此の方面に力を傾注し、其の促進に努めつゝあるなり。

公有林野整理開發の業務は主として部落有林野統一及入會林野整理を誘導すると共に、町村有林野の管理區分並に施業要領の作製に關し、測量及び設計を補助するに在り、斯くて施業を定め所謂基礎を鞏固ならしめて永遠の策を樹立せんとするものなるが、由來本縣公有林野が甚たしく荒廢せる主因は、同林野の多くが部落有林野及び入會林野にして、住民が自由に共同收

益を行へる結果、自然に濫伐暴採に陥りて遂に生産力を弛廢せしめたるに在るは明かなり。故に林業百年の長計を樹立するに先ちて此等の舊弊を一掃して所有の歸屬する所を明かにせざる可らず。之れ公有林野整理の必要ある所以なり。

而して部落有林野統一に就ては當初容易に其の成績を擧ぐる事能はざりしか、漸次其の歩を進むるに及び近年稍見る可き結果を生ずるに至り、大正五年度迄に其の統一を了せるもの四萬九千八百六十九町歩に達せるも、之を部落有林野總面積に對比すれば前途尙遠にして、殘餘に對して其の完成を見ん事は之を今後十數年の歲月を費さざる可らず。殊に統一未済の分は次第に頑迷固牢の町村部落有多かる可きを以て一層の困難を伴ふ可きも、林野整理統一の事は何れの方面より見るも最も急務とする處なるを以て、將來一段の熱誠と努力を以て極力之が達成を期せんとしつゝあり。而して入會林野に關しては部落有林野の統一と共に之を適當に分割するの必要あるを以て、之等は主として入會權其他の伏在せる事情を解せしめて統一を圖り明治四十三年以來之を開始し、大正五年度迄に約九千町歩の解決を得たるが、今後に於ける本縣の整理に就ては統一の奨勸と共に合同解決を行ふ可き見込なりと謂ふ。

本縣公有林野の現狀は既述の如くなるが、若し之れを荒廢に委して顧みず、將來幾年の後、縣下全体に亘りて林野統一整理普及し、其の施業の方針の定まるに俟つは、其間、林政の張弛

に關する所多大なるを以て、差當り公有林野全体に就き林野の管理方法を確立すると共に、着々施業の緒に就かしむる事も亦極めて緊切なりとし、縣當局に於ては森林法施行規則第二條に依りて一般公有林野に亘り管理區分を樹立せしめんとしたるが、素より各町村部落に在りては適當なる技術者を欠けるのみならず、比較的多大の經費を要する素より豫期の成果を擧ぐる事は容易ならざりしなり。然れども縣下公有林の分布に對し、將來如何なる廣袤の林地を得、幾何の原野を殘存せしむ可きかの總括的計數を得るの途を有せざるを以て、隨つて將來縣下林業の大計を樹立する上に於て不便捷及支障尠からず。茲に於てか本縣全土に於ける産業状態を通覽し、畜産の狀態と農耕の狀況より打算し、現在管理區分を施行せる事實を標準として一般公有林野の管理方法を定めんとせり。

而して其の調査の結果に依れば、現在管理區分を終了せる原野面積約五萬町歩の内約三萬町歩は原野の儘存置して採草の用に供し、他の約二萬町餘歩、即ち其の四割は森林經營地としたるの區分を以て殘餘の管理區分未済原野約十五萬町歩に及ぼし、之に幾分の安全率を見込みて假りに三割の林業用地を出し得るものとして計算する時は、公有林野全体より約七萬町歩の林業用地を得べく、從來森林地たるもの約八萬町歩と合せて十五萬町歩の林業經營地を得るなり。公有林野總面積二十八萬町歩中、十五萬町歩の森林經營地が、適當の施業案を設定し、所謂百

年の大計を樹立するに於ては、町村の基本財産として誇るに足る可きものあるのみならず、森林の秋田としての價値をして一層大ならしむ可きを信じて疑はざるなり。

公有林野整理開發をなすと共に一面に於て公有林野造林に對して相當の補助をなし其の獎勵を爲し來れり。即ち本縣に於ては市町村の基本財産を造成し、併せて土地利用上遺憾なからしむる目的を以て、明治二十九年より造林補助金下付規則を發布し、夙に造林の獎勵に努めつゝありしが、明治四十三年農商務省に於て獎勵規則を發布し、爾來國庫補助金交付を得るに至りしより、縣に於ても亦規則を改正し益々之が指導獎勵の結果、漸次斯業の發達に資する所多く、大正五年度迄に交付せし補助金は實に約拾壹萬四千圓餘に上れり。尙ほ將來に於ては部落有林野整理統一の進捗と共に一層造林の機運に到達すべきを以て、縣當局に於ては將來益々之が督勵に努むると共に既濟施業に對して指導監督を周密にし、以て公有林野整理開發の成果を完ふせんとしつゝあるを以て、將來に於ける本縣内公有林は整然として面目を一新するに至るや明かなり。

三、模範林と苗圃

秋田縣に於ては一般民有林に對し合理的造林の模範を示すと共に、縣及市町村の基本財産を

造成し、併せて林野生産力増進の急務を覺知せしむる目的を以て、明治三十五年より縣模範林造營に着手せり。是れ全國に於ける縣模範林經營の嚆矢にして、特に其の特色と見る可きは手入保護を地元町村に負擔せしめ、以て同林に對する愛護の念を高めしむると共に、比較的有利なる分收歩合に依りて町村基本財産の造成をなさしめんとするに在り。其の豫定面積は五千町歩にして毎年二百五十町歩宛植栽し、二十個年を以て之を完了するの計劃なり。其の用地は専ら國有林の拂下に依らんとしたれども、半途にして一部公有林に地上權を設定して經營するに至れり。爾來施業を繼續し明治四十四年度迄設定せし模範林の數三十三ヶ所、其面積は三千三百二十六町歩に達せり。

然るに一面民間に於ける造林面積は逐年増加すると共に之が技術も亦逐年進歩發達し、模範林設定當時に於ける目的の大半を達成せると、公有林野整理開發の施設増援の必要上、模範林の現狀に鑑み、大正二年度に於て之が整理をなし、先づ以て鹿渡外七ヶ所を廢し、未植栽地面積六百二十二町歩餘は地上權を解除し、内既植地五ヶ所二百町歩餘を縣有林と改稱し、其他の二千五百三町歩餘を存置して繼續經營する事とせり。而して其植未濟地の内四百四十町歩餘は除地及天然更新の用地に充て、植栽適地八百四十町歩餘に對しては、確實なる計劃の下に毎年約五十町歩宛を植栽して大正十七年度迄に其完成を期せんとし、目下其の實行中に屬するなり

然して今縣模範林及ひ縣有林の現在を表示すれば左の如し。

縣模範林現在表

(大正六年三月末現在)

模範林名	所有別	全面積	造林面積
宮川	縣有	一九一、四八〇一	一〇〇、五三〇五
早口	同	一二五、一五一六	一一四、五六一一
岩館	同	三〇、三五三三	二五、〇三三〇
八森	同	六一一四	二八、八四〇四
太平八田	同	八〇、五八〇〇	五三、六二〇八
太平中關	同	一七〇、七二〇四	一〇七、七二〇四
川添	同	八〇、四三二九	七五、七〇二〇
下北手	同	九八、二九二四	八八、三八〇八
龜田	同	六〇、七九二八	四七、四七〇二
大正寺	同	四五、一二二八	四五、〇八〇七
峯吉川	同	二八、五四二七	二八、五四二七
荒川	同	一四、八三三一	一三、〇〇〇〇

土川	同	五五、三八〇八	二九、三六一〇
仙道	同	四一、八九〇九	一〇、〇〇〇〇
西馬普内	同	七六二、二六二三	八八、四六〇〇
綴子町村有		六六、九六〇〇	六四、九七一五
七日市	同	九一、〇四一三	八二、一五〇〇
船岡	同	五五、六三一二	五五、〇〇〇〇
西目	同	一五五、五五二六	一一五、五三〇五
下濱	同	九〇、〇六一五	六四、六八二五
刈野	同	九〇、五四〇四	七一、五三一〇
八澤木	同	二二〇、八二〇五	一三七、五七二二
合計		二、五〇三、一三〇〇	一、四四七、七六二三

縣有林現在表

(大正六年三月末現在)

縣有林名	原契約	變更契約見込
鹿渡	四三、八三一五	三三、九四一四
豊嶋	一九四、五二〇九	五〇、〇〇〇〇

岩見三内	一〇一、一七二三	三四
金澤	四四、八三〇九	四六、四二一七
檜木内	六二、六八一〇	一五、〇〇〇〇
稻庭	九一、六七一一	二八、二七一〇
合計	五三八、七二一七	二七、二〇〇〇
		二〇〇、八四一一

縣模範林及び縣有林の現況は以上の如くなるが、更に縣模範林植栽に要する苗木養成の目的を以て明治三十五年より縣苗圃を設置し、爾來繼續施業し來れるか、其の設備漸次増大し、大正元年度に於ては總數八ヶ所、面積十三町四反八畝歩に達したりしも、翌大正二年度より模範林計劃の變更に伴ふ縮少と、一部植栽を了して其の要なきに至りし等の爲め漸次縮少し、四年度現在四ヶ所約三町歩となりしが、大正五年度よりは更に鷹巢苗圃を廢する事となりしを以て、今後は三ヶ所三町歩の苗圃により所要苗木を充さんとするなり。今各苗圃に就きて見るに左の如し

苗圃名	所在地	面積	養成樹種
御所野	河邊郡上北手村	一、七〇〇六	杉、扁柏、落松葉、赤松、黒松

十文字	平鹿郡十文字村	一、七〇一五	杉、扁柏、赤松
西目	由利郡西目村	〇、八一二四	杉、扁柏、赤松、黒松
合計		四、二二一五	

四、植樹獎勵及補助

秋田縣内に於ける工業用潤葉樹は漸次伐採せられ就中漆、樺、栗、胡桃、厚朴及び白楊等特に之が繁殖を圖るにあらざれば、將來本縣工業界の發展上一大障害たるを免れざるを察知し、夙に之が植栽獎勵の必要を認め、明治四十年より國庫補助金の交付を得るに至れるを以て管内適當なる地を撰定し、漆及び白楊苗圃を設置して同苗木を養成し、一面山行苗木を購入して公共團體又は施業確實なる私人に對して是が無償交付の計劃を立て、指導獎勵の結果植栽希望者逐年増加し、大正二年度迄に交付せし苗木數各樹種を通じて九十六萬本餘に達せり。而して大正三年度よりは國庫補助の途絶わたるを以て、同年度は單に縣費のみを以て九萬八千餘本の苗木の無償交付を續行し、一面從來の植栽地に於ける施業監督をなし、豫期の目的を以て事業を進行したるが、大正四年度よりは専ら植栽地の施業監督に従事しつゝありて、概して佳良の成績を示し居れり。

又民有林野造林の發展に伴ひ健全なる良苗の供給を普及せんが爲め、明治四十年より樹苗圃補助金下附規則を設け、郡市町村及び農會に於ける苗圃設置者に對し之が誘導に努めたる結果、漸次斯業の普及發達を來し、大正五年度迄に交附せし補助金五千三百五十七圓餘に達し、其の面積五町八反五畝歩餘、播種量三十六石餘を算するが、尙將來造林獎勵と相俟て充分の効果を擧げん事を期しつゝあり。

更に治水上重要な林野に就きては、明治四十四年度より開墾制限禁止に關する區域調査を始め、雄物川流域より漸次其他の河川流域に及ぼし、大正五年度末迄に調査を了せし面積九千八百六十九町に達し、第一期調査は茲に終了を告げたるを以て、大正六年度よりは詳密調査に移り、治水の根本的解決を告げん事を期せり。而して明治四十四年度以降、治水上に關係ある民有保安及開墾制限禁止地の標柱建設に着手し、大正三年度よりは其範圍を擴張して、飛砂防止、防風保安林等にも建設し、漸次一般保安林及開墾制限地に及ぼして略全部に亘り建設するの運びに至れり。斯くの如く治水調査をなすと共に荒廢地復舊調査を始め、大正元年より之が實行に着手したるが、爾來調査及設備を繼續施行せしめ、大正五年度迄に補助金を交付せるもの八千五百五拾八圓に及べり。尙將來調査の進捗と共に相當設備を施行せしめんとする豫定なりと謂ふ。

五、人工及天然造林

翻つて民有林野人工造林の状況を見るに、大正四年度に於て新植せるもの合計二千四百四十三町歩餘、植栽本數約九百四十一萬五千本なるが、内針葉樹林二千百一十一町歩餘、九百三十二萬七千餘本、闊葉樹林三百三十二町歩餘、八萬六千餘本にして、之を内譯すれば公有林野に在りては針葉樹林八百三十二町歩餘、闊葉樹林二十町歩餘、社寺有林野に在りては針葉樹林八町五反歩、私有林野に在りては針葉樹林千二百七十町歩餘、闊葉樹林十一町六反歩といふ統計を示せり。尙ほ此外竹林に於て合計一町九反歩の新植あるも僅少にして殆んど問題とならず。更らに逆りて新植の状況を見るに大正三年度二千三百九十四町歩餘、大正二年度二千三百九十四町歩餘、大正二年度二千六百三十九町歩餘、大正元年度二千町歩餘といふ統計を示し、何れの場合も二千町歩を下らず、殊に其の殆んど大部分は針葉樹にして、就中杉は最も多數を占む之を大正五年三月末の統計に依りて樹種別を示せば左の如くにして、將來民有林に於ても亦無盡の秋田杉を生産するに至る可きを想像するに難からざる可し。

民有林野植栽樹種

(大正五年三月末調査)

種類	公有	社寺	私林
杉	六四九、八〇〇〇	七、五〇〇〇	九九五、七〇〇〇

扁柏	二一、四〇〇〇	—	二、六〇〇〇	三八
松	一四六、七〇〇〇	〇、二〇〇〇	二五六、七〇〇〇	
落葉松	一四、五〇〇〇	〇、八〇〇〇	一五、二〇〇〇	
羅漢柏	—	—	〇、二〇〇〇	
檜	—	—	〇、二〇〇〇	
栗	—	—	一、七〇〇〇	
其他	二〇、七〇〇〇	—	九、七〇〇〇	
合計	八五三、一〇〇〇	八、五〇〇〇	一、二八二、〇〇〇	

更に天然造林の方面に關し下種萌芽面積を見るに公有林に在ては針葉樹林千三百三十五町七反歩、潤葉樹林三千二百七十五町三反歩、針潤混滑樹林千六十四町一反歩、針五千四百七十五町歩餘、社寺林に在りては針葉樹林三町二反歩、潤葉樹林四十九町歩、針潤混滑樹林二十三町三反歩、計七十五町歩餘、私有林に在りては針葉樹林千六百八十町三反歩、潤葉樹林一萬四千五百八十八町九反歩、混滑樹林三千六百八十四町二反歩、計一萬九千八百七十三町歩餘にして之れを合計すれば針葉樹林二千八百十九町歩餘、潤葉樹林一萬七千八百三十二町歩餘、滑混樹林四千七百七十一町歩餘、總計二萬五千四百二十三町歩餘といふ統計を示せり。縣内四十八萬町歩の

民有林總面積よりすれば敢て多しと謂ふ可らざるも、亦尠しと謂ふ可らず。尙ほ造林に附帶すべき苗木の養成に就ては縣苗圃の外町村、部落、各種團體、苗木商、個人等の經營するもの縣内到處に在りて、大正四年末日現在の調査に依れば各樹種を通じて其の苗木本数は實に三千五百二十四萬七千本を算す、内杉苗大部分を占め、三千二百二十三萬八千本に達す。又以て本縣に於ける杉造林の状態を卜知すべく、數十年後に於て民有林が整理せられ適確なる施業計劃の下に造林せらるゝに至らば、本縣の杉は國有林と相俟て永遠に全國に冠たる生産額を出す可きなり。

六、森林組合の山林會

縣當局に於ては小規模なる森林の經營を有利ならしむるため、森林組合の設立を必要なりとし、其設立を勸奨しつゝありしが、大正二年中仙北郡刈野町に於て刈野協同保護森林組合の設立を見るに至れり。是れ本縣に於ける森林組合設立の嚆矢なり。而して同組合に於ては火災盜難の防禦、害虫並に有害物の驅除豫防、其他の森林の危害防止の爲め必要なる施設を爲すものにして、現在組合員八十一名、其所有林野二百二十二町餘歩に達し、設立後日尙淺しと雖も大正三年に於ては同町公有林並に縣模範林九十餘町歩加入の申込を受け、漸次穩健なる發達

をなし豫期の實蹟を譽るに至りしを以て、其他に對しても設立を奨励しつゝあり。尙ほ山野の火入に對しては管に地方を減退せしむるのみならず、延焼の結果往々にして不測の危害を招致し、林業の進歩發達を阻害する事尠からざるを以て、縣當局は四十四年森林法の一部改正せらるゝと同時に造林地拵、防火線設定、害虫驅除豫防の場合及葦採取地、開墾豫定地の外は火入を禁止し、翌四十五年四月山野火入取締規則を發布して地方警察官をして之が取締に當らしめつゝある結果、漸次之等の危害減少するに至れり。

以上を以て本縣に於ける民有林の大要を盡せるが、別に秋田山林會なるものあり。秋田山林會は明治二十九年創立せられたるが、當時時期尙早の爲め其の成績を見るに至らずして挫折せるが、明治四十一年七月本縣に於て大日本山林會總會の開催を機とし再興の議起り、再び其活動を見るに至るものにして、主として私有林野の改善發達を促し、以て本縣林政の進展に努むるを以て最大眼目とせり。依て之が指導奨励の方法として私有林野の測量及施業案編成、苗圃經營良苗配付、會報發刊、種子及苗木賣買紹介、林産品許會開催等の事業をなし來りしが大正三年度よりは造林の根本たる種子の改良を圖るを急務なりとし、縣内の良母樹を撰定して杉種子の採取並に配付を計劃し、大正五年度迄に配付せる數量十三石に及べり。他方に於ては又弘く林業の智識を普及する目的を以て、大正五年五月より毎月簡易なる林業

第四章 林産物

一、林産價格

講義録を頒布し、購讀者約一千名の多きに達せり。而して秋田山林會は當初會費並に寄附金を以て資金に充つる計劃なりしに依り、往々活動意の如くならず、屢々遺憾の事尠からざりしが明治四十年度より年々一千圓内外の縣補助するに至り、茲に一新財源を得、四十四年度より専任技術員二名を新設し、年々四千圓内外の豫算を以て益々縣内林業の開發に貢献しつゝあり。

秋田縣に於ける林産物總價格は最近の統計に依れば約六百五拾參萬圓なるが、元より價格には變動あるを以て之を標準となすを得ざれども、大体に於て年産額六百五拾萬圓内外と見るを適當とす可し。而して國有林より産するものは一ヶ年三百萬圓内外なるが、民間に於ける重要林産物は丸角材、挽材、製板、木炭の四種なりとす。此の内丸角材に在りては大正元年二十六萬九千四百十九尺、八拾萬參千百餘圓、大正二年二十四萬六千八百八十五尺、六拾貳萬八千貳百餘圓、大正三年二十六萬五千八百八十尺、七拾四萬貳千七百餘圓といふ統計を示し、挽材に在りては大正元年七萬一千餘尺、五拾五萬八千餘圓、大正二年九萬三千餘尺、六拾九

萬六千餘圓、大正三年七萬二千餘尺、四拾貳萬三百四拾五圓にして、製板に在りては大正元年二百二十四萬五千坪、貳百拾六萬餘圓、大正二年二百二十三萬餘坪約百九拾萬圓、大正三年は二十四萬餘坪及び二十六萬五千六百尺餘を合し、百八拾五萬壹千四百四拾四圓を算せり。木炭に到りては副産物と稱すべきを以て項を更めて述ふ可し。

其他の林産物雜類に至りては薪材の貳拾萬五千圓、下駄材の貳萬六千圓、寸甫の六千圓、樽木の拾參萬壹千圓、柁木羽の八萬四千圓、包裝箱用材の貳萬六千圓、杉箸の五千圓、杉皮の參萬四千圓、長木羽の貳千圓、樹實の貳萬圓、竹材の五千圓等を重なるものとし、野生其他の産物としては椎茸の約五千圓、松茸の貳千圓、諸茸類の壹萬貳千圓、自然生蔬菜の參萬七千圓、獸皮の參千圓、種子の貳千圓等を擧ぐ可く、別に柴草貳拾六萬四千圓、石類五萬壹千圓、土類壹萬八千圓、苗木拾萬參千圓、漆類參千圓等を産し、尙ほ生産額は多からざれども五倍子、楡皮蔓及莖、竹皮、經木、松脂等殆んど枚擧に遑なく、其の方法如何に依りては將來有望のもの尠からざるなり。

斯く通觀するに、林木は悉く林区署及び木材業者に依りて丸角材、挽材、製板等に製せられ、資材よりも消化力遙かに増大しつゝあるの状況にして、一ケ年參百萬圓乃至五百萬圓に上るが、年と共に資材の供給豊富となりて其の産額を増加するに至る可く、其他の林産物と雖も

亦人工栽培其他に依り生産増大すべければ、森林の經營が今後益々經濟上重要なる位地を占むるは、敢て贅言を要せざる所ならむ。

二、製炭事業

製炭事業は秋田縣下に於ける重要なる生産事業にして、縣の統計の示す處に依れば大正元年に於ては七百三十七萬貫價格約五拾萬圓なりしが、大正三年に至り劇増して一千二百萬貫價格七拾參萬圓を算するに至り、其後益々増加しつゝあるが、統計には多く地廻物漏れ易しきを以て現在に於ては其生産額貳千萬貫を超過し居るは信じて疑はざる處なり。然るに本縣製炭は從來品質良好ならずして他府縣と拮抗する能はざるを遺憾とし、明治四十年より木炭改良の傳習を開始し、斯業に堪能なる教師を聘して主なる生産地に於て實地傳習せしめたる結果、品質の如きも逐年改良の域に進み大に見る可きものあり。特に大正四年よりは既往の成績に鑑み、在來の教師備入期間六ヶ月を改めて全年を通し、各地に一ヶ月宛の期間を以て傳習せしむる事として益々奨勵し、其の品質の優良と包装の一致とを期し、以て本縣林産物の重鎮たるに背かざらしめん事を期しつゝあり。

元來本縣の製炭が品質粗惡なりと稱せられしは、鐵道の開通が東北に於ても最も遅れたる關

係より、地廻りのみに甘んじたるも其の原因なる可く、又炭材として南方のものに比し劣れる點もありしならん。然しながら現在に於ては移出炭は面目を一新し、大正五年山形に開催されし奥羽聯合共進會に於ても、審査官が「秋田の木炭は品質粗悪なりとのみ思惟せしに殆んど劣等品なく、他縣のものに比し能く揃ひ居れり、秋田の木炭は何時の間に斯くの如く進歩せるならん。」と感心せしに徴しても其改良の跡を窺ふに足る可し。斯く良炭の製造と共に一面に於ては杉の枝條を以て製炭し居るものあり。之れは北秋田、山本、南秋田其他にて散見する處なるが、此の木炭は多く鐵道院土輪工場に需用せられ居りて、原料木の利用上よりすれば頗る有利なるものと謂ふ可く、秋田大林區署に於ては目下是等の炭に就て研究の歩を進め、將來之を以て比較的良炭を出すの工夫をなし、惹ては杉造林地にして不便なる地方等に於ける間伐材をも此方面に向くる意嚮なりと謂へば、是又特種用途の製炭として生産を増加するに至る可し。

更に本縣より他府縣に移出する木炭の状況を見るに、主として東京地方なるが、年々五百噸以上の木炭を積出す停車場は縣内に十二個所ありて、之のみにても一萬六千八百餘噸に達し、貫に換算すれば四百五十七萬餘貫にして、鹿角郡を除く各郡（鹿角郡は殆んど全部鐵山及地元）に吸収するの停車場約二十個所より東京方面に移出するものと合算すれば、恐らく一千萬貫を超過すべし。而して是等移出向木炭は比較的改良せられ居れるも、地廻物は尙ほ品質粗悪、

包装不整にして改善の餘地尠からず。之れが改善を期するは刻下の急務とする處にして、本縣木炭に關して將來採來る可き改善方法は、現在林の利用程度を高むる事及び原料林を今日より經營準備するの二點に在りと謂ふ可し。然らば本縣より參千萬貫の木炭を産出する敢て難事に非ざるを信じて疑はざるものなり。

三、椎茸の栽培

椎茸の栽培は最も有利なる事業にして又將來頗る有望なる副業たるなり。本縣に於ても森林の遺利を開發する上に於て、縣内僻陬地に於ける椎茸の栽培は最も適當なる副業なりとし、明治四十年來本縣に於て教師を聘し、各町村に傳習には講習を開催したるが、從來本縣統計に現はれ居る椎茸の産額は乾燥せるものに非ずして、皆山に入りて天然生ものを採取し其儘附近の市場に出せるもの、統計にして、爾來人工に依り栽培し居るものなり順序立て、乾燥仕上げをなし、縣外又は國外に出すか如きものは殆んど皆無と稱するも過言に非ざるなり。然して縣の奨勵以來約十年を算するも、今日漸く其の緒に就けりといふのみにして依然として其の發生後季は於てのみ生の儘にて食し、其の年産額は明治四十三年は三千三百八拾圓、翌年は三千三百九拾餘圓にして、大正三年の産額を見るに僅かに四千四百八拾餘圓に増加せるに過ぎざる

なり。而も一貫目の價格貳圓五拾錢内外なるを見ても乾燥せるものに非ざる事を推知し得るなり。

聞く處に依れば大正二年に於て凶作に對する事業として南秋田、平鹿其他の郡に於て約四萬本の榊木を寢込み、其の以前に於て由利郡の各村其他に於て合計約四萬本を寢込みたりといふを以て當然市場に出づ可きに、今日に至るも之を出さざるは失敗に歸したる結果ならんか。蓋し椎茸の人工栽培なるものは甚だ容易なるものなるに拘らず失敗多きは、畢竟するに手入不全に基因する處たらすんばあらず。或は秋田縣は椎茸の栽培に不適當ならずやと疑惑を抱く者も尠からざるか、一方に於て頗る優良なる成績を挙げつゝある地方もあり、決して不適當ならざるのみならず、本縣の氣象上椎茸の發生には極めて適當なるは専門家の等しく立証する處たり。只品質の點に於ては暖國地方に幾分劣るを免れざるやも知れされども、量に於ては確かに多く發生する要素を備へ居るなり。夫れは空氣中に比較的濕氣多き爲めにして、而も此の濕氣多きに依り偶々他の無用なる雜菌の繁殖を助長する關係となるも、栽培者にして常に之を念頭に入る、時は栽培上少しも碍害とならざるなり。

繙つて椎茸の需用を見るに、年々支那其他へ輸出する額のみにて百五拾萬圓を超へ、國産中重要なるもの、一に數へらる。此の輸出額は我國に出來得る丈けの高を輸出するものにして、輸入國に取りては尙ほ以上幾何にても輸入を望みつゝあるなり。之に日本國內に於て消費せらるゝものを合すれば四百萬斤、三百萬圓を出づるが、之を各府縣に割當つれば一縣當り約八萬圓に上る割合なり。然るに本縣の林産額僅かに三四千圓に過ぎざるは遺憾とする處なるが、縣に於ては大正四年より方針を改めて特に傳習教師を聘する事を廢し、隨時係員出張指導に當る事とし極力獎勵に努めつゝあるが、本縣の如き榊木の用材としては各村附近に於て容易に得らるゝのみならず、價格の如きも殆んど伐採運搬賃位のものなるを以て、近き將來に於て人工栽培の椎茸も亦本縣林産物の要位を占むるに至る可きなり。

四、醋酸石灰と紫蕨

醋酸石灰の製造も林産物として將來有望のものたるを失はず。殊に秋田縣の如き、森林に富む縣に於ては林産物中の重要な地位を占む可きなり。秋田縣に於ける斯業としては仙北郡生保内村に秋田林業株式會社のあるなり。醋酸石灰製造を目的とし、木炭をも産出するが大資本を投じたる大規模の經營にして、創業日尙淺きを以て其成績を云爲すべからずと雖も、將來の發展を豫期せられつゝあり。然して其他に於て木炭製造を主とし木醋酸製造の試験的經營をなし居るものあれども未だ數ふるに足らざるなり。

本縣としては醋酸石灰の製造素より可なりと雖も、一ケ年貳千萬貫金を生産する木炭の製造に際し煙として放散するを利用し、所謂廢物利用的に醋石製造をなすを以て有利とすべし。而して個人的の經營としては第一に相當の資本を要するを以て廢物利用、勞動補給の目的に添ふも、普通製炭就業夫としては其の資本に苦しむのみならず、品質の一定を保つ事困難なるを以て取引に際し差支を生じ、且最初より既に先方の信用薄しきを以て自然取引堅實に行はれ難き欠點あり。若し又之を合同して一手に出すとすも各製品の品位を一定するは困難にして寧ろ不可能事に屬する。されは製造業者は單に木醋酸の製造に止むるを以て得策とすへし。

即ち製炭地に一個所の醋酸石灰製造所を置き、附近一帯の木醋酸を此の一個所に集めて醋酸石灰を製造するの組織にして、斯くすれば品位一定するのみならず其の装置も一個所にて足るを以て經濟的にして且頗る得策なりとす。之が設備に關しては炭燒釜一個に付き土管、樽、石油空罐等 醋酸石灰採取用の器具代として數圓を要し、其の十竈分位のものを集めて醋石製造に當るとせば装置費として少くも數拾圓を要するが、若し共同して之れか醋酸石灰製造所を設くる時は共同的利益を得べし、或は別に醋石製造の企業者を置いて製炭者より木醋酸の儘買取らしむる様にすも一法ならん。

紫蕨は乾物野菜として貯藏携帶並に滋味の上に極めて良好なるを以て、陸海軍の食需品とし

て缺く可らざるものとなり居るのみならず、一般家庭にも多く食膳に上せらるゝものなるが、此紫蕨は山地雪深き地方に於て特に優良なるもの生産せられ、本縣の如きも近年其の産額著しく増加し、各郡共産出を見ざるなき有様なるが、就中産額の多きは仙北郡にして大正四年には七千五百貫目に及び、品質の優良なるもの尠からず、又産額は約一千貫目に過ぎざるも由利産は一体に優良を以て名あり。其他平鹿三千八百貫、雄勝三千五百貫等仲々盛んにして最近縣全体の産額を見るに左の如し。

	大正二年	大正三年	大正四年
青	一、三五〇貫	一、五七〇貫	一、四八〇貫
天	一三、七九一	二四、三〇五	二四、九五三
計	一五、一四一	四二、五八五	二六、四三三

而して其の相場は品質に依り差異ありと雖も大体の平均は一貫目青千壹圓餘、天千七拾錢位にして總産額約貳萬圓を算す。紫蕨は山深く地味の良き所に消雪後直ちに發生するものにして強力なる宿根性の天産の野菜なるを以て、人工を以て増殖を計るは困難とする所なれども、其の採取の周到と製法の改善とは更に發展の餘地充分にして、副産物として閑却すべからざるものたるなり。

五、有望ある副産物

松脂採取本縣の如き松樹の多き土地に在りては有利なるにも拘らず年産額三四百貫に過ぎざるが、我國に於ける松脂の需用は頗る多く、國內に於て採取せらるゝ以前に毎年約百萬圓の輸入を見つゝあるが、其用途は廣汎にして製紙用艶出原料として必要であり、或は假漆塗料其他に用ひらる。縣内に到る處松の樹多きを以て之れが採取を奨励の方針なるを以て、今後相當の産額を見るならんか。

植物油としては黒文字油及び櫻油は共に香油として多少の産出を見ると現在に於ては殆んど誘るに足らざる状態に在り。然りと雖も本縣林野には黒文字油の原料たる可き枸樟及び椿油の原料たる山櫻の豊かなるありて、其の設備に巨資を要せざるを以て副業的に奨励する時は相當の發展を見る可く、松脂より精製するテレピン油(松精油)及び松の根株を乾溜して原油を得る松根油の如きも、土地に依りては適切たり。

杞柳の栽培は鹿角郡及由利郡の一部に於て行はれ、郡當局に於て之れか奨励をなしつゝありて、秋田山林會に於ても亦適地に栽培を勧め居るが、現在に於ては小規模なるも堅實なる發達をなしつゝあり。其の製品たる柳行李の如きも僅かに縣内一部の需用に應じ居るに過ぎざるも

元來杞柳栽培は土層の極めて淺き所には土地の極めて堅き所の外は如何なる土地にても適するを以て、本縣の如きに在りては大河川沿岸の荒蕪地を新開して養成を計るに於ては、將來杞柳工業の勃興を見るに至り、本縣の特産品として聲價を博するに至らん。

森林の副産物として澱粉を採取する事は本縣に於て蕨の地下莖、カタクリ球莖、クツ、山百合等に就て行はれ、就中蕨の澱粉は最も盛んに採取せらるゝが、蕨の根花は一ヶ年に於ける産額實に拾萬圓を超え、昨今の如き澱粉騰貴の時期に在りては恐らく倍額以上の生産價格を示し居る可し。然かも目下尙ほ廢物利用的なる檜實より澱粉を採取するの法は閑却せられ、檜實は徒らに地下に埋没せられ居るが、縣當局に於ては之を遺憾とし、副業として檜實より澱粉及びサラシ餡を採取する方を機會ある毎に説き、由利郡の一部には之れか採取をなしつゝある村落もあるを以て、蕨の根花と共に將來副産物として相當の産額を見るに至る可し。

尙ほ本縣内各地にて行はるゝ特殊の仕事としては南秋田郡のイタヤカエデの材を薄く剝ぎて箕を作り多く北海道に移出して年産額五千圓に上り、由利郡の一部にては杉皮を編みて箕を作り櫻の皮を挾みて其の丈夫を計り、又各地山中の谷地にある龍の鬚で蓑、笠を作り、ミナノキ、マンダ、ウリハダカエデの皮にて蓑及び繩綱を造り、カツラ、ケンボナシ、オツコ、スギ等の葉を以て又は線香を製造し居るもあり。何れも其の産額大ならざれども副産物として相當の收

利を見つゝある。

要之、本縣の林産物は本縣諸物産中最も樞要の地を占むるが、將來に於ける發展の餘地頗る多きは叙上の大要に於て之を明かに推知し得へしと信ず。本縣の林産物の前途や實に多望なりと謂ふ可きなり。

第五章 製材工場

附 木材商

一、木材市場

秋田縣に於ける木材の消費量の最も多きは能代港にして秋田、大館、土崎等之に亞ぐが、縣内に於ける移出人は能代、土崎、本莊等一部船便に依るの外は主として境、秋田、鹿渡、能代、早口、大館、陣場等より或は丸太として、或は製板として移出せられつゝあるが、木材市場の狀況は能代及土崎に依りて大体の狀勢を推知し得べし。即ち之を最近十ヶ年の統計に依り表示すれば左の如し。

能代市場移出額

年 別	板 類	寸 甫	割 物 類	丸 太 角 材	總 額
明治三十八年	七六三、一七四	一〇四、〇九四	四三、〇五二	九五、二五一	一、〇〇五、五七一
同 三十九年	九九二、八三六	八六、四四五	八八、九二八	七一、二〇九	一、二三九、四一八
同 四十年	一、六〇八、五二八	一一七、五四九	二四、四二四	一一二、一一二	一、八六二、六一一

土崎市場移出額

年別	製材	素材	材	總額
同四十一年	一、四五三、一七六	二〇、〇五〇	一〇八、三一六	一、七三七、八三〇
同四十二年	一、四八一、七二三	一五五、八〇一	一五六、〇九〇	一、九七七、八二八
同四十三年	一、三七八、五七四	一四九、〇六四	一一八、六一六	一、八〇六、四〇三
同四十四年	一、七四三、八一八	四三、三七五	九八、三八五	一、九九三、三〇九
大正元年	二、〇七七、九五二	二八、三四七	一〇三、四一三	二、三五二、六四九
同二年	一、九三六、七六八	二一、三九八	八八、九一六	二、一八一、六一九
同三年	二、三六七、九五三	一四、〇〇九	一一三、九八七	二、五八二、三二一
明治三十八年	六一三、八三七	三五、六〇一	六四、九〇七	六四九、四三八
同三十九年	三九四、九六六	六一、九〇七	六七、二〇〇	四四六、八七三
同四十年	四〇五、三九八	六七、二〇〇	一〇六、七一五	四七二、五九八
同四十一年	三二八、四九〇	一〇六、七一五	九八、〇九五	四二五、二〇五
同四十二年	二六二、一一八	九八、〇九五	六六、九三八	三六〇、二一三
同四十三年	一三九、六九二	六六、九三八	三四、二五七	二〇五、六三〇
同四十四年	二八九、七二七	三四、二五七	二一、一八八	三二三、九八四
大正元年	二七一、四九九	二一、一八八	四三、八八四	二九二、六九七
同二年	二八三、〇四三	四三、八八四	九、〇八二	三二六、九二七
同三年	三七八、五一五	九、〇八二		三八七、五九七

以上の如き状況に在りて尙は年と共に斯業隆興を來し、製材工場等に於ても今や殆んど本邦木材界空前の好況を呈しつゝあるが、其の盛觀は眞に從來の記録を破れるものなり。吾人は更に項を更めて縣内の重なる製材並に林産製造工場の概要を叙す可し。

AM 秋田木材株式會社

秋田木材の地置 本邦は國土三分の二以上の林野を有し、世界森林國の一に數へらるゝのみならず、建國久しく民衆多くして木材の需要も頗る夥多なるに拘らず、伐木製材及賣買の方法は常に舊慣を踏襲するのみにして、未だ著しき進歩改良の點を發見する能はず、要するに今尙幼稚の域を脱せざるものと謂はざる可らず。近年に至り機械力を製材業に應用するもの漸く増加したりと雖も、惜むらくは概ね小規模の事業に屬し、設備不完全にして其成績の大に見る可きもの多からず。斯かる状態に在りて秋田木材會社が率先して大規模の製材事業を起し、其の事業着々として今や獨り本邦第一の製材會社たるのみならず、東洋諸國に於ても其の比を見ざるの發達を遂げたるは、實に我か木材業の一大進歩にして、隨て秋田木材會社の地位は頗る重要なるを知るを得べし。而して秋田木材會社が本邦木材界に貢獻せるものとして一般に認識せられ居るは言ふ迄もなき事なるが、就中其の主なる點は左の數項に基因するなり。

一、本邦に於て始めて完全なる機械挽材の薄板を製出し製材事業上に著大の進歩を現はしたること

二、製材見本賣買の習慣を創始し其の賣買取引を便利ならしめたること

三、廢物を利用して新規の製品を造り出材料の減耗を減少したること

三、林産物の販路を擴張して森林の収益を増加したること

△秋木沿革の概要 抑も秋田木材株式會社の成立されしは去る明治四十年三月にして、能代挽材株式會社、秋田製材台資會社及び能代材木合資會社の合同に依り創立さる。能代挽材會社は去る明治三十年の創立に係り、當初資本金五萬圓の合資會社なりしか、三十四年來組織を變更して株式會社とし同時に資本金を拾萬圓に増額し、其後明治三十五年と三十六年度の兩年に引續き各拾萬圓宛の増資をなして都合參拾萬圓の資本となし、創業後年々事業を擴張して遂に本邦最大の製材會社となれり。秋田製材合資會社は明治卅四年中能代士崎秋田の同志者數名の發金を以て設立されたるものにして、資本金五萬圓なりしも其の營業成績は終始良好にして年々事業の擴張を行ひ、能代挽材會社に次ぐ有力なる製材會社として世に知らるゝに至る、能代材木合資會社は明治十九年以來秋田縣内に於て盛んに伐木業を營める久次米商店の後繼者として、明治三十年資本金五萬圓の合資に成り、重に杉寸甫(割木)及角材丸太等の伐出賣買及委

托賣買を營み、他の二會社が製材工場を設けて板類の製造販賣を専務とするものとは自ら營業の方法を異にせるも、營業上に於ては相應の成績を示して縣内同業者間に重きをなし得たり。以上の三會社か明治四十年に至りて時勢の進歩に鑑み、合同して一大木材會社を組織し一層事業の發展を計るの必要を認め、此の目的を以て今日の秋田木材株式會社を創立し、之に三會社一切の資金權利を譲渡すと同時に一大増資を決定せるなり。

△大規模の營業狀態 今や全國に冠たるのみならず東洋一と稱せらるゝ秋田木材會社の本店は秋田縣山本郡能代港町に在り。而して現在大坂、名古屋、東京、青森、小樽、根室、網走、猿拂、聲間、稚内等に支店及出張所を有し、能代、青森、大坂、根室、稚内等に規模大なる工場を有せり。又別に機械製材事業、瓦斯事業、植林事業、海上運送業及び開墾、牧畜等を營み居るか、目下直營せる以上の各事業の外に、出資に依りて他の個人又は會社と共同經營をなしつつあるものに、秋田縣北秋田郡扇田町の淺野製材株式會社、同鹿角郡花輪町の鹿角電氣株式會社、同郡小坂町の小坂電氣株式會社、秋田市の秋田瓦斯株式會社、秋田縣南秋田郡船川港町の船川電氣株式會社、滿洲安東縣の株式會社安東縣大倉製材所等あり。以て同會社の事業が如何に盛大なるかを推知するに足らん。資本金は貳百萬圓(内拂込金百貳拾萬圓)にして外に諸積立金四拾萬圓を有し、數千の役員、職員、職工、人夫等は不斷の活動をなしつつあるか、今

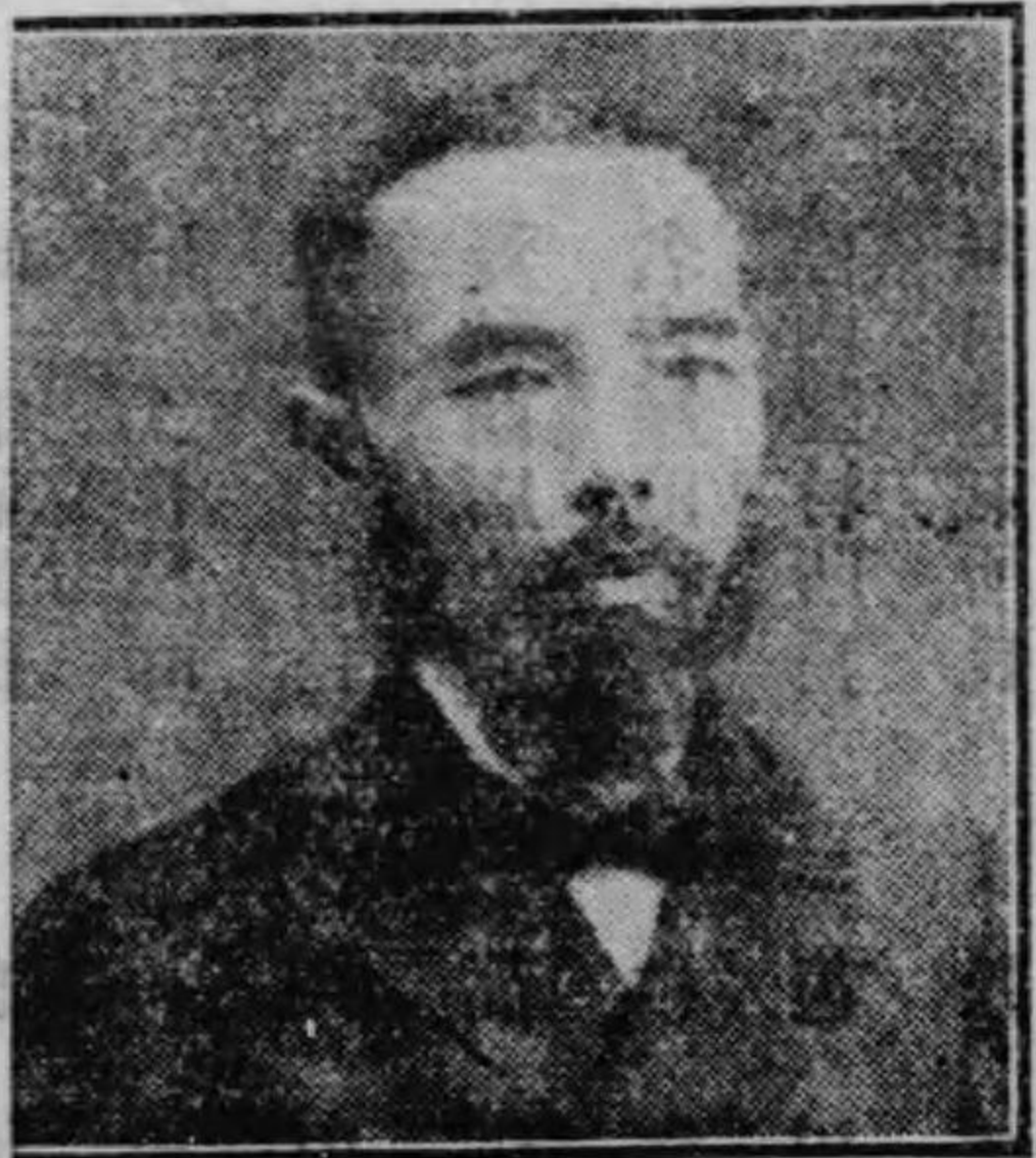
第五章 製材工場

三會社併合後に於ける秋同會社の營業狀態を見るに、每期配當歩合及毎期末に於ける積立準備金現在表左の如し

每期配當歩合	諸積立準備金
第一期(明治四十年度)	二〇〇、〇〇〇
第二期(同四十一年度)	一一〇、〇〇〇
第三期(同四十二年度)	二二七、五〇〇
第四期(同四十三年度)	二七八、五〇〇
第五期(同四十四年度)	三七五、〇〇〇
第六期(大正元年度)	四二五、〇〇〇
第七期(同二年度)	四三五、〇〇〇
第八期(同三年度)	四二〇、〇〇〇
第九期(同四年度)	四四五、〇〇〇
第十期(同五年度)	五七〇、〇〇〇

△秋木△井坂社長 秋田木材會社は前述の如く能代挽材、能代材木、秋田製材の三會社の合併せるものなるか、三會社共に現秋木社長井坂直幹氏の創始統轄せるものにして、形式に於

て三會社の合同なれども事實に於て單に分立せしものを統一せるに過ぎざるなり。されば秋田木材會社は井坂直幹氏に依りて生れたりといふに至當とすべし、同會社に取りては其の産の親であり且又補導者たるなり。井坂社長は應大材料の出身にして明治三十年能代挽材を創始し本邦に於ける機械製材の嚆矢たる以來、或は竹村榮三郎、秋山與次郎兩氏と共に能代材木會社



秋田木材株式會社社長井坂直幹氏

を起し、或は竹村榮三郎氏及秋田、土崎の有志と謀りて秋田製材を創設し、之か合併を斷行して秋田木材會社今日の盛大を來す迄の二十年間、常に献身的努力をなし會社を以て其の生命となせり。其の時世を達觀するの明と不斷の努力とは遂に能く秋田木材會社として今日あらしめたる所以なり。氏本年五十有八、大弓に興味を有し邸内に大弓塲を設け、秋田縣内有數の名手として知らる。

△秋田木材の幹部 爾て同會社の重役及び幹部を見るに、其の多くは能代挽材、秋田製材、能代材木の三會社創立當時より會社に在りて貢献せる人々にして、左の諸氏に依りて活動をな

- 取締役社長 井坂直幹
- 常務取締役 菊池季吉

均約六千三百立方尺、此の原料使用高一萬五百立方尺にして、製品は主として東京、北海道筋京都、大坂、四國、九州等に仕向くるも朝鮮、臺灣、北海道其他の地方にも移出しつゝあり。今過去五ヶ年の製材高及賣上金高を見るに左の如くなるが、此の外一ヶ年拾萬圓前後の賃挽をなしつゝあり。

年 度	製 材 高	製 品 賣 上 高
大 正 元 年	二一四、三〇〇石	一、五一七、一〇〇圓
同 二 年	一三五、三〇〇	一、一〇一、二〇〇
同 三 年	一五二、一〇〇	一、〇三一、八〇〇
同 四 年	一四二、八二六	九七九、〇八九
同 五 年	一七三、八五七	一、二三四、四〇四

△各支店及び工場 更に轉じて各地支店、出張所及び製材所等を見るに大坂支店は大坂市南區西寶北通四丁目に在りて明治四十一年の設置に係り、水運の便を圖りて市の西南隅木津川下流に沿ひ、灘波嶋の對岸に建設せり。工場は其全力に於て一箇年原料八萬三千石の製材を有す、主として北海道松材を用ひ、製品は畿内以西及び朝鮮支那等に販賣し、尙ほ輸出向樽材の挽立をもなせり。名古屋出張所は同市中區下塀町にありて大正元年の新設なるが、秋田材及

北海道材の販賣を主とし、尙ほ木會材の販賣をもなしつゝありて、大正五年の總賣上高四拾三萬餘圓を算す。東京出張所は深川區正鶴歩町に在りて専ら本支店其他同社と關係の製品を東京市内の取引店に賣込み、兼て中央に於ける諸般の社務を辦理す、北海道に在りては小樽、根室網走、猿拂、聲間、稚内等に出張所又は製材所を有するが、小樽出張所は同區花園町に在り。一ヶ年直接間接に同所の手を経て船繰するもの三十四隻、根室出張所は根室町字發足に在りて年參萬五千石の製材力を有する工場を有し、北見國網走町にある網走出張所は主として伐木事業をなしつゝあるが大正五年度に於て七萬八千石餘の出材高を示せり。猿拂出張所は北見國宗谷郡猿拂村にありて牧畜事業を經營し、併せて伐木事業を營みつゝあるが、去る大正三年度に於ては松角丸太材其積出高三十一萬石を算し、稚内出張所は原料一ヶ年六萬七千石を消費するの製材力を有し、大正五年に於ける製品賣上高は拾五萬圓を超えたり。此の外根室、稚内に直營の電氣所あり。以て北海道に於ける秋田木材會社の勢力を推知し得べし。尙ほ青森製材所は青森市外仲館にありて、大正三年青森大林區署青森製材所を拂下たるものなるが、職工人夫百名を役し、大正五年の製材高四萬三千石、販賣價格貳拾四萬三千餘圓に達せり。

△其他の各事業 本支店出張所等の狀況は大体如述せるか、別に本店に於ては機械製作事業を營み、電氣事業を直營し、又會社の基礎を永遠に確立するの目的を以て、大正元年度より

秋田縣山本郡八森村字眞瀬澤に造林地をトし、十ヶ年計劃にて植林をなしつゝありて、其面積五百六十六町歩、杉苗約二百四十萬本を植付く可き豫定なり。尙ほ電氣、瓦斯、牧畜、運送其他に關し記す可き事多きも、木材と直接關係なきを以て茲には省略すべし。要するに秋田木材會社の盛運に關しては今後一層期待するを得べし、縣國の爲め其の發展を切望して欺まざるものなり。

杉本製材所

△△△△△△△△△△ 木材界の活況 木材界現時の活況は、既往數十年間未だ曾て其の類例を見ざる處なりとす。かるが故に杉の生産地として天下に其名冠たる秋田縣内木材業者の發展實に眼醒しく、新設工場の續出を見る。眞に木材界空前の盛況と謂ふ可し。就中其の中心點たる能代港町に在りては、大小木材業者の活動に依りて活況を呈し、木材成金縣内到處に簇出するを見る。歐洲大戰亂の餘慶、獨り大阪を中心として關東、關西及び中國九州にのみ占められつゝあるの時に際し、鑛山業と共に木材業者の恩惠を蒙る。東北の天地としては寧ろ異彩と稱す可き也。木材界今後の觀察に對しては、勿論人に依りて所見を異にす雖も、大体に於て今後此の好景氣の持續するといふ點には殆んど一致せざるなし。蓋し木材業者萬歳と稱せざるべけんや。

△△△△△△△△△△ 材界の幸運兒 活況を呈せる木材界に於て、特に異常の發展を來しつゝあるものに、杉本製材所あり。秋田縣山本郡能代港町材木町に本店を有して盛んに製材業を營み、大館驛前及び土崎港町に出張所を有し製材の販賣及材料購入をなし、其の隆々たる發展振りは他の羨望する處たり。然かも個人經營にして此の如きは縣内多く其の比を見ざるなり。其の經營者を誰とかなす。實に本縣木材界の幸運兒にして、慧眼と非凡の才を以て、同業者間に認識さるゝ杉本國太郎氏其人なり。併乍、今日の盛大を來しつゝある杉本製材所も其經路を尋ねれば、所主杉本氏の苦心慘憺、千苦萬苦の賜物なり。而して今日の成功は失敗の經驗に基因すること、尠少ならざるを思はざる可らず。

△△△△△△△△△△ 奇利慧眼奇利を博す 杉本國太郎氏は靜岡縣高田郡の生れにして本年四十三の少壯血氣の働き盛り也。明治三十七年甫めて秋田の縣境とも謂ふ可き院内町に居を定め、小規模の製材業を營む。規模素より大ならざるを以て巨利を博せざりしも、三十八、九の足掛三年間に於て約參萬圓の純益を得たり。斯くて秋田縣に於ける製材業者として多少の地歩を占むるに至れるか、四十年同志と相謀り資本金貳萬四千圓を以て神宮寺製材合資會社を創立し、其の經營の任に當る。然りと雖も事志と違ひ、木材界の不況は遂に損失を重ね、四十四年事業不成功の爲め同會社を解散するの餘儀なきに到れり。然も氏は落膽せず、倦土重來を期して木材仲

買商となれり。當時氏の資本金僅かに貳千金、之を運轉して當時官營たりし代野製材所及青森製材所より製板を購入し、舊來の取引先なりし東京其他に販賣をなして、僅少の利得を擧げつゝ機の到るを待てり。時なる哉、東京吉原大火に遭遇し、河村瑞軒の故智に倣ひて火災終熄せざるに杉板の買占を斷行したるに慧眼誤またず瞬く間に約貳萬圓の奇利を博し彼か發展の端緒は茲に拓かれたり。突差に。買占を斷行したるが如き凡庸人の能くする處に非ず。

杉本製材所の特徴 斯くて大正元年秋田縣山本郡能代港町に居を卜して木材業を營みしか同年十一月現在の材木町にある小規模の機械工場を譲り受け製材業を營みたるに、從來錚々たる大會社、工場等を有する同業者に伍して遜色なきのみならず總ての場合に於て彼の先見は利益をなして生れたり。而して其の事業年と共に發展を來し今や資本金拾數萬圓を運轉し工場に於ける設備としては原動力に汽罐一臺及び汽機一臺(百馬力)を有する外、大割堅鋸一、小割堅鋸二、バンド裝置堅鋸一、其他小割丸鋸三を有し、別に桶屋工場、雜割工場、鍛冶工場等あり、製函器四、大小倉庫三ありて最近三ヶ年に於ける資材消費高は大正三年度に於て杉材六萬石、大正四年度七萬石、大正五年度八萬石の割合にして、其生産高は大正三年六尺四分板三萬六千石、四年四萬三千七百十石、五年四萬八千石を出せり。其工場は米代川に臨み、敷地面積三千坪餘、専用軌道ありて米代川に依りて流下したる木材を直ちに工場に運搬し、頗る至便

なり。而かも其のレールは各工場に連絡し、人力を省く事大なり。工場の構造に至りては氏の最も意を注ぐ所にして、從來各工場の床は概ね木造にして火災の原因は多く之れより起るを以て深く此點に留意し、全部煉瓦又はセメントを以て築造し、電燈を裝置す。斯くの如きは秋田木材も尚ほ及ばざるの點なりとす。工場の二階に目立工場及製造工場あり、之れは土地の經濟を圖りたるものにして、其の製品に對しては細心の注意を拂ひ、最も好評を博す。然して味相箱、林檎箱等の季節物も注文に先ちに製造し置くを以て、如何なる場合に於ても注文に應じ得るのみならず、能く乾燥し居るを以て、需用者の歡迎する處となりつゝあるなり。

前途益々好望也 杉本製材所は信用を以て第一の資本とす。常に職工備夫百餘人の活動に依りて製造されたる製品は、此の信用厚きか爲め販路は東京、北海道、關西、東海道、山形を主とし各方面に及べるが、大館製材株式会社及平泉製材所とも多年大なる取引關係を有す大館製材會社よりは多年確實なる取引をなせるの故を以て金杯、銀杯、銀製花瓶等を贈らる。以て信用ある營業振りを推知し得べく、製品の聲價に至りては、博覽會其他にて一等賞金牌を授與せられたるに徴して之を窮知し得べし。所主杉本氏は性磊落にして能く部下及職工を愛し特に職工優待に關して意を注ぎつゝあるが、選まれて現に能代町會議員たり。又製板同業組合の創立せらるゝや推されて其評議員となり、且本年數百町歩の山林を購入して今後原料維持の

永遠の計を樹て、今や個人經營として會社工場を凌ぐの得意時代にあるが、尙之れに甘んぜず設備の改善、事業の發展に苦心し、夙夜止む事なし。然かし公益事業に對しては敢て出金を惜まず、進んで事をなし加ふるに義侠に富む。其の今後の發展や期して待つ可き也。

六八



秩父製材所

秩父製材所は秋田縣山本郡能代港町材木町に在り。能代に於る木材界の老舗、秩父治右衛門氏の經營する處なるが、秩父材木店は明治十六年の創業にして、年と共に其の營業發展するに至りしが、木材界の活況を機會として更に一大發展を企圖し、今春來製材工場の建築に着手し、今や舊來の木材部と共に製材事業に向ひて着々として其の地歩を堅めつゝあるなり。而して所主秩父治右衛門氏は能代港町に於ける有力者の一人にして、現に同町一級選出町會議員にして且つ山本郡會議員等の公職に就けり。

其の製材工場の計劃成るや、四圍の事情の纏綿たるにも拘らず斷然之れが實行を期し、大正六年三月起工し、同年七月下旬機械の檢定を経、八月上旬其の落成を見るに至れり。工場の設備に至りては頗る完全なるものにして、耐火構造となし、間口二十間、奥行十間なるが、工場には軌道を布設して米代川沿岸より材料の運搬に便せり。此の外倉庫二、仕分場二及び事務所一

棟を有し、其の敷地面積二千坪を算するが、尙ほ目下仕分場の増築中にして近く其の竣工を見んとしつゝあり。

更に工場内に於ける諸設備を見るに、原動力としては汽鐘一臺の外百七十馬力を有する汽機一臺を据付け、副式小割堅鋸一、大割堅鋸一、大割丸鋸一、中割丸鋸一、横切丸鋸一、面取用丸鋸一、小割丸鋸一、自動鋸目立器一臺を有し、職工及び人夫一日平均七十人を使役して盛んに作業をなしつゝあるが、資材は主として國有林より仰ぎ、其の不足分は民有林より購入して補ひつゝありて、創業日向淺きを以て既往の成績を見るを得ざれども、製材力は優に一ヶ年五萬石の製品を出すを得る豫定なるを以て、本縣内有數の製材工場なるを知るを得べし。

斯くの如く諸般の設備整ひたる秩父製材所は、固定資本金參萬圓にして、遊動資本に至りては時に應じ機に際して制限なく、新銳の製材力を擁して木材界に活歩しつゝあるが、製品は各種板類、楨類、小割物、大小角材及び柿木羽、樽木取類一式等にして、製品の仕向先は東京地方を主とし、舊來の取引關係に依り關西地方其他各方面に得意先を有し居るを以て、販路に就て苦心するが如き事は毫もあらざるなり。是等畢竟秩父材木店が數十年間の老舗として營業上に堅き地盤を有すると、其の信用頗る篤きに基因するものたらんばあらず。

歐洲戰亂の影響に依り稀有の好況を呈せる我が木材界に於て、特に需用多き秋田産杉材板の

如き、大正四年には東京相場十一枚なりしにも拘らず、翌五年には八枚半となり、十二月に入りて六枚五分の高値を唱ふるに至りしが、遂に五枚を突破して四枚といふ空前の相場を現出し、昨今に至り稍低落の氣味ありと雖も尙ほ四枚半より五枚の間を上下しつゝあり。木材業者の景氣や察知すべし。而して秩父製材所は此の好機會に於て最新式の設備を以て生れ、豊富なる資本を運用して斯界に雄飛せんとし、不斷の努力を以て熱誠業務に當りつゝあるを以て、今後一層の盛大と隆運とを期待さる。實に能代製材界に一勢力を加へたるものと謂ふも、過當ならざる可し。

三 金野製材所

秋田縣に於ける木材界の重鎮にして、金野製材所主たる金野榮治氏は山本郡響村仁餅の産、年齒漸く四十有、尙春秋に富み前途を囑望さる。秋田縣は日本一の杉の産地、然かも長木澤の如き日本三大美林の一として天下に知らる。金野氏は此の長木澤に次ぐ杉の美林を背景とせる仁餅に産聲を擧げ、而して木材界に身を投じて、重鎮として名を成す。豈奇縁ならずとせんや。

金野氏は青年時代既に木材界の人となり、特に材杉に對して望みを囑し、其の好適たる中心地として能代を擇めり。其の當時に於て早く既に能代に着目せる、慧眼なりと謂ふ可く、即ち郷を出で、能代に居を定め、木材界に驥足を伸さんとして或は仲買商を營み、又は木材業に手を染め、材界の眞髓に觸れて時に巨利を博したるが、更に製材業を創始して大に斯界に雄飛せむ計劃を樹つ、斯くて機到り、明治四十三年五月、資本金壹萬圓を以て秋田縣能代港木町に製材工場を創設し、年來の素志は茲に第一階梯を踏むに到れり。然りと雖も氏は小成に安んずるの士に非ず、夙夜奮勵、銳意事業の發展を圖り、一面使役人に對しては眞情を以てし、爲めに氏を慕ふ事慈母に對するが如し。其の當初に於ては原動力は蒸汽機僅かに三十馬力なりしが年と共に製材力を高めたる結果、昨大正五年十二月中に於て百馬力に改造し、別に發電機、汽鐘各一臺を有せり。

製材機械にありては、創業當時は大割丸鋸、小割丸鋸、耳摺丸鋸各一臺を有するに過ぎざりしが、大正元年に至り大割堅鋸一臺を購入し翌二年更に單式小割堅鋸一臺を増設して製材力の増加を計り、一面に於ては工場狹隘を告ぐるに至りしを以て其改造を斷行し、全部耐火構造にして本年四月着手し、八月其の落成を見るに至りしが、間口八間、奥行二十六間の大工場にして十臺は煉瓦にして下部より三尺を積み上げ、屋根はトタン葺とし、米代河岸より工場内に軌道を敷設して運搬に便し、着々事業の發展を期しつゝありて、最近更に規模を擴張せんと

企劃中なりといふ。

原料は其の大部分は米代川流域に産する杉材にして、従來林區署より製材力の約四分の一の保護特賣を受け來りしも、殘餘の資材購入に關しては競争激甚にして頗る苦心の色あるも、金野氏の明敏なる敢て深く憂慮せず、能く機宜を過らずして歩一步事業の發展を促しつゝあり。而して最近の製材消費高を見るに大正三年に於ては二萬五千七百石なるが、外に賃挽一萬八千石あり、同四年は原料二萬八千石、賃挽一萬四千石にして、昨五年には賃挽を合して四萬六千四百石の消費高を示せり。其製品の重なるは各種板類、楯類等なるが、常に男女六十餘名の職工人夫を使役しつゝありて、其の生産高は大正三年二萬六千七百石、大正四年二萬四千五百二十石、大正五年は三萬三千五百五十石に達し、其の販路は東京を主とし、關西地方、東海道筋及び北海道にも勢からず移出をなしつゝあり。

販賣の方法は依託販賣及び注文販賣の二方法に據り居るが、材界の景況活潑なる時に在りては注文販賣多きも、不況の際は依託販賣に據らざる可らず。されは同製材所に於ては注文販賣に在りては荷爲替に依り現品の發達をなす事多きも、依託販賣にありては着荷の上仕切勘定をなすを常とせり。要するに金野製材所は旭日昇天の勢ひにあり。所主金野榮治氏の明敏なる頭腦を有し、然かも沈着にして斷決に富み、小成に安んぜず銳意發展に勵めつゝあるを以て

今後の盛運期して待つ可きなり。



柳谷製材所

秋田縣山本郡能代港町大町川反なる柳谷製材工場は明治四十四年二月の創業にして柳谷常藏氏現に其の經營者たり。同工場は明治の初年祖父寅吉氏の時代より同町川反即ち今の能代貯木場東隣りに於て手挽製板業を營み爾來父健藏氏並に現場主常藏氏の三代に及び營業を繼續し來りしが、秋田木材會社の事業發展と共に、其他個人經營の機械工場續出したるを以て、同工場に於ても亦製材機械を据付くるの必要を感じ、其計劃を樹てたるが、従來の工場は甚だ狭少なるを以て明治四十三年現住地に移轉し、工場を新築すると共に製材機械を購入設備し、今日に於ては秋田縣に於て屈指の個人工場として數へらるゝに至れり。而して其の資本金八萬圓にして、將來益々斯業の發展擴張を企圖し、其の計劃中に屬す。

工場設備としては汽罐一臺及び百馬力の汽機一臺を運用し、製材機械としては大割堅鋸一、小割堅鋸二、大割帶鋸一、小割帶鋸一、大小丸鋸其他と合せ十數臺を有し。多數の事務員及び工場員は盛んに活動しつゝあるが、現在同工場に於ける職工常備男四十五人、女十二人あり、原料は何れも米代川流域に産する杉材にして、消費高の四分の一の保護特賣を受け居る

が、其他は競争入札に依りつゝありて不足分は民有林を以て補給し居れり。然れども其の材料の購入に關しては尠からざる苦心をなし居れども、機を見るに敏なる柳谷氏は能く之れを捉ふる事を誤らずして其の基礎の安泰を期しつゝあり。

其の製品は主として杉四分板、六分板、板割、板類、樺目板、小割物等を製材するか同工場の四分板は最も良品として一般の歓迎を受けつゝあり。其の製材力に至りては最近三ヶ年の統計に就て見るに、資材消費高は大正三年に於て四萬六千石、同四年四萬石、同五年六萬四千石に達し、生産高に於ては大正三年二萬九千五百石、同四年二萬六千石、同五年三萬九千八百石を出したるが、現在の製材力は一ヶ年八萬石の資材を消費し得るの規模にして、擴張計劃の成るに於ては更に製材力を増加するに至る可し。販路は主として東京方面、東海道筋、關西、北海道及び山形方面にして東京の武市賣場、横須賀の近藤辰之助氏、横濱の近藤卯太郎氏等は何れも柳谷製材所の特約店なり。

所主柳谷常藏氏は又た能代に於ける有力家として知らるゝが、秋田縣に於ける木材界に在りては一方に重きをなしつゝあるの人物にして、製板同業組合の組織せらるゝや推されて評議員となり、現に其の職に在り。又た部下を愛撫する事深くして恰かも慈母に於ける赤子の如きを以て、部下も亦皆其の徳に服し能く同工場の發展の爲めに協力して事に當りつゝあり。現に同

工場には櫻井政五郎(勤績二十六年)佐藤伊三郎(勤績十六年)近藤慶太郎(勤績十一年)三氏の如き何れも十年以上の勤績者にして、之れを以ても柳谷氏の部下を遇するに如何に篤きかを推知するに足る可し。又近藤慶助、藤田堅之助、花田喜代松、鈴木文之助、相澤勤五郎、細田留吉の諸氏の如きも最も忠實に工場作業に従事しつゝありて、他の模範と稱せらる。尙ほ社員職工相互の親睦及び職務の研究を計らんか爲めに一同會なるものを組織し、毎月末に集合を重ねつゝあるか、其の温情恰かも一家族の觀あり。

杉材の需用に關しては今後益々増加すべく、特に相場の變動を免れされども概して今日の時價を維持して斯業益々發達すへきは識者の等しく唱ふる處たり。恰かも地を最も好適の箇所に卜し、水陸運輸の便を兼ね備へたる柳谷製材所は、今後年と共に着々として發展を來し基礎鞏固を加ふ可きは信して疑はざる處なり。

石 深井製材所

能代は秋田縣に於ける製材の本場にして、年と共に新設製材工場を加へ、今や機械の運轉四六時中絶ゆる事なく、各工場の煙突林立して盛觀を呈す。而して多數製材工場中に在りて最も古き歴史を有し、個人工場として重きをなしつゝあるものに深井製材所あり。同製材所は能代

港材木町に在りて米代川に沿ふ好適の地を擁し、深井祐之助氏の經營する處なるが、元來所主深井氏は山本郡檜山の生れにして佐竹家の家臣たり。明治十八年能代に移轉し始めて木材業を營めるが、當時手挽工場なりしも未だ其時代に能代に於て挽材工場と稱すべきもの一二を算するに過ぎざりしなり。されは深井氏を以て能代に於ける挽材業者の先驅者と謂ふも過當に非ざるなり。

斯くて時勢の推移と共に能代に於ける挽材業勃興し、今を距る約二十年前、能代挽材會社の創立に依りて初めて機械製材の業開始さるゝに至り、茲に木材界の一大革命は喚起せられ、材界革新の機運轟然として動くに至り、爾來個人經營を以て機械製材の業を企つるもの所在に起るに至りしが、深井氏時勢の赴く處を察知し、明治三十年機械製材の計劃をなし。工場の新築と共に諸製材機械の設備をなし、同年十一月に至り機械製材業を營むに至り。此の當時に於て今谷挽材工場(今の安岡製材所)不二製材所、二瓶挽材所等は相前後して其の創立を見るに至れるなり。

同製材所は固定資本金參萬圓にして、原動力は百五十馬力の汽鐘一臺及び五十馬力の汽機一臺を有するか、職工常備夫男女を併せ六十餘名にして、製材機械は都合九臺にして大割、堅、鋸一臺、小割、鋸三臺、小割九鋸二臺、其他三臺なり。而して其の製材力は一ケ年約五萬石にして資材は國有林より七分、民有林より三分を仰ぎ居るが、從來同製材所にては林區署より製材力の約二分の一に近き保護特賣を受けつゝあるを以て、原料の購買に就ては何等の杞憂等を有せざるなり。而して資材の供給に就て見るに從來の統計に據れば本縣北秋田郡及び山本郡よりするもの約六分にして、他は青森縣より仰ぎ居れり。

更に其の製産高に在りては、毎年平均四萬五千石以上に達し、縣下有數の製板工場たるに恥ぢざるが、製品は主に板類にして、杉四分板の需用最も多く、板割は能く製せらるゝを特色として一般に好評を博し居れり。從て其の販路も廣く東京、關西地方、北海道等を主なる仕向先となし居るが、就中東京地方は最も多く全生産額の五割以上に達し東京、關西地方に至るもの約三割にして之れに亞ぎ、北海道への移出は約一割前後にして、他は各方面に取引せられつゝあるなり。而かも需用多くして供給之れに伴はざるの盛運なるを以て、本年九月より製材機械の増設をなし、一層事業の發展をなさんと着々其の歩を進め居るを以て、製材力の増加と共に更に斯界に雄飛するに至らむ。

殊に所主深井氏は多年の經驗を有し、商才に富み、加ふるに老舗として各方面に信用を有し仕向先の地盤は鞏固なるに搗て、加へて若主人市三郎氏が進新氣鋭の敏腕を以て之れを扶くるあり。同製材所の前途や洋々たりと謂ふ可く、今後益々製材界に重きを爲すに至るべし。

材木商 店

秋田縣下に於ける木材商店は其の數頗る多きが、其の木材商中に在りて能代港町の各商店ある事を看過すべからず。同商店の前身は能代木材合資會社にして、井坂直幹、竹村榮三郎の兩氏主として出資し、明治三十年以來能代に於て伐木、販賣の業を営みたるが、明治四十一年秋田木材株式會社の創立と共に之れに合併する事となるや、能代木材合資會社の事業の一部を基礎とし、井坂、竹村兩氏の後援に依り新たに組合として四十一年一月開業するに至り、織田源太郎氏専ら經營の任に當る事となり、豊富なる資本を抱きて秋田産杉板、杉丸太、柿板、樽木取其他の製造販賣を始め、北海道産木材製板輸出販賣より各國汽船の元扱等其他手廣く斯界の諸方面に發展し居れり。

同商店は能代港町にあるが、九州博多に於ける下村材木商は各商店より資本を供給して木材製板の委託販賣を爲せるものにして、大正二年中下村助治氏同店督監の任に赴き、同四年合資會社として營業の擴張を圖れるが、實質に於て支店と同様の關係を有し、北秋田郡上小阿仁村高橋事業所、同郡下小阿仁村櫻田事業所、能代港町小仲事業所等は何れも同商店の特命に依り受持業務に従事し居るものにして、其他各地に特約店及び取引店あり。内地賣買係としては營業主

任竹村米吉氏を始め黒澤加賀之助、平野易五郎兩氏其他七八名ありて繁忙期に至れば別に臨時員十數名を使用し北海道方面に於ける事務は主として鈴木直吉氏之れを擔當し、其他各事務の分擔を定めて孰れも熱心に營業の發展擴張に努力を拂ひつゝあり。

翻て同店取扱木材の仕入先を見るに北海道、青森、山形兩縣及び秋田縣等に亘り、國有林の外に公有林並に私有林等より供給を仰ぎ居るか、之れか製材は主として能代に於ける館岡製材所、播摩製材所、友榮製材所等の諸工場に依りて製造せられ、資材の關係等に依り土崎、大館等の工場に於ても製材をなす。而して製品は各種あるか、其の重なるは杉四分板、樽木、杉上等丸太、杉角、北海道製品、板割、檜類、柾目板等にして一ヶ年の賣上高は實に秋田木材會社及び本縣に於ける藤田組製材を除けば、之れに匹敵するものなし。以て其の營業振りの如何に活躍しつゝあるかを推知するに足るべし。

能代本店の設備としては事務所の外倉庫、土場、板置場等ありて、其面積約六千坪を有するが、販路に至りては東京、九州、關西、北海道、京都を始め各方面に及び、就中九州地方は主なる得意先なるが、臺灣、朝鮮の各地にも取引先を有し帆船を有する關係より、海外との取引も尠からざりしが、昨今は船腹の欠乏の爲め海外取引休止の姿となり居れり。然れども戦後恢復するに至らば更に海外との取引復活するに至る可く、同店の營業振りの雄大にして信用の確

實なる、又た多く其の比を見ざる所なり。

同店に於ては曾て本縣杉材の見本として蒲州、朝鮮、臺灣等の陳列所に寄贈したる事あるが之れに依りて同方面に秋田杉を紹介すること尠からず。又た同店取扱製品にして博覽會、共進會、品評會其他の公會に於て授賞せられたる事は殆んど枚舉に遑あらざるなり。而して同商店は目下盛んに販路擴張をなしつつあるが、經營者織田源太郎氏を始め敏腕なる店員の活動と、豊富なる資本の運用と相俟て今後の發展期して待つ可く、尙ほ同店にては千代田生命保險、同火災保險、日本徴兵生命保險、神戸海上(火災運送)保險の代理者として、其事務も併せて取扱ひ居れり。

二 館岡製材所

館岡製材所は柳谷製材所と相對し、能代港、材木町、南側にあり。同製材所は元相澤榮助氏の經營せるものなりしが、明治四十二年八月現工場主館岡篤氏之れを繼承すると共に工場を増築し、規模を大にし、製材機械を増設して事業の發展を企圖せり。然るに其の計劃は時勢と合致し、着々として實績を擧ぐるに至り、一面に於ては製材力の約四分の一餘の資材を林區署より保護特賣を受くる事となりしを以て、益々順調なる發展をなすに到れるが、將來資材の欠乏よ

り同業者間に激烈なる競争購入をせざる可らざるを達觀し、同町木材界の雄鎮たる塚本勘三商店と特約を結び、保護特賣の資材全部を其の儘塚本商店に譲渡す事となし、其の代償として館岡製材所に於ける製材原料は、塚本商店に於て責任を負ひて滞りなく供給貸挽せしむる事となせり。されば現今資材欠乏の爲め各製材所に於て尠からざる苦心をなしつつあるに拘らず、同製材所に於ては資材購入に關し、何等憂慮を要せざるなり。所主館岡篤氏、先見の明りりと謂ふも過褒に非ざる也。

斯くの如くにして賃挽專業なる館岡製材所は、固定資本金參萬圓を以て經營せられ居るが、製材工場は二百八十坪にして、製材設備としては汽罐一臺、及び百二十馬力の汽機一臺を原動力とし、大割堅鋸一臺、小割堅鋸一臺、大割丸鋸一臺、小割丸鋸二臺、其他附屬機械及び特種機械四臺等を運用しつつありて、所員の外職工人夫を併せ五十餘名の使役人は常に不斷の活動をなしつつあり。而して其の資材消費高は年一年と激増を示し、大正三年僅かに一萬八千四百石に過ぎざりしものが、翌大正四年には三萬八千四百石を算するに至りしが、更に其翌大正五年に於ては、一躍六萬七千七百石に上るの盛運を呈するに至れり。其の異常の發展振りは實に目醒しからずや。而して製品に於ても資材の消費と正比例して増加し、大正三年七千八百石なりしものが、翌四年には二萬三千石に達し、昨大正五年には三萬六千石を算するに至れり。

るが如き、盛んなりと謂ふ可し。

製品の種類は板類、櫃類を主とすれども、注文に依りては各種の製材をなし、誠實にして能く其の期日を誤まらざるを以て、信用は年々共に加はり、一度同製材所に賃挽を依頼すれば引續き尙得意たるに至るは、従來の實例最も能く之れを證據立つ可し。而して製品の仕向先は東京を始め横濱、大坂、京都を主とするが、九州及び中國地方にも多數の移出をなしつつありて販路は需めざるも漸次擴張せらる。斯くの如くにして最も堅實なる經營に依る館岡製材所は、事業の基礎益々鞏固を加へつゝあるなり。

秋田杉は日本一なり。然して國有林の施業計劃に依れば將來優に三百萬石の年産額を見る可く、若し民有林の整理植栽せらるゝあらば、尠くも五百萬石を下らざる可し、此の故を以て將來杉製供給過剩を云爲するものあれども、特種材と異なり、杉は用途廣汎にして決して其の憂ひなきのみならず。現に歐洲に於ける大勢は潤葉樹林漸次減少し。針葉樹林之に代りて次第に増大しつつあるは、以て趨勢を察知するに充分なる可し。されば將來杉製材業の益々好望なるは言を俟たざる處にして、館岡製材所の如き、基礎堅實にして歩一步と其の地歩を占めつゝ發展策を講じつゝあれば、明敏なる所主篤氏の手腕に依りて、今後順調の發展をなし、本縣製材界に一層重きを加ふるに至らむ。



二瓶製材所

能代港町大町川反なる二瓶挽材工場は、去る明治三十九年深井製材所と相前後して生れたる機械製材工場なるが、經營者は二瓶忠一郎氏にして賃挽材界を專業となし、原動力は汽鐘一臺及び汽機二臺を有し、其の規模敢て大なりといふを得ざれども、個人經營の工場としては敢て他に遜色なく、銳意専心工場の發展を期しつつありて、事業の成績着々として舉り居れるは世人の等しく認識する所なり。其の設備としては土場其他二千坪の敷地を有し、事務所、製材工場各一棟の外に倉庫三棟ありて不斷の活動をなす。

製材機械にありては大割堅鋸一臺、小割堅鋸二臺、大割丸鋸及小割丸鋸各一臺、其他一臺合計六臺を有し一日平均四十餘人の職工及人夫を役使して斯業に従事しつつありて、一ケ年の製材石數約四萬石に上る。然して其の原料は大部分米代川を利用し筏水揚をなし、製品は車馬を以て停車場に積出しをなし、或は川船を以て船積をなしつゝありて、製品の種類は各種に亘るも、主として杉板類、櫃類、小割等の製材をなせり。其の製品の聲價に就ては敢て茲に贅言するを要せざれども、板の厚さの均一にして不揃ひの如き事は絶對になし、板の肌は平滑にして光澤を有し、加ふるに乾燥充分にして製材の仕譯方嚴重なる爲め粗悪品の混入なき點等は

特に同製材所製品の特長として好評を博しつゝある所以なり。

能代は人も知る如く本縣製材界の本場にして、三百萬の巨資を擁する秋田木材株式會社を始め、大小十餘の機械製材工場を有し、木材商又た頗る多く、從て競争の他に比し激甚なると共に、製材事業の經營に關しては諸種の困難の伴ふを免れず。二瓶製材所は此の渦中に在りて經營上幾多の難局に遭遇せるも、常に能く商機を察知して時勢の推移と共に進み、途中挫折する事なく着々として發展の域に進み來れるは、所主二瓶氏の手腕と同製材所の信用厚きに基因すと雖も、又た二瓶氏を援けて能く同製材所をして今日あらしめたる同所主任淺野鬼角氏の努力を顧はざる可らず、鬼角氏は印象派俳句界の曉星として夙に其の名を成せるが、經營の材に於ても亦併増に於ける氏の名を匹敵するの頭腦を有し居るなり。

製品は東京最も多く、其の大部分は同地方に於て販賣せらるゝが、又た關西地方に移出するものも尠しとせず。且つ東北各縣、北陸、北海道にも移出しつゝあるが、各地好評を適せざるなく、殊に大正五年來の本邦木材界の好況に伴ひ、同製材所も大に活況を呈し、着々發展の歩を進めつゝあれば、今後年と共に陸運に向ひ、製材力の如きも更に倍加するの秋あるに至らむ。



塚本製材所

木材界の活躍に伴ひ、能代に於ける製材業最も振展し、秩父、友榮の兩機械工場の設立を見るに至りしが、兩工場と共に勃興せるものに塚本製材所あり。塚本製材所は能代港町材木町にありて、塚本久兵衛氏の經營に係るが、大正六年三月起工し、同年六月其の完成を見るに至り同月十二日より其の運轉を開始するに至れり。元來塚本氏は父祖數代の昔より木材業を營み、現所主久兵衛氏は同家か木材業を創始してより四代目に當り、過般工場を新築するに至る迄は手挽をなし居りしなり。

塚本久兵衛氏は手挽工場なりしと雖も、父祖數代前よりの經營に成る老舗なるを以て、木材界に於ける信用篤く、其の取引先は各地にありて、新設工場なれども製品の販路に苦心するが如き要なきは、同製材所の今後の經營に關して大に意を強うする處ならん。工場敷地は約一千坪にして、其の建築は全部耐火構造となし、屋根は瓦葺にして堅牢なり。然かも其の建築設計は各既設工場の長所を採りたるものあるを以て、最も進歩せるものなる事は言ふ迄もなく、設備せる諸製材機械の如きも新式の精銳なるものゝみを購入したるを以て、其の製材力の如きも比較的多く人力を省きて且製材高は多き特長なり。

現に運轉しつゝある製材機械は、單式堅鋸一臺、大割丸鋸一臺、小割丸鋸一臺、面取丸鋸一臺にして、四十馬力の動力に依り、職工三十名餘と常備人夫とに依りて作業をなしつゝあるが、一ヶ年の製材高二萬五千石の豫定にして、資材は其の大部分米代川流域の國有林及び民有林より仰ぎ、米代川を利用して資材を運搬するの便を有し、製品の搬出には水陸の運輸共に良好にして、製材業經營上には好適の地たり。加ふるに資本金に乏しからずして經營者に塚本氏の如き經驗と信用に富める士を有せるを以て、同製材界の前途は光明を以つて滿つと謂ふを得べし。

製品は杉板類各種にして、特産秋田杉の製板を主とし、其の販路は東京、關西地方、九州方面を以て重なる得意先とするが、機械製材を創始してより僅かに半歳なるを以て、今日に於て其の成績を云爲するは聊か早計の嫌ひなき能はずと雖も、此の短期間に於ける機械製材の結果は頗る良好にして、各需要地に於て好評噴々たるものあり。創業當初に際して既に斯くの如き好況なるを以て、塚本氏は愈々之れに力を得、今後着々として事業の發展を計劃し、數年ならずして本縣有数の製材工場たらん事を期しつゝありと言へば、其の前途や刮目に價すべし。只茲に大に考慮を要すべきは資材の問題なり。秋田縣の國有林の杉樹は施業計劃に依る大方針の下に輪伐をなしつゝありて、其の伐採量には制限あり。又民有林にありては其の數量極め

て少ない、國有林に比すべくもあらず、之れに反し一方民間製材工場は漸次製材力を増加し。今日に於ては供給資材よりも遙かに製材力凌駕し、今後益々此の趨勢を以て進まんとするの狀態に在り。果して然りとせば今後資材購入に關し更に一層盛んなる競争を惹起するに至る可きか、塚本製材所の如きも豫じめ此の點に留意し、今日より萬一の場合に處するの準備なかる可らず、然して杉製板の兼業として雜木利用工藝を營むが如きも其の一方方法なる可きか。要するに塚本製材所は未知數なり。夫れ丈け其の前途の發展測り知る可らざるが、吾人は同製材所の前途を祝福すると共に、細心の注意を將來の企劃を誤る事なく、本縣木材界の爲めに隆昌を加ふるの日あらん事を切望して止まざるものなり。



友榮製材所

能代木材界の少壯者に左の人ありと知られたる佐藤與三郎氏及び關根正助氏共同し。大正六年初め地を能代港町上川反に卜し、機械製材工場の建築に着手したるは、積雪未だ全く消わやらざる三月にして、爾來工を急ぎ、同年七月工場の建築、製材機械の据付、其他萬般の設備完成するに至る。之れ新進製材工場として同業者間の注目を惹きつゝある友榮製材所にして、秩父製材所と相前後して大正六年八月一日より營業を開始するに至れり。

經營者たる佐藤、關根の兩氏は共に木材界の新進人物なるが、殊に佐藤與三郎氏は以前同町の相澤東十郎氏が製材工場を創始するに當り、同工場の支配人として、明治三十九年の創業より大正二年の同工場閉鎖に至る迄の間、専ら其の支配をなして其の手腕を認識せられ、其後木材業を營みて同業者間に重きをなしつつあるの人にして經營に關しては充分の經驗もあり且卓抜の敏腕を有せり。又關根正助氏に至りては多年播磨製材所の支配人として營業の衝に當りつゝあるを以て、其の人物に就ては敢て茲に贅言を要せざる處なるべし。此の双壁の兩氏に依りて企業せられたる友榮製材所の、同業者間の注目を惹きつゝあるは故ありと謂ふ可し。

此の前途有望を以て目され居る友榮製材所は資本金貳萬圓にして製材工場の外事務所、汽罐室、鐵工場各一棟及び一千坪の土場を有し、工場裏は直ちに米代川に臨み居るを以て材料の運搬に最も便にして、加ふるに能代小林區署貯木場の軌道を利用せらるゝを以て一層便利なり。而して北海道其他海陸に依るものは米代川を利用して船積なすを得べく、陸送に依るものは荷車を以て能代停車場に積出すなり。而して同工場の位置は材木町の東、上川反町にして能代港町の最も端れなるを以て火災等の憂ひなく最も安全なり。由來能代は火災が一の名物として知らるゝの地なるが、斯くの如き至便にして且安全の地を撰める同工場の如きは大に有利なりといふ得べし。

製材の設備としては汽罐一臺及び七十馬力汽機一臺を以て、機械を運轉しつつありて、製材機械は堅鋸、大割丸鋸、小割丸鋸、面取丸鋸、自動日立機各一臺宛を据付け、二十五人の職工を常備夫及び臨時夫に依りて盛んに製材をなし居れり。而して其の資材は今後國有林八分、民有林二分の割合を以て供給を仰ぐ見込みにして、製品の種目は杉板類、角類、楨類、小割類、樽木取、柿板其他建築用材一式等なるが、其の販路は東京、東海道筋、關西方面、九州地方及び北海道等にして、創業日淺きにも拘らず販路廣く、製品は何れも好評にして需要に追はれつゝあるの盛況なり、今日に於て過去の成績に依り將來を豫測し能すと雖も、同業者間の觀測にして當を得たるものとすれば、若し不慮の災厄又は一大蹉跌を來さざる限り順調なる發達を來すべき豫想されつゝあり。

尙ほ同工場將來の計劃としては種々あるも、最近の計劃としては來春を以て大割堅鋸一臺、製箱器及木羽突臺等を増設するの豫定にして之れが完成に至らば更に製材力を増加し、製品の種類に於ても又見る可きものあるに至らん。茲には單に未知數の工場として其の前途を祝福するに止むるとせん。

播摩製材所

九〇

播摩製材所は能代港町材木町に在り。播摩久吉氏の手に依りて明治四十三年六月創立せらるゝに至れるものにして、關根正助氏現に支配人として營業の衝に當りつゝあり。工場の設備は能く整ひ、機械又た最新式のものゝ有するが、原動力は五十馬力の電動機を運轉し、製材機械は大割鋸、小割鋸、大割丸鋸、小割丸鋸、各一臺の外に特種機械二臺を設備しありて職工常備夫五十餘名を役使し、盛んに製材をなし、年を逐ふて隆昌を加へ、今や能代に於ける個人經營工場として有数のものたるに至れるは、畢竟創立者播摩久吉氏が時勢に適合するの設備をなしたると、支配人關根氏の能く機宜を逸せずして營業の發展を計りたる結果に外ならざるなり。

觀て同製材所の營業の狀態を觀るに、固定資本金貳萬圓にして、更に豊かなる資金の運用に依り事業の成績を擧げつゝあるが、原料は主として米代川流域國有林より之を仰ぎ、最近一年の工場に於ける作業を見るに、杉材に於て三萬六千六百五十石、松材八百石、計三萬七千四百五十石を消費し居れり。而して從來林區署より製材力の約三分の一の保護特賣を受くるに過ぎざるのみならず、近時の原料供給常に需要に満たさるの觀あり。殊に官民材公賣特賣に際し

ては競争烈しき爲め意の如く原料を購入する事能はざる理由ありて、此の點に於ける苦心尠からざるものあるが、然し之れが爲め愈々事業に奮勵努力し、銳意其の發展を圖りつゝあるは實に探つて絶えずに足るもの、此の苦心奮勵と此の努力とは、聽て數年の内に酬ひられて、必ずや發展の見る可きものあるを信じて疑はざるものなり。

製品は杉板類、檜類、小割等を主とし、孰れも優品として各方面に聲價を博しつゝあるが、同製材所に於ける最近三ヶ年の製産高を見るに、大正三年に於て二萬千六百六十八石、大正四年に於て二萬二千三百四石、大正五年に於て二萬二千六十八石を出せり。而して其の販路は東京、富山、大磯、旭川、札幌、下關等を主とするが、就中東京最も多く、下關にも毎年一千石餘の移出をなしつゝあり。殊に大正六年の如きは木材界稀有の好況に際會し、同製材所の發展著しく、製産高の如きも例年平均に比し大に増加せるは喜ぶ可き現象といふ可し。

乍併、秋田縣内製材工場多くして資材之に伴はず、一ヶ年の杉材の供給平均約百五十萬に對し、製材力は遙かに此の上にある。加ふるに大正六年の好況に當りて二三新設工場を見るに至りて、製材力は益々増加したるも、資材に於ては依然として増加せず、殊に其の大部分は國有林より一定の施業案に基づいて伐り出さるゝを以て、製材力の如何と其の時價相場に依りて製材の供給に増減を來すか如き事を以て、製材同業組合の成立せらるゝありと雖も、或る程

度迄の競争は免れざる處なる可し、此の間に處し從來の主義たる奮勵努力をなし、事業の經營に關しては細心の注意を拂ひ、殊に製品の特色とする點に就ては一層之れを助長するに勗めたらんには、同製材所の前途は能く會社工場に匹敵するの發達をなし、愈々木材界に重きを加ふるに至る可きや必せり。

安岡製材所

本縣に於ける個人經營の機械製材工場にして、最も古き歴史を有するは安岡製材所なり。安岡製材所は能代港町上町十六番地に本店事務所を有するが、製材所は山本郡榑村にありて、同工場は米代川に沿ひ、能代驛及び機械驛の中間に位し、兩驛を離るゝ事僅かに十町に過ぎず、構内廣く板の干乾並に搬出等には至極便利にして、殊に火災豫防等には最も安全なる位置を占む。

抑も當製材所は明治三十七年七月金谷與五郎氏の創立する處にして、當時能代港に於ては機械製材工場として僅かに能代挽材合資會社——現今の秋田木材株式會社の前身なり——あるのみにして、個人經營の機械製材工場としては實に嚆矢たるなり。爾來業を營むこと九ケ年餘に及び大正元年に至りしが、同年十二月都合に依り一時休業するの止むなきに至れり。然るに斯く

の如き古き歴史あり且設備整へる工場を永く休業せしむるは大に遺憾なりとし、大正四年十一月現所主能代港町安岡兵治氏之を繼承して、新たに名儀を安岡製材所と改め、諸般の設備を擴張し、翌大正五年四月より引續き事業を開始するに至れり。而して一時事業中止の故を以て、林區署の保護特賣の恩典には洩れ居りしも、經營宜しきを得て事業は益々好況に向ひ、同年五月には單式小割堅鋸を増設して一層業務の擴張をなすに到れるが、大正六年八月、更に製函機械を増設し、製板業の外に盛んに製函をなすつゝありて、日に増し繁榮に赴きつゝあり。

同製材所は固定資本金壹萬五千五百圓、運輸資本金壹萬圓にして一ケ年五萬石餘の製材力を有し、個人經營の製材工場としては有数の大工場なるが、製材設備に至りては、八十馬力を有する多管式汽鐘一個、七十五馬力の複式汽機一臺、原動機を有し、製材機としては大割堅鋸二尺挽一臺、小割堅鋸一尺五寸挽一臺、單式堅鋸板子挽一臺、ラック送大割丸鋸一臺、腹押丸鋸小割用二臺、手押小丸鋸耳取用二臺の外製函丸鋸八臺を据付けありて、従業員は最も熱心に作業しつゝあり。而して其の資材は一定せされども、米代川流域なる北秋田郡の國有林より大部分を仰ぎ、山本郡及び仙北郡より多少の資材を受けつゝあるが、今昨大正五年中に於ける製材狀況を見るに、製材を復活したる四月以降十二月に至る九ケ月間に於て、二萬五千二百石を製材し居れり。而して大正六年よりは更に設備を増加擴大したるを以て、五萬石餘の製材力を

充分に運用するを得べきなり。

製品の特色としては種々あるが、元來安岡製材所は創業當時より堅鋸機械を据付け、如何なる細材も同機械を以て製材する爲め、板の挽肌及び分揃は一見鉋工を用ひたるか如く鮮麗にして、到る處好評を博し、資材は重に官材を以て製板し民材は一切混合せざる爲め能く整一し、且永久に耐ふるを以て特色となす。同製材所製品の需要多き所以なり。其製品の種目は杉板各種の外松板、小割材及び製函等なるが、販路は東京、京都最も多く、東海道筋、關西地方及び東北各縣にも尠からず移出しつゝあるが、函類は林檎箱として青森縣に最も多く販賣せらる。安岡製材所の現況斯くの如くにして、一時休止せるにも拘らず能く今日の盛大を期し、更に將來に雄飛せんとするは、一に其の經營の専心的努力の賜に外ならざるべく、今後の發展や期して待つ可きものあらむ。

◆ 小川製材所

小川製材所は曩に能代製材所と稱せるものにして、大正二年八月の創立に係り、其の當時固定資本金參千圓なりしが、其後漸次發展をなし、大正六年に至り一大革新を斷行すると同時に小川製材所と改稱し、事業の擴張と共に資本金を壹萬圓に増加し、着々として發展の域に向ひ

つゝありて、恰かも本邦木材界稀有の活況に遭遇したるを以て、事業は頗る順調の好成績を示し居れり。

同製材所は能代港町字住吉後にあるが、所主は小川喜助氏にして、主として佐藤三治氏が經營の衝に當り、堅實なる基礎の下に漸進的擴張を以て主義となせり。されは同製材所の事業は他の如く華々しからずと雖も、内容充實し且専ら品質本位を以て其の特色となし居るに依り需用家よりすれば頗る信用し得べく、同製材所が十餘の大會社工場其他に伍して聊かも、其の壓迫を感せず、創業以來毎歲相當の成績を示しつゝあるは、全く之れが爲めに外ならざるべしと信せらる。

工場に於ける設備としては瓦斯發動機を据付けありて、大割丸鋸一臺、小割丸鋸三臺、面取丸鋸一臺、製函丸鋸八臺、計十三臺の製材機械を運轉し、製産品は各種板類、建築用材、箱板等なるが、特に各種箱類の製作多數を占め、然かも之れを以て同製材所の主たる事業となし、居れり。其仕向先は本縣内及び青森縣に多く、又東京方面にも尠からず移出しつゝあるが、各種箱類の需用夥多にして到底注文に應じ切れざる程の盛況を呈しつゝあり。而して箱類の用途に至りては頗る廣汎にして、資材充分なるに於ては尙ほ製材力を倍加するも決して供給過剰に陥るが如き憂ひは全然なく、需用家は喜んで之を迎ふべし、前途頗る有望なる事業たるは世人

の等しく認識する所たるなり。

秋田縣は杉の産地として知らるゝが、其の材積よりすれば雑木林は遙かに數倍を算す。而して雑木の利用に關しては常に指導の任にある當局の唱導する處たるのみならず、一般民間營業者間に於ても亦其の必要に迫られつゝあるものゝ如し。現に雑木利用工藝の企劃をなせるものあり、合板製造の如き將た紡績の木管製造の如き、マッチの軸木、木製玩具其他有望なるものに乏しからず。而して小川製材所の主とせる箱類製造の如きも敢て杉材に限れるものに非ずして雑木利用を以てなし得るに依り、今後杉の資材供給が製材力に伴はずして營業者間に競争となるも、雑木利用の方法を講究したらんには其の渦中に投ずる事なく、最も確實に其の發展を期し得らるゝならむ。

聞く處に依れば同製材所にては深く此の點に留意する處ありて、夙夜研究を怠らず、尙ほ着々隆昌發展を期しつゝありと言へば、今後に於ける同製材所の活動は刮目して待つ可ものあらん。切に其の健全なる發展を禱りて歎まざるものなり。

三

三浦製材所

秋田縣山本郡能代港町柳町新道なる三浦製材工場は、各種製函を専門とするが、同町三浦忠

治氏の獨力經營する處にして、三浦氏は始め同町川反町に於て木材販賣業を営みしか、製函事業の頗る有望なるを看取し、大正三年七月、現在同工場のある柳町新道の池畔に製材所を創設して製函事業を開始し、爾來好況の機運に向ひて今日に及べり。製函の需用は各方面に頗る多く、近くは青森、山形の兩縣を始めとして毎年夥しき數に上るが、之れが專業に着目して創業したる三浦氏の如きは、時勢を洞察するの明なりといふ可し。

建物工場は一棟にして六十餘坪を有し、三十五馬力の電動機を備へ、大割丸鋸一臺、小割丸鋸二臺、耳摺丸鋸一臺及び製函小丸鋸十三臺を据付け、社員及び職工常備夫四十餘名を使用して盛んに作業をなしつゝあるが、製材石數年と共に増加し、其の創業當時にありては固定資本金貳千圓に過ぎざりしも、事業の擴張と共に漸次増資をなして之れを運用し、遂に今日の盛況を呈するに至れり。之れ一面に於て製函事業其ものゝ有利なりしに依ると雖も、主として三浦氏の經營宜しきを得たるに基因せずんばあらず。而して其の間に於て三浦氏が如何に奮闘努力せるかは推察に餘りあり。

製材の原料は主として民有林の杉松材を以て充當し、製函を専門とすれども、併せて杉及松の板類、角類、木羽等をも製出し、其の販路は主として東京、山形、青森等なるが、同製材所最も特色とする處は、常に注文を待たずして多數の箱板を製し、何時如何なる場合に於ても直

九八
ちに注文に應じ得る點にして、之れが爲め製品に不整なく、期日を延引するの憂ひなく、信用愈々加はりて年と共に注文を増しつゝあるの状態なり。斯くの如くにして進まば、同製材所の將來の發展や見る可きものあるを信じて疑はず。

尙ほ所主三浦忠治氏は商機を見るに敏にして果斷に富むも、部下に對して常に温情溢れ、從て社員は勿論職工常備に至る迄一人として氏の徳に服せざるものなきが、氏は毎年一回従業員全般の娛樂として觀櫻會を催すを慣例となし、又大相撲巡行の際には必ず之れが總見をなして平素の勞を慰むる等其他愛撫至らざるなし。人の和は事業發展上に於て最も重大なる要素なるは言ふ迄もなき事なるが、第一事業其ものが有利にして經營者に其の人を得、且つ人の和を得たる三浦製材所の如きは、大に發展するの要素を具備せるものと稱すべし、將來能代に於ける製函事業界に更に一層の雄飛をすに至らん。

製木 板材 商

秋田縣能代港町

大 西村龜松商店

電話 五十三番
電 署 (二 力)

- ◎杉四分六分板
- ◎同板割貫各種
- ◎同桁目板各種
- ◎同樽丸雜割各種

木 材 販 賣



安 井 丑 吉

能代港材木町

電話百四六番
電 署 (ヤス井)又は(ヤ)

製 材 種 目

- 秋 田 杉
- 杉 桁 目 板 各 種
- 杉 樽 木 取 各 種
- 柿 木 羽 各 種

秋田縣山本郡能代港大町

材 木 商



菱 善 兵 衛

電 署 (ヒ シ)

材木商

秋田縣山本郡能代港町材木町



塚本久三郎

電略(ツカ)

製材種目

秋田杉	枳目板各種	樽木取各種	柿板類各種
-----	-------	-------	-------

材木商

松相澤卯吉

秋田縣能代港材木町

電略(アイウ)又は(ア)

秋田特産

杉板各種
杉柿板類
杉櫃小割類

秋田縣山本郡能代港大町

傘平川清吉商店

電略(ヒラセ)(ヒ)

營業所 材木町川反通

營業種目

杉板各種
杉櫃目板
製材販賣
製造專門
四斗入酒樽木取
二斗入酒樽丸
外各種樽丸
各國柿木羽製造販賣
使用

材木商




瀨川勘五郎


秋田縣山本郡能代港町材木町

電話百四十番
電畧(〇セ)又は(セ)

杉 桤 目 板 專 門
 其 他 杉 材 各 種
 秋 田 縣 能 代 港 町
 塚 本 佐 一
 電 話 一 一 八 番
 電 路 (ツカサ) 又 八 (ツ)
 振 替 口 座 (東 京 三 六 五 六)
 出 張 處 福 嶋 縣 石 城 郡 平 町 南 町
 電 話 四 一 六 番



秋 田 特 產 杉 板 各 種 販 賣
 秋 田 縣 能 代 港 町
 塚 本 勘 三 商 店
 電 話 三 十 番



營業種目

杉樽木取製造專門
外各種樽木取販賣



營業所材木町川端

秋田縣山本郡能代港町幸町

樽木取業

△塚本勘兵衛

電話(ツ)又は(ツカ)

營業種目

樽丸製造販賣
製板各種販賣
杉機械木羽販賣
函木取製造販賣

秋田縣山本郡能代港島町

材木商



大塚米吉

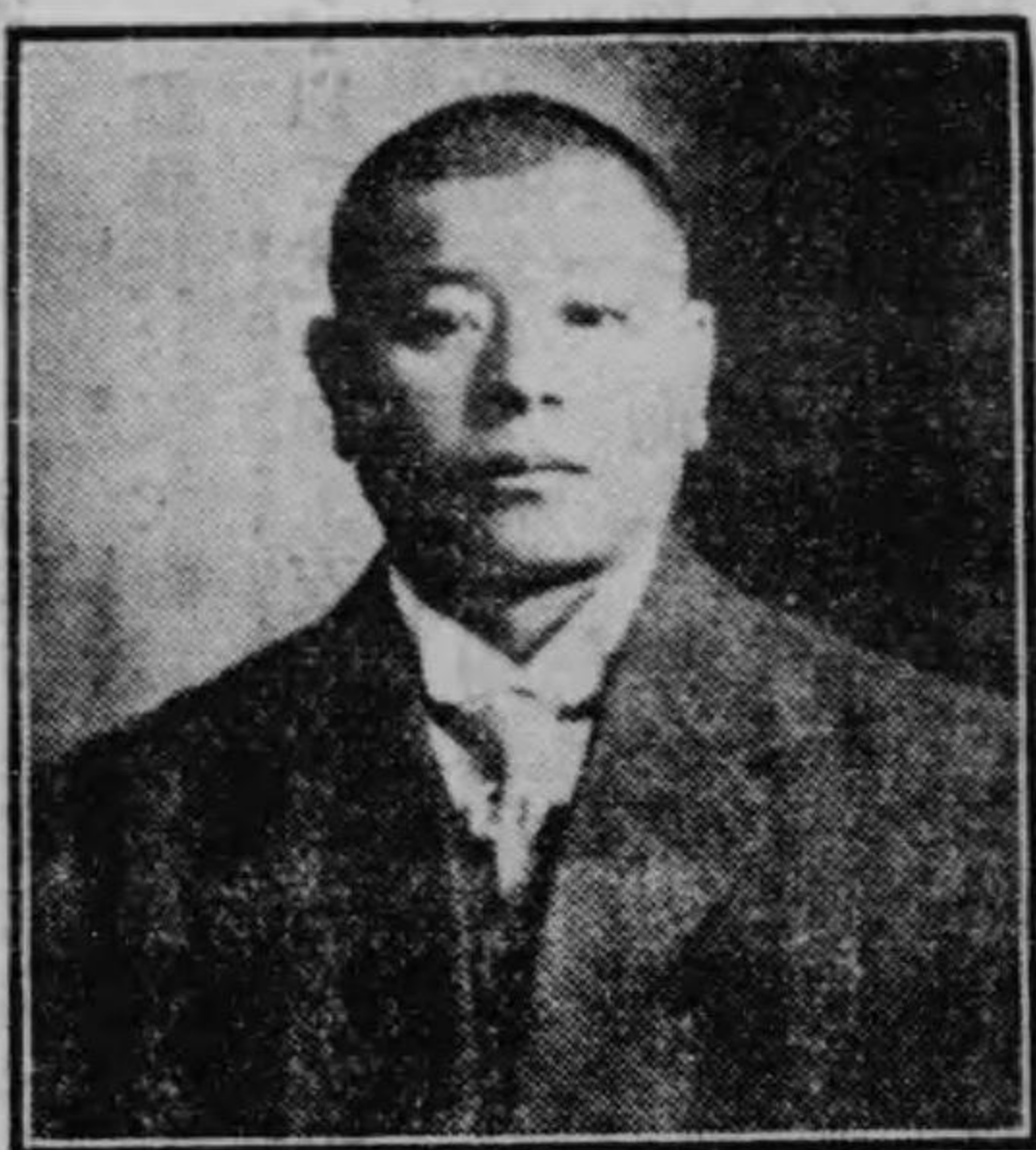
進藤製材精米所

秋田縣製材業者の立物、進藤製材精米工場は、秋田市龜之丁虎ノ口新町にあり。本工場は進藤作之助氏の創始する處なるが、進藤氏は秋田縣仙北郡峯吉川村の人、縣會議員にして林業家たる半仙進藤繁吉氏の令弟として、明治四年呱呱の聲を擧ぐ、本年正に四十有七の働き盛りなり。明治三十五年三十二歳にして郷里を出で、秋田市を永住の地と定めたるが、明治三十七年七月、工藤善之助氏と共同して秋田に九二製材工場を起し、専ら其の經營の任に當りしが、其後個人經營となし、秋田市龜之丁虎ノ口新町なる現在の地に工場を設けて發展を期せり。氏は機を見るに敏にして決断に富み、經營に巧みにして積極的方針を以て進める斯くて四十年には製材所の傍ら精米場を新設して兼營し、更に一大發展を企圖しつゝありしに、不幸祝融の見舞ふ所となり、工場全部灰盡に歸するの厄に逢ふ。蓋し一大打撃たらすんばあらず。

乍併、進藤氏は少しも之れに屈せず、大正四年十一月、資本金參萬圓を以て合資會社を組織し、製材業の傍ら精米業に従事し、捲土重來の意氣を以て事業の擴張を圖れり。蓋し名は合資會社なれども實質に於て進藤氏の經營に屬す。如何となれば、出資社員は氏の外作之亟、茂二郎の二令息及び中田豊治氏にして、進藤氏は現に其の代表社員たればなり。而して復活後の

進藤製材工場は素晴しき勢ひを以て發展し、本縣製材界に嶄然頭角を現はすに至り、今や二三大會社に次ぐの盛運を見るに至れり。是れ木材界自然の好況に基因する處ならんも、又以て氏の頭腦と手腕とを推知するに足らむ。

同工場は敷地面積四千坪餘にして、



進藤製材所主 進藤作之助氏

建築物は製材工場、精米場、木材置場等五棟に分れ、原動力は汽罐二臺及汽機二臺を運用し、常に六十餘人の職工常備男女を役使して製材しつゝあるが、其の製材力は一、二日二百石にして、一ケ年三百日間にて優に六萬石餘を製材し得るなり。其の製材機械に至りては大割帶鋸一臺、大割鋸一臺、小割鋸二臺、小割丸鋸三臺、吊下丸鋸一臺、製函丸鋸三臺を備付ありて、資材は杉の外に松材をも使用し、大正五年に於ては杉材のみにして三萬七千石餘を消費せり。而して杉材の産出地は縣内の山本、南秋田、仙北の三郡の國有林より出づるもの多く、松は河邊郡より、根松は北海道天鹽國よよ産出するものを用ふ。

製品の種類は板類、楨、角類、函板等を主とするが、之れが重なる仕向地は東京最も多くして一ケ年五萬五千圓内外により、其の大部分は杉四分板にして、六分板は關西地方に搬出さ

れ、東海道筋及び北越等にも尠からざる移出をなし、特殊角材其他は市内及び附近の需要に供し居るが、函材は青森、神奈川二縣に移出版賣し、殊に青森縣には毎年林檎箱として六七千個を出しつゝあり。尙ほ土崎港を経て臺灣にも尠ならず輸出せる事あるも、戦亂勃發後船腹欠乏を告ぐるに至りて一時中止の姿なるが、戦後之れが恢復と共に、再び同地方に移出せらるゝに至る可く、同工場の前途や益々好望なりと稱するを得む。

進藤氏は又た社員及び職工人夫等相互の親睦を圖り、且同士災害相救ひ困危相扶くるの趣旨を以て先年來工友會なるものを組織し、毎月常集會を催し、時に名士を招聘して講演を乞ひ其他慰安の方法に關しては遺憾なきを期しつゝあるを以て、上下能く相融和し、會社の基礎鞏固を加ふ。而して製材業の外に精米業を營み、精米機械六十臺を有して秋田市一と稱せられ、又北海道に於ける山林の拂下を受け、造林事業及開墾事業を經營して同方面に向ても亦新たに發展せんとし、土木建築請負業をも兼ぬ。氏は多方面に亘りて其の手腕を發揮し、往々として可ならざるなく、製材以外の諸事業も何れも佳良の成績を示し居れり。氏の如きは眞に天賦の才と稱すべき乎。

進藤氏、大正六年春、選まれて秋田市會議員となり、秋田縣製板同業組合の組織さるゝや、衆望を荷ふて副組長に擁さる。氏の前途、豈多望ならずとせんや、而して君に依りて經營さる

進藤製材會社 將來の發展は、能く大會社と比肩するの隆盛を現出するに至るべきを信して疑はざる也。

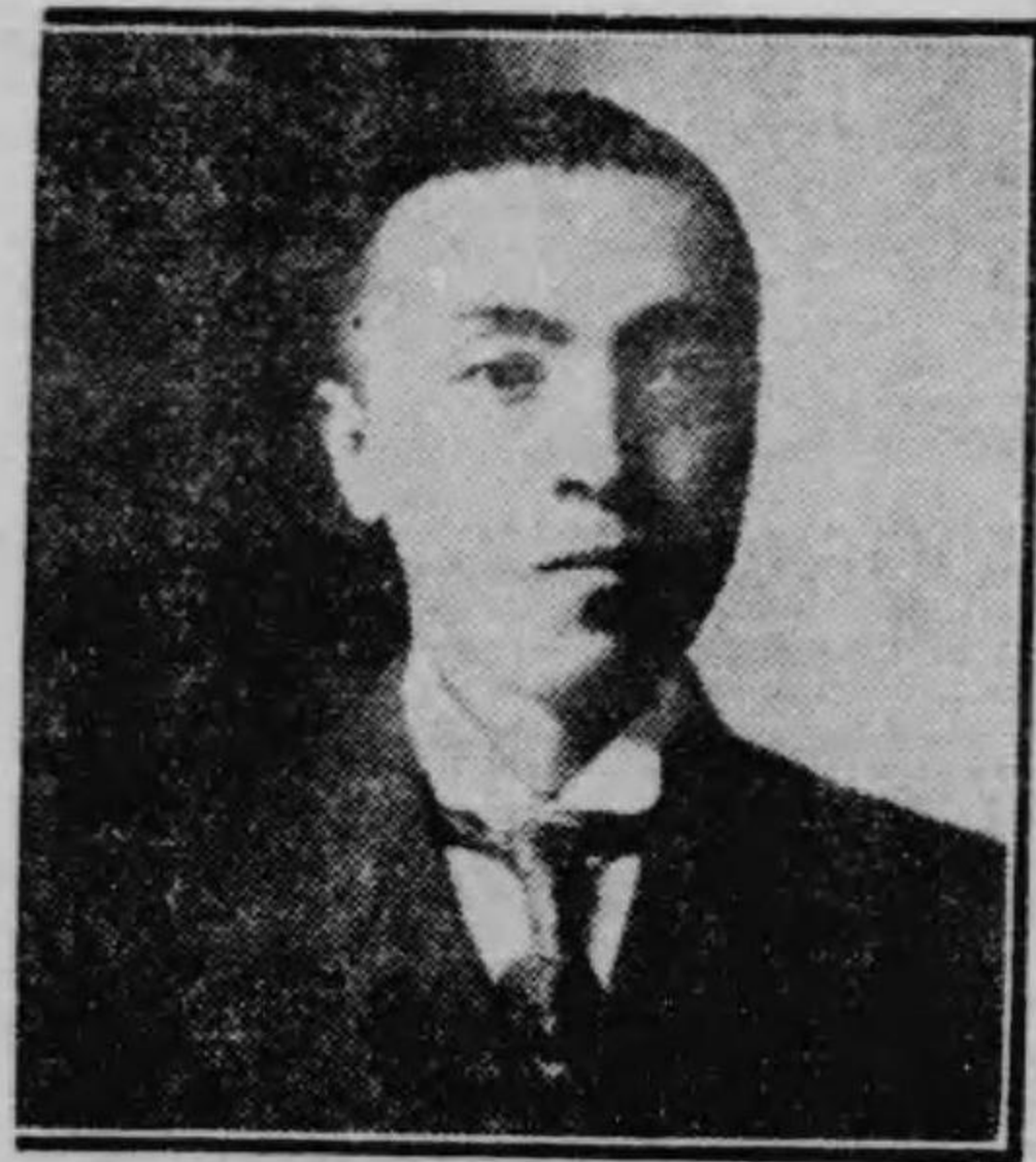
秋 商 店

秋田市龜之丁虎ノ口外張南新町(通稱向馬口旁町)なる菱秋商店は、秋田製材合資會社の後身なり。去る明治三十四年、現秋田木材株式會社社長井坂直幹氏並に同社重役竹村榮三郎氏が秋田土崎等の有志と相謀り、其の合資にて同年二月、資本金五萬圓の秋田製材合資會社を創立し英國製八十馬力の蒸汽機關と、同國製最新式の製材機械數臺とを備へて製材事業を開好し、創業以來連年好成績を挙げ來りしが、日露戦後の事業界は同種小會社の分立を利とせずして大に合同の機運を促がし、明治四十年三月能代挽材株式會社、能代材木合資會社と合同して秋田木材株式會社を創設する事となりし爲め、任意解散をなして一切の權利及び事業な秋木會社に譲渡したるが、秋木會社は本店を縣下山本郡能代港町に置き、同時に秋田木材株式會社秋田支店として繼續營業をなすに至れり。然るに同業者の勃興に伴ひ、到底現狀維持の不利なるを察し大正四年二月、更に現店主(當時支店長たり)高橋多惣治氏の個人經營に變更し、以て今日に至れり。菱秋商店は、秋田大林區署の調査に依れば固定資本金七萬圓にして、製材工場、製品整

工場、原料受拂場、小賣場、事務所等の五棟を有し、原動力は汽罐一臺、汽機二臺にして、製材機械としては大割帶鋸一臺、小割帶鋸一臺、大割堅鋸一臺、小割堅鋸二臺、吊下丸鋸二臺、面取丸鋸四臺、其他附屬製材機五臺を据付け、職工常備夫男女百六十餘名を使用して作業をなすつゝあり。其の資材は杉、楡等を主とし殆んど官有林の供給を仰ぎ、民有林よりするものは總額の約二割に過ぎざるが、最近三ヶ年に於ける資材消費高を見るに、大正三年に於て四萬七千石、大正四年に於て五萬五千石、大正五年に於て七萬五千石、といふ數字を示せり。之れに依りて菱秋商店の規模の大なるを推知するを得べく、然かも斯くの如く一年長足の發展をなすつゝあるは、譬へ木材界活況の自然的結果をも含むとは謂ひ、他に多く其の比を見ざる所なるべし。

製材の種類は板類、積類、極、挽角、函木取、樽木及び木羽類等にして、之れが販販は東京を主とし、同地のみにて年々二萬石前後の移出をなすつゝあるが、九州、大坂、静岡等之れに亞ぎ、其他關西各地方、沖繩、臺灣、東北各縣、北海道等にも尠からざる移出をなし、全國各地に特約店を有せり。而して其の製産高を見るに、大正三年に於て三萬石、同四年に三萬三千石、同五年には四萬五千石を製材し、大正六年には更に遙かに増加を來せり。又盛んなりと謂ふ可し。然れども原料保續の見込に關して、工場を中心とする附近の民本は僅かに所要量の約

二割を算するに止り、到底保續の見込なきを以て附近國有林の公特賣を受け事業を經營しつゝあるも、尙ほ全部の要求を満す事能はざるを以て、止むを得ず山本北秋田方面よりの供給を仰ぎ居れるが、能く此の間に處して機宜の措置を講まらず、事業着々として發展し擴張されつゝあるは、本縣木材界の爲め慶すべき事に屬す。



高橋多惣治 店主商

尙ほ同商店工場は、旭川の河口を占め、奥羽線秋田驛に近く、水陸の便兼備はるが、工場員は互に相和して専心其業に努む。而して同工場に於ける事務員並に職工間に一層親睦を加へ、疾病又は其他の災厄に罹りたる時は之を救済するの趣旨を以て、互助會なるもの組織せられありて、店主は年々其の利益の幾分を補助基金として同會に寄附するを慣例とせり。されば店主と使用人との間は極めて圓滿にして、世上往々にして見聞する雇主と被雇人との間に起る忌はしき紛紜の如きは絶対に起りし事なく、恰かも一家族の如くに融和し居れり。

店主高橋太惣治氏の性行に就ては敢て茲に贅言を要せざる處なるが、高潔にして温厚篤實の好紳士、其の前身たる秋木支店長たりし以來常に優秀なる成績を擧げ來りしに徴して、其の經

營の才に長せるを察知し得べく、能く部下を愛撫し、且同業者其他の信用頗る厚し。其の經營振りは外觀地味なる丈け最も堅實にして、之を井坂秋木社長の性格に見るに、能く相類の點あり。夫れ丈け表面花々しからざれども、實勢力ありて、隱然木材界に重きをなしつつあり菱秋商店も、氏の如き經營者を得て將來益々堅實なる地歩を進め、着々として發展するに至らむ。

小林製材所

小林製材所は秋田市川口新町に在りて、小林金之助氏の經營に係る新進氣鋭の製材所なり。其の創立は大正二年七月にして、固定資本金壹萬五千圓を有し、創業以來能く事業の發達に力を注ぎ、幾多の困難を排して經營をなし、加ふるに其の發展策を講し、遂に今日の隆昌を見るに至れり。斯くの如く月日の進むに従ひ、社運も亦た共に進みつゝあるもの、偏に所主小林氏が日夜製材の業に意を用ひ、苦心經營したる賜に外ならざるなり。

總て一の事業を爲さんとするや、其の前途に幾多の障害横はるを常とす。然かも是等の障害は要するに試金石なり。此の試金石たる障害に打ち勝ち始めて事業に成功するを得べく、之れに僻易せんか、遂に失敗を免れざるなり。然かも吾人の見聞は往々にして後者に屬するも

の多く、或は同業者間の壓迫に依り、或は資金の欠乏に依り、或は計劃の齟齬、相場の変動等圖り知る可らざる暗礁に乗り上げて中途挫折せるもの尠からず。小林金之助氏の能く今日の成果を見たる、實に試金石に打ち勝つ堅忍不拔の精神ありしが爲めに外ならず。

製材工場の設備を見るに、規模素より大なりと言ふに非されども、其の製材機械は總て新式のものにして大割丸鋸一臺、板挽丸鋸二臺、面取丸鋸、鼻切丸鋸各一臺を有するが、是等の諸製材機械は三十馬力の汽機及び一臺の汽鐘に依りて運轉せられ、多數の職工及び人夫は最も熱心に従業しつゝあるが、其の製品は板類、積、建築用材等を主とし、尙ほ一般木材業者の依頼に應じて各種の賃挽をもちし、期日正確にして製品良好なるを以て信用を博せり。

其の製材原料は杉材を主とし、松材之に次ぐが、資材産出地は南秋田郡最も多く、北秋田山本の縣北及び北仙方面よりも多少の供給を仰ぎ、就中國有林其の大分部を占め、民有林よりするものは僅少なり、斯くて年々數千石の製産高を示し、年々共に之れが増加の歩を進めつゝあるは喜ぶ可き事にして、販路は板類、角類共に東京方面を最多とし、京阪地方より東海道筋一帶に及び、其の販路着々として擴張し居るは、現今に於ける同製材所の狀況なりとす。

加ふるに最近木材界の好況なるに着目し、其の經營する工場に一大刷新を行ひ、斯界の爲め大に雄飛せんとしつゝあるは、刮目に値するものたらすばあらず。



中川口製材所

中川口製材所は大正三年十月の創業にして、秋田市中川口町にあり。工場は旭川に臨み、倉庫、土塙等を併せて其の敷地面積一千五百坪を越ゆるが、創業以來順調の發展をなして今日に至る、蓋し之れ所主木村久治氏が時勢の推移を能く察知し、常に能く商機を誤まらずして今日に宜しきを得たる結果に外ならざるなり。殊に木材界鎮靜の際に當りて業を創し、今日の發展を致せるは、大なる努力の存するものあればなり。

所主 木村久治氏は元氣頗る旺盛にして、稀に見るの快男子なるが、明治二十九年、サガレン嶋に至り浦鹽に遊び、同地の森林及び木材界の視察をなし、同地方に滞在する事約二ケ年に及び、大に劃策する處ありたるも、日露兩國の親近到底同日の談に非ず、事志と違ひ、雄圖を抱いて歸國したるが、放膽にして霸氣に富む木村氏は尙ほ志を變へずして種々計劃する處あり。然りと雖も、長するに及びて年少氣銳の勇に驅られ事をなすと雖も、總て時期を得て之れに乗するに非ずんば、事業を成功し難きを覺り、爾來歸郷して、各製材機械其他の組立に従事せり。蓋し木村氏は機械類に對しては夙に特殊の技能を有し、就中製材機械に對しては専門的智識ありて、縣内の製材工場にして機械類の据付に關し、氏を煩はしたる所尠からざるなり。

斯くて陰忍待久、時の至るを待てる氏は、遂に其の機會を促へ得たり。

即ち大正三年十月、秋田市中川口町に製材工場を創始して其の經營の任に當りたるが、製材機械に對して精通せる氏は能く其の監理行き届き、從て製品は鮮麗にして且整一し。決して不揃を生ずるが如き事なきを以て、到る處好評を博し、事業歳を加ふる毎に發展するに至れり。然れども之れ木村氏としては事業の一階梯たるに過ぎして、更に遠大の計劃を有するなり。現在に於ては原料を主として民有林より仰ぎ、上三郡並に由利郡等其の重なる供給地なるが、従業員一日三十餘名にして、平均三千石餘の製材をなし、外に賃挽の需めに應じつゝありて、是又依頼者頗る多し。

製品の種類は板類、建築用材を主としつゝあるが、建築用材は縣内各嶺山、石油業者等に販賣し、製板類は重に關西地方及び朝鮮方面に移出しつゝありて、製材の設備としては汽鑽、汽機各一臺を原動力とし、大割丸鋸一臺、小割丸鋸二臺、面取丸鋸一臺、鼻切丸鋸一臺を運轉しつゝありて、創業以來年々發展すると共に製材力の不足を感ずるに至りしを以て、其の擴張計劃中に屬するが、大正五年九月其の第一着手として製函用丸鋸を増設して製函材を製出しつゝありて、近來益々盛況を呈しつゝあり。今後の發展期して待つ可きものあらん。

尙ほ木村氏は秋田市下通のり繁築策として秋田市登町活動常設矢止館の經營を引受け、

本年十月より個人經營として開場しつゝあるが、是又好況を呈しつゝあり。何かしら活動せられは止まざる氣象の木村氏の事なれば、今後着々として其の歩を進め、大に斯界に雄飛するに至らむ。

一一〇

木材各種

販賣

秋田縣秋田市中川口

鈴木勘左衛門

電話 二六一番

木材各種

販賣

秋田市中川口

鈴木彌兵衛

電話 六〇七番

日本石油株式會社
中外石油アスファルト會社
久原鑛業株式會社
其他各鑛業會社用達商
櫓材、木材、建物一切

秋田市上川口

野田商店

電話 一七四番
電器 (ノタ)

木材商

秋田市中川口

太齋藤合資會社

電話 一〇二番

種 目

木	製	柿
材	板	板
各	各	製
種	種	造

秋田市上川口



工藤材木商

工藤多之助

電話 六十一番
電路 (夕夕) 又は (夕)

◎木材 ◎製板
 ◎桁板 ◎小割物
 ◎柿板製造販賣

各種

秋田市上川口七番地



加賀谷長之助

電話 二二二七番
電器(カ)又は(カカヤ)

木材 各種

販賣業

秋田市川口新町



材木商 鎌田 貞治

電話 二二二番

杉板類 杉丸太 各種建築材 販賣



木 材 商

秋田縣新屋町

本店

佐藤與七

電話(サヨ)

秋田市六丁目川反

支店

佐藤康治

電話(サヤシ)



商店製材所

丸か商店製材所は秋田市外川尻村字川口境にあり。曩に木山製材所と稱し、永らく製材事業を営み居りしが、大正四年十月、現所主加賀谷知治氏の手に移り、工場其他の沿革をなして茲に面目を一新し、更に製材界活躍を試むと努力しつゝあり。而して加賀谷氏の經營する處となりてより未だ多くの日を閲せざるも、氏は經營の才に富み、加ふるに日夜製材の事に意を用ひ能く使用人を愛撫し且督勵して其の發展を圖り、遂に今日の如く基礎を確立するに至れり。然かも加賀谷氏は之れに満足せずして尙ほ専心事業の擴張發展を期しつゝあり。

同製材所は雄物川に臨み、太平川、旭川等の河川を利用して資材の運搬をなし、且製品の船積とするものを搬出しつゝありて、陸運に依るものは荷馬車を以て秋田停車場に運搬し、同驛より積出をなす。其の敷地は約八千坪を算するが、製材工場の外に結束場、長屋及び事務所各一棟を有し、土場又た廣くして、別に精米工場一棟を有して精米業をも兼業しつゝあり、事業着々として其の計劃に向ひて進み居れり。

製材工場には鋸鑽及ひ瀝機各一臺の設備ありて、大割丸鋸、小割丸鋸、面取丸鋸其他各種製材機械を運轉し職工及常備夫約四十名を役使して作業をなせるが、製品の種類は板類、

板割、榎等を主とし、其他各種製材にして、一ヶ年約二萬石の資材消費力を有し、其の販路に至りては東京方面最も多く、京阪地方之に次ぎ、東海道一帯にも得意先を有し、尙は年と共に製産高を増加するの傾向を示しつゝあるは喜ぶ可し。

秋田縣の森林は本邦三大美林の一として其名を知られ、面積九十萬町歩を算し林木の蓄積一億數千萬尺に達し、内杉材六千萬尺にして、其の多くは國有に屬し、杉材の一ヶ年の拂下數量は百萬石乃至百五十萬石なり。是等の杉材は秋田縣内三十有餘の製材工場に依りて消費せられ、然かも資材尙は欠乏を告げて隣縣青森及び北海道よりも移入製材しつゝある狀況なるが其の間に處して能く資材の購入をなし、製材工場能力をして遺憾なからしむるは、偏に經營者其人の如何に屬す。所主加賀谷知治氏は少壯氣銳の活動家にして、頭腦明敏、商機を逸するが如き事なく、能く積極的の經營をなし、將來の計劃等に關しても時代に適應せる新智識を以てなしつゝあるを、以て其の今後に於ける同製材所の雄飛すべきは、吾人の信じて疑はざる所なり。

尙ほ兼營しつゝある精米工場は、地の理を占めて水陸の運輸至便なるを以て依頼者多く、毎年盛んに精米しつゝあるか、殊に收穫後に於ける同所の多忙は想像以上なり。是又製材業と共に順調の發達を遂ぐるに至らん。要するに丸か製材所は、現經營者が繼承してより僅かに滿二ヶ年を経過せるに過ぎざるも、諸般の點に於て着々として新進氣銳の事業振りを示しつゝあるを以て、之れを既往の成績に徴して今後を豫想し、前述の如く斷言するに憚らざる所以なり。幸に自重自愛、以て所期の發達を遂げん事を切望す。



齋藤製材所

齋藤製材所は秋田市外川尻村石倉向にありて齋藤吉郎氏の個人經營に屬するが、同製材所は個人經營として最も古き歴史を有するを共に、又有數の製材工場として同業者間に重きをなしつゝある。所主齋藤吉郎氏は雄勝郡の生れにして、明治二十五年頃より郷里横堀に於て挽材を營み、附近民有林の材木を購入して手挽きにて製材をなし、各鑛山其他に販賣し居りしが、漸次其の規模を擴張し、主として建築用材を製出せり。然るに時代の進歩は遅々たる手挽製材にて満足し得ざるに至りしを以て、斷然手挽を廢して秋田市に出で、明治三十二年四月、工藤善之助、池田八五郎の兩氏と謀りて合名會社を組織し、市外川尻村の現齋藤製材所の個所に製材工場を建設せり。秋田に於て機械製材をなしたるもの、其の先達の一たりしなり。

然るに同三十四年十一月、同製材合名會社は解散の止むなきに至りしが、斯業の有望なるを信じて疑はざる齋藤氏は進んで之れを繼承、同年十二月より獨力を以て經營すると共に、一面

に於て製材機械を増設し、翌三十五年五月其の完了を見たる以來、一層製材力を増加し、爾來十餘有年に至れるが、其間に於て波瀾曲折あり。或年の如きは材價の低落に依りて工場頗る不況を來し、經營大に困難を告ぐる事ありしと雖も、不屈不撓、萬難を排し遂に今日の如き鞏固なる基礎を築くに至り、製材事業も大に發展して、個人工場として屈指の工場たるを得たり。



丸 秋 工 場 主 齋 藤 吉 郎 氏

機及び汽錐一臺を運用、大割堅鋸、小割堅鋸各一臺、大割丸鋸、小割丸鋸各二臺、面取丸鋸一臺、其他附屬機械等四臺、合計十一臺の製材機械を運轉し、盛んに製材なしつつありて店員五名の外に職工常備夫四十餘名は不斷の活動をなし居れり。殊に大正五年以來木材界の好況に伴ひ、異常の發展を來し今や隆盛愈々加ふ。

之れ奮闘努力の賜ならんや。

翻つて現在に於ける齋藤製材所の設備を見るに、建築物として工場二棟、倉庫二棟にして二百有餘坪を算し、別に營業所あり。原動力として四十馬力の汽

其の製品の種類は、板類、板割、角材、檜、兩材、搔板等を主とするが、其の原料は杉材を主とし松材をも製材しつつありて、其の八分南秋田、北秋田其他の國有林より資材を仰ぎ、其他は民有林より補充し、一ヶ年の製産高平均三萬石に達す。而して其の販路は東京最も多く、關西地方、九州方面及び青森、山形の兩縣を主とするが、其他各方面に及び、最近木材界の好況に従ひ、販路更に擴大せり。之と共に同製材所にも工場の刷新を圖り、製材の改善を期し大に斯界に雄飛せんとしつゝあるは刮目に値す。

尙ほ同工場にては、動力の餘力を以て鈴木推材工場に供給しつつありて、更に蒸氣を利用して製材所附近に四十餘坪の建物を建築し、洗湯業を經營せり。而して所主齋藤氏は部下を使用するに眞情を以てし、温情溢れ、賞罰宜しきを得つゝあるを以て徳望あり。現に進藤友之助、高橋仁太郎兩職工の如きは十年以上の勤積者にして、能く場主を輔けて熱心業務に努力し、共に衆の模範たり。以て齋藤氏の徳を推知し得べし。

前田製材所

秋田縣南秋田郡土崎港町御藏町前田製材所は前田治平氏の個人經營にして、明治四十二年六月の創立に係り、爾來幾多の變遷を経て今日に至れるが、其の固定資本金四萬五千圓、十餘臺

の製材機械に依り、秋田特産の杉製材をなしつゝありて、土輪製材界に於ける一異觀たるを失はず。試みに其の設備の概要を見むか。製材工場は數百坪の大建築にして、汽鍋一個及び汽機一臺を有し、五十馬力の原動力を以て製材機械を運轉しつゝあり。製材機械としては、大割鋸、小割鋸、大割丸鋸、各一臺、小割丸鋸二臺、振り鋸一臺、面取丸鋸、製函用丸鋸三臺を据付ありて、職工常備男女五十餘名を使用し、盛んに作業をなしつゝあり。蓋し土崎に於ける製材業者の重鎮たらざるばあらず。

製材の種類は各種板類、櫃、板割、建築用材及び函材等なるが、主として杉材にして、其の大部分を國有林より仰ぎ、其の不足とする處は民有林に依りて補給しつゝあるが、最近三ヶ年間に於ける消費高を見るに、大正三年に於て三萬八千石、同四年に於て三萬五千石、同五年に於ては一躍五萬石の資材を消費せるが、大正六年に於ては更に以上の増加を來せるもの、如し。斯くの如く年を逐ふて隆昌に趣きつゝあるは當に同工場のみならず土輪製材界の發展の爲め喜ぶ可く、然かも前田氏は一面能く振興の機運に添ふて進むと共に他面亦た最も工場基礎確立に力を注ぎ居れり。之れに依りて前田製材所は今後堅實なる發展をなすに至らむ。

製產品の販路は東京最も多く、毎歳一萬石を上下し居るが、關西地方之に次ぎ、九州及び北陸方面に移出するものも亦尠からず。殊に土崎は港灣にして海陸の便備はり、雄物川の河口を占めて、雄物川流域の國有林より伐採さるゝ資材を筏組として運材し得るの便宜あるを以て、將來發展上に關しては大に有利なるは論を俟たず。況んや前田氏の如き經驗に富み細心の注意を拂ふに於てをや。而して前田氏の背後には武茂禮治氏のあるを忘る可らず。武茂氏は營業の任に當り、能く商機を誤たずして同製材所の發展に資したるが、秋田縣製板同業組合の組織さるゝや、推されて評議員となり今日に及ぶ、以て木材界に於ける武茂氏の地位を察すべきなり。

元來土輪木材市場は、能代港に次ぐの木材市場にして、仙北郡地方雄物川流域より流送さるゝ木材多く、秋田市場よりも輸送せられ、海運に依りて關西方面の移出盛んなりしも、近時陸運の便開けたるを、歐洲戰亂の爲め船腹の拂底を告ぐるに至り、運賃又た暴騰するに至りしを以て、汽船移出量頗に減じたるが、戰後に至らば船腹の欠乏も亦漸次恢復するに至る可く、土崎市場又た活氣を呈するに至る可し。若し然らずとするも、輪伐不盡の施業計劃に依りて雄物川流域國有林の出材集中するを以て、製材事業の發展や、能代と對抗し益々盛大を加ふるに至らむ。

斯くの如く有利の地位を占むる土崎に地を下したる前田製材所は、前田、武茂兩氏の手腕と豊富なる資金の運用と、完全なる製材所に依り、今後年と共に發展を來すべきは敢て吾人の

贅言を要せざるべく、秋田製材界の爲め切に其の發展を望みて止まざるものなり。

平田中製材所

田中製材所は秋田市外川尻村石倉向にあり。元來同製材所は工藤製材所と稱し、明治三十五年の創立に係るが、順次發展をなしつつありしに、昨大正五年十二月に至り現所主田中良藏氏の手に移り、其後個人經營として益々發展するに至れるものにして、林區署の保護特賣の如きも前經營時代よりも多くなり。其の前途大に好望を以て目せられつつあり。然して田中良藏氏は從來木材商を營み、請負業をなしつつありて、木材商としては斯界に於ける新進人物として夙に同業者間の注目する處となり、又請負業者としても重きをなし居るが、製材事業を兼營するに當りて恰かも譬の『鬼に金棒』の觀ありて、田中氏今後の活動は定めし目醒しきものあらん。

同製材所は固定資本金參萬八千圓にして、製材設備としては演鑿及ひ三十五馬力の演機一臺を有し、製材機械は大割堅鋸、小割堅鋸、大割丸鋸、小割丸鋸、面取丸鋸、鼻切丸鋸等各一臺を据付けありて、職工常備男女五十餘名を役使して從事し、一ヶ年の製産高多大なるものあり。製産品の種類は板類及建築用材を主とするが、自家に於て請負業を營み居るを以て之

に使用するもの尠からず。外に賃挽の需めにも應じ居るが、精良の製材機械を有し製品優良なるを以て好評を博し、製品の需用と共に賃挽の依頼も増加しつつあり。

製材の原料は杉材を主とし松材之れに次ぐが、之が産出地は南秋田郡を主とし縣北及び縣南より仰ぎつつありて、其の販路は日本石油株式會社及ひ鐵道院等に土木事業用として多大の供給をなしつつある外、石川縣方面にも尠からざる輸出をなし居れり。殊に昨年來現所主田中良藏氏の經營になるや、短時日なるにも拘らず奮闘して昔日に倍するの成績を挙げ、進んで更に大刷新を行はんと企劃しつつあるを以て、同製材所今後の活躍は更に刮目に値すべきを信して疑はざるなり。

材界の事たる、時に其の相場の一高一低あるを免れず。此時に於て製材業者及び木材業者の最も戒心を要すると共に、經營上に關し大に苦心を要する處なるが、田中製材所に至りては日本石油及ひ鐵道院といふ大得意を有するのみならず、請負業者として自ら製材を使用する事多きを以て、他に比して格段の便宜と強味とを有し、製材所經營の上に於て大に有利なる立場に在り。商機を見るに敏にして、一舉一投足を苟くもせず、能く機宜に適するに策を講ずるを以て、田中製材所が今後秋田木材市場の重鎮として一層重きを加ふるに至る可きは、敢て贅言を要せざる所なる可し。

殊に木材価格は最近に於て稍低落の氣味ありと雖も、之れは東京材木商人に於ける一の手段に出でたるものにして、到底東京商人が自説を固執し能はざるは自明の理なり。若し然らずとすも、既に秋田の材木業者等は關西方面に一層販路を擴張し、從來東京向として製材せし六尺板も亦盛んに關西地方に移出さるゝに至り、需用頓に増加せるを以て、材價の低落を來すか如き事は茲當分の間は豫想し得られず。されば田中製材所の如き順調に加ふるに昇龍の雲を得たるか如くといふ可く、同所の爲め慶賀せずんばあらず。



村金製材所

秋田縣南秋田郡土崎港雄物川驛前なる村金製材所は、明治四十年十一月創立に係り、村山金之助氏が資本金四萬圓を以て個人經營となし今日に至れり。經營者村山氏は秋田縣に於ける屈指の大富豪にして、其の本店たる村金商店は米穀肥料部、船舶部、木材部、太物卸部、吳服部、薬工部を有して最も大規模なる經營をなし、本縣に於ける第一流の商店として其の名顯はる然して村金製材所の如きも實に村金商店の一事業たるに外ならずして、資本金は四萬圓なりと雖も、背後には巨萬の資を擁する所主は機に應じて巨資を運用し、製材設備の如きも頗る完全せるものにして、従つて事業も着々として發展しつゝあるは寧ろ理の當然と謂ふ可し。

基礎鞏固なる點に於て、個人經營の製材工場としては多く其の比を見ず。同製材所の敷地面積は三千五百餘坪にして建築物は製材工場、倉庫、事務所、舍宅等七棟を有し、建坪總數約五百坪、原動力は蒸氣汽機及び四十馬力の汽機一臺を備へ、製材機械としては大割鋸一臺、小割鋸一臺、大割丸鋸及小割丸鋸各一臺、面取丸鋸一臺の外蒸氣橫切鋸一臺を据付けありて、其他附屬機械を併せ總數九臺を運轉し、別に家用燈用發電機械を据付けありて、職工常備を併せ男女六十餘名を役使して製材をなしつゝあり。

製品の種類は板類、楨、建築用材、板割等を主とし、就中杉四分板、六分板等多きを占むるが、其の資材は大部分國有林より仰ぎ、其産地は南秋田郡の男鹿、五城目、仁別等より伐採さるゝもの最も多く、北秋早口、仙北角館等の土場現在の丸太をも購入するが、其の不足は河邊郡及び雄物川流域の民有林より補給しつゝありて、最近に於ける製材状況を見るに、大正三年に於ては八千三百三十石の製産額に過ぎざりしも、翌大正四年には一躍一萬三千三百石を出し、昨大正五年には更に増加して一萬七千石の産出を見るに至れり。之を以てしても年と共に長足の進歩をなしつゝあるを推知するに餘りありと謂ふ可し。而して其の販路は主として東京及び關西地方に輸出し、九州方面にも製品を仕向けつゝあるが、事業は年と共に隆昌を加へ規模亦擴大し其の前途の雄飛を目論見つゝありと言へば、其の將來の發展や期して待つ可きも

のあらん。

殊に村金製材所は前に雄物川を控つて舟楫の便あり。雄物川流域より仰ぐ資材は此河川に依りて流下し、船積にも至便なるのみならず、雄物川前に在るを以て陸上に於ける輸送も亦頗る便利なるを以て、地の利に據る同製材所の利益尠少なからざる可く、主として經營の衝に當りつゝある主任内藤氏は頭腦明晰にして能く此の製材所を背負ひて立つの識見と手腕を有し、村金本店の後援と相待つて將來の發展に努めつゝ、あれは、村金商店材木部の活動と共に一層の伸展をなすべく、殊に村金商店には船舶部を有するを以て、戦後船腹の欠乏が漸次復活するに従ひ臺灣、朝鮮及び支那沿岸等にも輸出するに至る可く、其の將來や益々好望なりと謂ふ可し。



館山製材所

館山製材所は館山松太郎氏の經營する所にして、南秋田郡土崎港御藏町にあり、明治四十四年八月の創立にして、固定資本金壹萬五千圓を有し、製材所の敷地は三千坪餘にして汽鑪及び汽機一臺を据付け、職工人員四十餘名を使用しつゝあり。製材機械は單式小割鋸一臺、大割九鋸一臺、小割九鋸一臺、面取九鋸一臺、鼻切九鋸一臺等を設備しありて一ヶ年の製産額一萬石内外を算し、昨大正五年に於ける資材消費高は一萬四千石に達し居れり。而して其の製

品の種類は板類、横、小角等を主とし、板類横類は東京關西及び朝鮮に移出し、角類は多く縣内に仕向けられつゝあり。

製材の設備に至りては、其の規模敢て大なりと謂ふを得ざれども、其の經營振りは最も堅實なる基礎の許に行はれつゝありて、場主館山氏は常に細心の注意を拂ひ經營に細心しつゝある結果、着々効を奏し、日に月に隆昌の域に進み、現に大正四年に於て約一萬石の資材を消費したるに比し翌五年には一萬五千石に上り居れるが如き、明かに其の發展を証據したるものにして、本年に至りては更に其の製材高を増加せるは盛んなりと云ふ可し。而して最近事業の進運に伴ひ、工場の規模を擴張なさんとする議ありと聞くが、果して然りとせば製材力更に増加するに至る可く、將來見る可きものあらむ。

其の製材する原料材は大部分を國有林に仰ぎつゝあるが、現在同製材所に於ける製材力の約二分の一内外を林區署保護特賣に依り得居るを以て、殘餘の原購入に關しては多くの苦心をなさずといふ。縣下に於ける機械製材工場は何れも杉の製材を主とし居るが、其の資材には限りありて常に供給不足の聲は絶わす。殊に機械の運轉上の關係よりして後には高き原料を購入し全然利益のなき事を承知しつゝ、製材せざる可らざる場合もあり、從て資材購入に關しては同業者間の競争あるを免れざるが、幸にも特賣に依りて保護せられつゝある館山製材所は大競争を

なして迄も之れを購買する程の必要なを以て、經營上に於て有利なるは言ふ迄もなく、又た商機を狙うにしても餘裕あるを以て、大に經營上有利の立場にあり。

曾て館山氏語りて曰く「秋田縣に於ける製材事業は年一年盛んとなりつゝあるが、何れも杉の製材を主としつゝあり。而して日本に於ける杉材の産出高の約五分の一は秋田縣の産出に係り、殊に杉の長大材に至りては之を秋田縣以外に需む可らず。加ふるに杉の需用は年と共に増加しつゝあるを以て將來杉製材の著しく低落するが如き事は全然ある可らず。然しながら時に人為的の相場の變動を來す事あり。之れ戒心を要す可き點にして徒らに賣急ぎをなすに於ては之に乗せらる可く、同業者の一致を要す、資材購入に關しても單に工場都合のみを考へては勢ひ無理な高値を以て購入せざる可らざる場合に到達せんも、常に冷靜の態度を以て其の計劃の實行を誤らざるに於ては、如何なる場合に遭遇するも狼狽する事なし。」以て氏平素の經營に對する態度を察知し得べく、將來着々として斯界に地歩を占むるに至る可きは豫測するに難からず。



菊地製材所

菊地製材所は南秋田郡五城目町字田町に在りて、明治四十五年六月の創立に係り、固定資本

金參萬圓にして菊地庄之助氏其の所主たるが、主として令息菊地德治氏經營の任に當り、製材及び販賣等内外の事を掌る。然して創立以來毎歲順調なる發展を來し、今や隆々として其の前途を展望されつゝあり。而して其の創立當時なる四十五年頃は、一ケ年の製材力一萬石内外なりしも、年を加ふ實に事業發展して工場の設備を擴張するに至り、大正四年に於ては官材約一萬二千石、民材約一萬一千石を消費せるが、昨大正五年に於ては二萬石に上り、現在に於ては一ケ年四萬石の製材力を有する大工場となれり。

其の製材設備としては汽罐及び三十五馬力の汽機一臺を運用して製材をなしつゝあるが、製材機械としては大割堅鋸一臺、小割堅鋸一臺、大割丸鋸一臺、小割丸鋸二臺、振り鋸一臺、面取丸鋸二臺、製函丸鋸二臺を有し、板類、樺板割、小角等の製材を主とするが、其の資材は主として國有林より仰ぎ、全消費高の七分に達し、其の殘餘は民有林より供給を受け居れり。然かも本製材所は、最近に於て附近國有林に於ける伐採量及び民有林に於ける産出材の減少に伴ひ、官行斫伐個所に遠く、能代、秋田其他の地方に比し拂下材の運搬費に多くの費用を要するを以て、常に原料購入上に苦心しつゝあるも、能く機宜の措置を誤まらずして資材の欠乏を告ぐるか如き事なく、現に其の工場には原料丸太山積して他に同業者を羨やましめ、且つ民有林に於ける立木の購入せるものもあり。假りに年中無休にて作業するも、今後三ケ年間

は新たに他の供給を仰がすして製材し得る他けの資材を有し居れるなり。以て其の餘裕綽々たるを察知すべし。

一四四

建物は製材工場の外に倉庫三棟、機械器具置場を一棟及び事務所一棟を有し、土場を合せて其の面積一町歩餘あり。而して菊地製材所に於ては製材の外に、同所の特色とする柾割工場ありて、年中従業し居る職人十三名を算し、其外副業として竇筒用材即ち杉、桐、桎等の製材をなしつゝありて、之等は主として同町に於ける指物業者其他に供給する外に福嶋地方に販賣し一般製品は東京、關西方面及び九州地方に仕向けつゝありて、特に東京に最も多く輸出せられ同地に於ける武市賣場は特約店として多額の製品を引受け居るか、菊地製材所と武市賣店とは親戚同様の關係を有するを以て、他の同業者以上に信用もあり又た援助をも受け居るを以て、大に有利なる立場にあり。其の前途や大に好望なりと謂ふ可し。

而して現在同製材所に於て使役し居る人員は、職工常備夫を合せ一日六十餘人にして、近く製材工場を耐火構造に改築するの計劃を樹て其の準備中なるが、内容充實し資材豊富にして然かも經營者に老練なる所主庄之助氏を新時代の教育を受けて新進氣鋭の令息徳治氏のある有りて、兩者相俟つて其の發展に努力しつゝあるを以て、今後の同製材所の發展は蓋し刮目に値するものあらん。

中 船川製材株式會社

船川製材株式會社は大正二年十一月の創立にして、爾來新進の製材會社として眼醒しき發展をなしつゝあるが、社長は男鹿半嶋に於ける有力家中川文之助氏にして、殊に同氏は大株主なるを以て、事實上中川社長が萬事經營の任に當り居るといふも過當に非ず、同會社は日本海に於ける重要港灣として知らるゝ船川港町比詰に工場を有し、工場の外に事務所及び製品の貯藏倉庫を有し、土場を併せて其の敷地面積二千五百坪餘を算す。而して六十馬力の動力を使用し豊富なる資材を得て盛んに製材をなしつゝありて、其の運搬の便に於ては殆んど他の企及し能はざる自然的恩恵に浴す。

即ち同製材會社は船川鐵道羽立驛附近にありて、林區署の軌道を利用して羽立驛まで約四丁の間を運搬し、ホームに達するを以て運賃に多額の差異あり。又た國有林より仰く資材の大部分は此の軌道を利用して同會社の土場に運搬し得るを以て一舉兩得といふ可く、一方船川築港迄約二丁の所に軌道を敷設し、貨車を以て運材し直ちに船積となして移出し居るを以て、海陸兩様の至便、他の匹敵する處に非ず。此の點に於て同製材會社は既に大に有利の立場にあるは言を俟たざる所なりとす。然かも經營宜しきを得て宜く時流に適合せる方法を講じつゝあるを

以て社運日に月に隆昌を加ふ。之れ地の利と共に經營者に其人を得たるか爲めに外ならざるなり。

製材原料は杉材を主とし松材之に亞ぐが、之れが産出地は南秋を主とし、北秋仙北の兩郡よりも多少の資材を仰きつゝあるが、創業當時に在りては國有林の官行斫伐に據るもの總体の約三分の一に過ぎざりしも、其の後林區署より保護特賣を得るに至りしを以て、國有林より得るもの七分を占め、殘餘を民有林より補給しつゝあり。殊に保護特賣に依る資材は大部分男鹿半嶋に於ける國有林よりするを以て、資材運搬の上に於ても他に比し遙かに有利にして、遠隔の地より多くの資材を購入するに及ばざるなり。男鹿半嶋に於ける唯一の機械製材工場として、同會社の前途多幸なりと謂ふ可し。

更に其の製材工場の盛大さを見よ。製材機械として現在据付あるは大小割兼用堅鋸一臺、小割堅鋸一臺、大割丸鋸一臺、小割丸鋸二臺、面取丸鋸一臺、製函用丸鋸三臺、其他一臺合計十臺にして六十馬力の原動力に依りて間斷なく運轉せられつゝあるが、一日平均三十餘名の職工を役し、一ケ年約三萬二千石の製材高を示しつゝありて、其の製品の種類は、板類、角材、楨、板割、建築用材等を主とするか、製品の販路は板類、角類共に東京に移出せらるゝもの最も多く、北陸及び關西地方之に亞ぎ、北海道にも多額の製品を移出しつゝあるが、其他

縣内に於て消費さるゝ、建築用材も一ケ年尠からざるものありて、社運益々好況を加へつゝあり。

最近製材界の好況に伴ひ、同會社に於ては更に發展計劃をなし、大に積極的に雄飛を試みんとしつゝありと云へば基礎鞏固なる同會社は今後一層の發展をなすべし、船川築港の完成と相俟つて販路海外にも及び、將來の發展は刮目に値すべし、本縣製材界の重鎮として一方の驍將たるに至るも遠き將來に非ざる可しと信ず。

木 材 板 類

秋田縣土崎港町
下 俵松商店東北製材部
 電話 一〇一七番
 電 話 一〇一七番
 電 話 一〇一七番
 本店及支店
 大坂市西區千代崎橋
俵松商店本店
 長電話西五七七番
 電 話 一〇一七番
 大坂市東區久寶寺橋
俵松商店東支店
 電 話 一〇八二番
 電 話 一〇八二番
 小倉市
俵松商店九州支店
 長電話四三二番
 電 話 一〇八二番

營業種類

木材製板委託販賣
 廻船荷受問屋業
 石見陶器特約販賣
 出雲産石材類販賣
 能登産瓦特約販賣
 海産物委託販賣業

倉部喜太郎商店

秋田縣土崎港町古川町
 電話 四番
 電 話 四番
 電 話 四番
 電 話 四番



合資會社平泉製材所

合資會社平泉商店製材所は當初平泉喜八氏の個人經營にして、創業當時に在りては僅かに帶鋸一臺及び丸鋸三臺を有するに過ぎざりしが、大正三年十一月青森大林區署大鶴製材所の拂下を受け、同所に於て盛大に製材業を営みつゝありしが、原料及び製品の取引關係上大館町を便宜なりとし、翌四年現在の個所たる北秋田郡大館町松木境(停車場附近)に移轉し、更に翌大正五年一月合資會社を組織して一層業務の發展を企圖せり。其の出資社員は平泉喜八、渡部慶吉、平泉六助、平泉ツネの四氏にして代表社員は平泉喜八氏並に渡部慶吉の兩氏なるが、營業は平泉喜八氏専ら其の職に當りつゝありて、専心努力同製材所の發展刷新を圖り以て今日の好況を見るに至れるものにして、同製材所は今や大館町第一流の大工場として斯界に重きをなせり。

殊に全責任を負ひて經營の衝に當りつゝある平泉喜八氏は、年齢漸く自立の青年なるにも拘らず、大工場の經營を一身に引受けて能く誤る事なく、職工を督勵し工場的發展を圖り、其大鶴製材所拂下當時に於ては木材界不況の爲め何れも警戒をなしつゝある場合にも拘はらず、難局に處して機宜の措置を過らずして發展の域に向ひたるのみならず、合資會社を組織して事業

の發展を期したるが、日ならずして斯界の好況を見るに至り順調の發展をなして今日の盛運を見るに至れるは、平泉氏の先見の明あるを証するものと謂ふも過言に非ざるべし。

同製材所の設備如何といふに是又た同地一流の大工場と稱するに憚らざるなり。即ち製材工場の外に事務所、倉庫、鍛冶場各一及び仕譯場二個所を有し、土場を合せて其の面積實に一町六反歩餘を算し、一ケ年の製材材力十萬石餘に達す、又盛んなりと言ふ可し。其製材機械に至りては帶鋸及大割堅鋸各一臺、小割堅鋸二臺、丸鋸三臺、振子鋸、箱木取機、面取機各二臺、合計十三臺を据付け、八十馬力の原動力を以て盛んに作業しつゝありて、一ケ年を平均し一日平均百三十餘名の職工及び人夫を使役し、製産品は十一名の社員に依り各方面に販賣せらる。實に旭日昇天の勢と謂ふも過當に非ざるなり。

林區署の調査に依れば、同製材工場に於ける固定資本金參萬八千圓なるが、資材は九分通りを國有林より仰きつゝありて、長木澤の杉材、青森産樺材を主とし、他は民有林より補給するが、事業の基礎鞏固にして既往の成績良好なりしに依り、大正六年度以降林區署より保護特賣の恩典に浴する事となれるが、之れ蓋し當を得たる事と謂ふ可し。而して其の製品は主として松四分板、六分板、板割、欄類、平割、建築材、箱板等なるが、大正五年に於て板類のみにて四萬五千八百六十五石の製産高を示し、欄類に於て五千七百八十二石を出せり。他は推して知

る可く、尙ほ以上の外に樽木取をも兼ね大正五年に於て二千五百石を産出し、桎梏に在りても一ヶ年一千七百八十石に及べり。製産額に依りて同製材所の盛大を察知するに足らむ。製品の重なる販路は東京、大阪、北陸、關西方面より九州に及ぶが、同製材所は大館驛附近にあるのみならず、軌道を敷設して大館驛構内にまで延長せしめ居るを以て、木材の運搬には至便にして、加ふるに精良なる機械を運轉し居るを以て製品に不揃ひなし、製板は麗美にして恰かも鉋工をなしたるが如きを以て至る處好評を博し、歓迎を受けつゝあり。一面従業者に對しては貯蓄を奨励し、職工には半日給金の二分の一の積立をなさしめ、既に其の積立金額數百圓に上るといふ。其他相互の親睦並に救済を目的とする團體を組織し娛樂として春秋二回必ず運動會を舉行し盛大を極む。されば社員及び職工其他使用人は皆其の徳に服し居るが又頗る義侠に富み不具廢疾に近きものすら能く之を撫育して業を勵ましむ。此の點に關しては何人と雖も尊敬の念を禁し得ざるものあらん。

尙ほ同製材所に於ては原動力の餘力を利用して工場の一部に精米所を設け一日平均四十石の精米をなし一般の需用に應じつゝあるが斯くの如く新進氣鋭の意氣を以て隆々發展しつゝある平泉製材所の前途や實に刮目に價すといふ可く、殊に經營者平泉喜八氏の將來に至りては正に昇龍の觀あるべしと信す。



大館製材株式会社

秋田縣に於ける屈指の製板工場として知らるゝ大館製材株式会社は明治四十四年六月創立せられたるものにして資本金五萬圓島山小文治氏其の社長たり。創業以來刻苦精勵、克く經營の隆盛を期したるに依り着々として其効果現はれ、創業後幾干も經ずして蔚然製材界に頭角を顯はすに至り、其の秩序の整然たる、其の組織の進歩的なる、能く大會社に比肩して劣らざるの發達を遂ぐるに至れり。是れ即ち努めて止まざる專心的努力の賜物に外ならざるなり。

其の工場の設備に至りては、動力として多管式蒸機一臺及び實馬力四十五馬力を有する滾機一臺を据付け、製材機械に至りては四尺一寸六分の大割堅鋸一臺、三十吋の吊下圓鋸一臺を始め、大小丸鋸其他十二臺を運轉し、職工常備夫百十餘名を使役し盛んに製材をなしつゝありしなり。而して製材力の約二割に該當する林區署の保護特賣以外は、全部民有林木の購入となし、其の消費高に於て大正三年杉五萬六千八百九十八石、松八百二十五石、大正四年杉六萬三千二十石、樺一千百三十五石、大正五年杉七萬二千七百七十八石、樺一千四百八十五石、松三百九十八石の多きに上り、其の製産高に於ては大正三年三萬六千三百六十六石、大正四年四萬四百十八石、大正五年四萬六千六百五十九石を製出するの盛況を呈し、其の販路も東京に移

出する並四分板十七萬千五百五十二間(全部の七割四分五厘)を始め京都、大阪、静岡及び金澤、日立、山等にも及びたりしに、不幸にも大正六年十月火を失し、工場烏有に歸するの災厄に遭遇せり。

茲に於てか事業に一頓挫を來し、株主間に於ても繼續説と反對説と相半し、折角隆盛の域に進みつゝある同會社の運命も危ぶまるゝに至りしが、株主總會の結果今後一層事業の擴張をなす事に決議し、過般秋田市新川の舊挽材工場の建物を購入して工場の一部に充つる事となり、復た新築すべき工場は最新式の耐火構造となし、之れが經費三萬圓を計上せり。而して製材機械も從來の外更に更に新式の堅鋸數臺を増設すべく目下注文なりと謂ふが、愈々工事竣成の上は秋田縣有數の大工場として誘るに足る可く、其の竣工期は來る大正七年彌生の豫定なりといふ。

尙ほ同製材會社に於て從來製材しつゝありしは板類、檜類、角類、小割類、柿板其他雜割等にして、各方面の仕向地に於て信用頗る厚く、製品又到處好評を博しつゝありしを以て、其の落成開業と同時に新製材機械の新威力を發揮し、舊に倍するの發展を來す可く、同會社の前途や、眞に刮目に値すと謂ふ可し。

畠 藤田組長木澤製材所

本製材所は藤田組の經營に係り明治三十四年の創設なるが、當時は主として自家所有の小坂嶺山嶺業用材の製材をなし居たり。然るに同四十三年一月より一層業務を擴張し爾來一般製材販賣業をも兼營するに至れり。其の原動力としては蒸氣機百五十馬力一臺、ベルト式水車百十馬力一臺を有し、大小三十餘臺の製材機械を運轉し、職工男女二百餘名を使用して盛んに製材しつゝあり。

其の原料は長木澤國有林より産出する杉材、小坂國有林より産出する杉材及び樅材等にして從來嶺業用並に工場保護の爲め特賣を受けつゝあるのみならず、二ツ屋官設貯木場と僅かに一溪流を距て、相對し居りて、原料購入の上に於て些少の不便を感ずる事なし。其の生産高に至りては大正三年十一萬二千三百石、大正四年十一萬三千九百九十石、大正五年十三萬千六百七十石を算し、製品の販路に至りては東京の四萬四千石を第一とし、關西地方の一萬九千石之れに次ぐ、此の外東北及び北海道、北陸地方等への移出も尠からざるなり。



淺野製材株式會社

淺野製材株式會社は秋田縣北秋田郡扇田町に在り。明治四十年五月、我が事業界の巨魁の淺野總一郎氏と東洋一の稱ある秋田木材株式會社と共同し、資本金七萬圓を以て淺野製材所を創立せるが、之れ淺野製材株式會社の前身なり。爾來事業の發展擴張と共に資本金を拾萬圓に増資せるが、時代の要求は到底保守的なるを許さずして益々増資の必要を促進し、明治四十五年株式會社組織に鞏むるに至り、資本金を拾五萬圓とし全部の拂込を了せり。其の大株主に淺野合資會社、秋田木材株式會社あり。淺野總一郎、井坂直幹、淺野泰次郎、白石元治郎、鈴木紋次郎、竹村榮三郎、辻良之助、相澤東十郎、綠川賢策等の諸氏孰れも百株以上の大株主なり。淺野製材會社を形成する中心勢力は秋木系統なり。社長に淺野總一郎氏を推し、井坂直幹氏副社長の椅子を占め、常務取締役は綠川賢策氏にして取締役に竹村榮三郎氏、監査役に鈴木紋次郎氏及び辻良之助氏を配す。即ち井坂、竹村、辻の三氏は何れも秋木の重役なるは言ふ迄もなし。更に同社の幹部を見るに、工作部主任中山宗太郎氏、商務部主任丹生正太郎氏、會計兼庶務部主任大塚耕三氏なるが、中山、丹生兩氏は秋木の出身にして綠川常務の配下に在りて大塚氏と共に活動しつゝあり。而して嘗に同會社が秋木系統たるのみならず、事業の經營、諸般の

設備の完整せる點に於て秋木會社に髣髴たり。蓋し秋木本店工場の規模稍小なるものと謂ふを適當とすべき乎。吾人は之を目して模範的經營法と稱せんと欲するものなり。

翻つて淺野製材會社の設備を見るに、其の位置は扇田町の北西端、米代川の南岸に臨み、西南直ちに秋田鐵道扇田驛に接続し水陸の運輸最も至便の地を占む。敷地面積一萬四百三十坪、社宅其他の建物敷地二百五十坪にして、構内現在の建物は工場及事務所を始め各種の附屬建物合計十五棟、建坪總計八百坪以上なり。然して製材工場は三百餘坪にして、原動機を始め鋸機挽材工場より鋸、目立工場等に分たれ、機械の種類は大同小異なれども、特種の材料即ち底木、屑板、木端等普通の挽材として販賣し難きものを材料として、函類、柿板、雜割等の製作をなす。工場の原動力は主として蒸汽力を用ひ、汽罐は多管式にして直徑五呎六吋、長十五呎八吋二分の一二基を備へ、汽機は凝縮單篇措置式二基にして全体の馬力百三十馬力なり、別に自家用に供する電氣發動機ありて、直流コンバウトタイプモーター一臺（十キロワット）を用ひ、ウォーシントン式唧筒二臺を以て給水し、汽罐の焚口には何れも米國式の通風裝置を施し、又新式の温水機を備へて燈料の節約を計り、燃料は専ら木屑、鋸屑等を用ひて石炭及薪材等は一切使用せざるなり。

工場内に据付けたる製材機械の内重なるものを見るも亦工場の規模を推知するの一助たらん

か、即ち種類及個数を挙げれば左の如きものあり。

大帯鋸機械一臺、小帯鋸機械一臺、單式小割鋸機械一臺、高速度太式小割鋸機械一臺、大割鋸一臺、平面丸鋸三臺、同盤鋸三臺、吊下横切丸鋸二臺、蒸汽横切鋸一臺、小計十四臺

以上は普通製材用の諸機械なるが、此外に特種の製材に要する機械は製函機械二臺、柿板製造機械一臺、横切機械一臺を有し、是等の製材機械に附屬する鋸其他の刀物類の研磨及び修理に要する機械として、自動鋸目立機械一臺、自動圓鋸目立機械一臺、鋸目研磨機械一臺等を有せり。而して別に製材工場に附屬せる設備あり。即ち製材の仕譯場及乾燥場あり、附屬鐵工所ありて、普通鍛冶工具一式の外、工場内に旋盤一臺を備て機械器具の製作修繕をなし、米國製發電機一臺を据付けて夜間は工場及事務所其他構内樞要の個所に點燈し、晝間と雖も工場床下其他の要所に點燈す。此の外防火設備ありて、職工を以て私設消防隊を組織す。到れり盡せりと謂ふ可し、斯くの如き設備に依り同工場は一日の製材高二百石(約三萬才)を算し、一ケ年を通し、三百三十日の操業として六萬六千石の製材力を有す。其の職工及常備夫百二十餘名なり。製材は大部分杉材にして七割以上を占め、他は松、櫟等なるが、是等の資材は扇田小林區署管内東館、西館、大葛等の國有林より供給を得來りしも、近年長木澤國有林年伐の制定ありし以來、資材供給二割方低減せられたるを以て、此の不足資材は大館、早口及び青森縣弘前

附近の官民有林より購入補充しつゝあり。而して如上東館、大葛等の國有林より買受けたる資材は、會社の専用輕便鐵道を利用し容易に運搬し得るの便あるが、輕鐵は幹支線を通じて二十五哩餘なり。

製品の種類に到りては數十の多きに上るも、主要製品は杉四分、同六分板、同板割、同種及小割類、同木舞及木權、建具材及び平割、角割等にして、就中四分板は全製材額の過半を占め六分板之に亞ぐ。副製品としては杉柿板、雜割、兩類各種及建具類各種等あり、重に庇木、木端、庇板、屑板等を材料として製作せるものとす。其の製品の特色とする所は、木理緻密にして赤味物に富み、材質優良にして他國産を凌駕し、加ふるに製材は精巧なる機械と熟練せる職工の手に成り、工場には専任の監督指導者を置きて嚴密なる監視を爲さしむるのみならず、製材の仕譯乾燥結束等に關し充分注意を拂ふ點にして、杉製材としては殆んど完全無類の良品と云ふも過當に非ざるなり。

斯くの如きを以て、同會社の製品は大に顧客の賞讃を博し、年々販路伸展の域に達しつゝあるが、製品の販路は直輸出と地賣とあり。主なる需要地は東京を第一とし、愛知、神奈川、大坂、京都、静岡、滋賀、茨城、群馬、埼玉、宮城、青森及び北海道の各府縣に亘る。盛んなりと謂ふ可し。而して本年恰かも會社創立十週年を迎へ、盛んなる祝賀會を催うると共に更に

一大發展を企圖せむとす。其の將來や期して俟つ可きなり。

正 製 材 所

丸正製材所は北秋田郡釋迦内村字上袋に在りて、奥羽線大館驛前なる運輸至便の地を占む。其の創立は大正二年九月にして、菅原庄一氏の經營する所なるが、經營者菅原庄一氏は新進氣鋭の青年にして、亡父の業を繼ぎ、然かも亡父に劣らざるの精力を以て日夜事業に奮勵し、今や昔日に倍する成績を擧ぐるに至れり。其の間に於ける庄一氏の經營振りは眞に青年と思はれる程の緻密の頭腦と、能く時流に適合せる施設と、商機を逸せざる慧眼と相俟て順調の發展を助成し、幾多同業者間の競争場裡に掉さして能く今日の基礎を築くに至れり。蓋し是れ凡庸人の爲し能はざる所たらざるばあらず。

同製材所は製材工場の外事務所及び倉庫等を有し、其の面積千五百餘坪なるが、資本金壹萬五千圓にして四十馬力の原動力を備へ、製材機械としては小割鋸一臺、大割丸鋸一臺、小割丸鋸一臺、面取丸鋸一臺、製函用丸鋸二臺其他附屬機械數臺を据付けありて、工場従業員一日平均約四十名に達せり。而して其の資材は七分通り國有林より仰き殘餘の三分は民有林に依りて補給しつゝあるが、製産品の重なるものは板類、角類、樽木取、箱木取等にして、賃挽の依

頼にも應じ、製品は整一して板の厚さ均一し、其の挽肌平滑にして美麗なるのみならず、製品の仕譯嚴密にして粗悪品の混入絶對になきを以て、製品は到る所賞讃を博し、販路毎歲擴張せられつゝありて、其の前途頗る好望を以て目せられつゝあり。

製品の仕向先は東京方面を最多とし、大坂及び其他の關西地方にも尠からず販賣しつゝあるが、東北各縣にも移出せられ居れり。而して其の樽木取に至りては、醬油樽として毎年野田、銚子等に多額の移出をなしつゝあり。元來本縣より毎年醬油樽として縣外に移出さるゝもの頗る多く、現に野田、銚子の兩本場に移出せらるゝものゝみにても一ヶ年百萬樽を算し一樽五拾錢とすれば五拾萬圓の巨額に達するが、他地方に於て同一の品を百萬樽取揃ふる事は困難なるのみならず、寧ろ不可能事に屬し、獨り秋田縣のみ之れを産出し得るなり。されば樽木取の製造の如きも大に有望なりと稱すべし、同製材所に於ても此の點に着目し、今後製板と共に大に之れが製作に力を注ぐ可しと謂ふ。蓋し一隻眼を有するものと云ふ可し。

秋田縣内製材業者多しと雖も、概ね製板を主とし、他は副業的にして、或は廢物利用的になし居るもあり。其の經營方法及び主義に於て多少異なる處あれども、大体に於て製板を主とし居るは蔽ふ可らざる事實なり。然して製板の業たる素より前途有望なれども、其の向ふ處にして一ならんか、勢ひ販路の競争激甚を加ふ可きは理の當然と謂はざる可らず。丸正製材所主菅原

庄一氏が能く之れを達観し、其の進む可き途、軌を一にせざるは思慮あるの方針といふ可く、將來本縣製材界の一異彩として更に活躍するに至らん。加ふるに菅原氏は製材工場の擴張に關し計劃する所ありと言へば、今後の發展や期して待つ可きなり。

三 三丁目製材所

三丁目製材所は秋田縣由利郡直根村字猿倉にあり。其の設立は大正四年十一月にして、翌大正五年一月設備完整して事業を開始するに至れり。本来、秋田縣内に於ける各製材所は何れも杉の製材を以て目的とするか、三丁目製材所は全然其の目的を異にして、本縣に於て最も豊富なる雜木利用を以て主眼とせるものにして、湯澤に於ける秋田木工株式會社と共に、本縣雜木利用の急先鋒と稱すべし。其の製材の設備としては水車一臺据付けありて、其の動力十五馬力なるが、其の水源地は烏海山麓木口澤と稱する處にして、製材工場より約三里を距つ。而して工場には丸鋸二臺を有し居るが、建物としては工場の外に事務所一棟、職工長屋二棟、乾燥場一棟ありて、土場の面積六反歩餘なり。

其の經營者は三丁目徳治郎氏にして所主を兼ねるが、土屋彦三郎氏代つて内外の業務を増當しつゝありて、其の目的は主として齒板を製造するに在り。齒板の原料は潤葉樹にして山毛櫸或は檜を以て材料とするが、其の原料材は製材所附近に豊富にして、殆んど無盡藏を以て目せらる。殊に同所には部落の共有林ありて其の面積八百五十町歩餘を算し、其の材積六十五萬石に達するが、是等の共有林は今や所主三丁目氏の所有となりたるを以て、今後材料の點に關しては聊かも安する事なし、着々として専心一意事業の發展に努力し得るを以て、其の經營上に關しても大に有利なり。

更に同製材所の作業振りを見るに、一日平均三十名の従業員を役しつゝありて、齒板の製材高一ヶ年二萬間に及ぶが、是等の製品は長さ四尺二寸、幅四寸、厚三分にして、二十枚を一束として販賣するが、其の販路は過半は大阪にして製造高の七割を占め、他は東京地方に移出しつゝありて、縣内に於て消費するものも亦尠からず。然かも其の需用日に月に増加し創業以來僅かに二個年を経過するに過ぎざれども、到底需用に應ずる事能はざるに至りしを以て、本年十一月擴張の第一着として製材機械を増設し其の製産高の増加を期せるが、今後引續き工場設備の増設をなし、各方面の需用に應ずると共に大に販路の擴張に努力する計劃なるを以て、同製材の前途大に有望なると共に確實に發展を期し得べきなり。

其の製品の價値に至りては敢て贅言を要せざる所にして、昨大正五年の秋田縣林産品評會齒板を出品し、小嶋秋田縣知事より三等賞を授與されたるに徴して明かなるが、製品の殘餘品を

以て木炭を製造しつゝありて、現在籠六基を作り、改良製炭一日平均五十貫目を出しつゝあり之を一ケ年に積算すれば實に一萬八千貫に達するが、之等製炭は悉く同郡本莊町附近に於て消費せられ、而かも尙ほ供給不足を告げつゝあるの盛況にして、最近に於ける木炭相場の騰貴と一般に供給欠乏を來しつゝある秋に際會し、副業たる製炭事業に於ても豫想外の利益を擧げつゝあり。

事業の大体は以上を以て之を盡せるが、製品の搬出に關しては平常は矢嶋町より約二里の西瀧澤村まで車馬を以て運搬し、同所より子吉川を利用して舟に依り本莊町に出で、製炭は同所に陸揚げし、齒板は土崎港に至りて鐵道便にて需要先なる大阪及び東京地方に發送し、十二月より翌年三月に至る冬季に於ては本莊町に至るまで陸送するを常とす。之を要するに、本製材所の前途たるや大に刮目に値すべき事業なるが、若し更に新たなる雜木利用の適法を講究して兼營したらんには、其の發展も一層華々しかる可く、森林の利用上よりするも喜ぶ可き事に屬す。茲に三丁目製材所の前途を祝福すると共に、他に率先して更に有利なる雜木利用事業を兼營せん事を切望せんと欲するものなり。

◎ 組合製材所

丸中組合製材所は由利郡本莊町出戸町字下川原嶋にありて、大正六年四月設立せられたる新進の製材所なり。本製材所の前身とも稱すべき工場は、由利郡西瀧澤村にありしものにして、大正二年より製材工場を創始し、主としてブナ齒板類の製造をなし相當の成績を擧げつゝありしも、從來の工場所在地は材料供給上不便尠からざりしを以て、大正六年二月所在地なる本莊町に移轉するに決し、夫れと同時に組合組織として資金を増加し、製材工場の設備も亦擴張をなし、同四月より從來に數倍する製材力を以て開業するの運ひに至れるなり。

本製材所の組合員は、三丁目徳次郎、松岡與七、工藤善吉、吉川四十八銀行本莊支店長、正田徳次郎、佐藤喜八郎、越川千代七の七氏にして、三丁目徳次郎氏は其の代表社員として經營の任に當りつゝあるが、固定資本金壹萬圓餘にして、製材工場の外に倉庫一棟、事務所一棟、職工住宅一棟を有し、土場を併せて其の面積二町歩に餘る、其の製品は板類、樺類、榎類を主とし、就中樺類の製材最も多きを占むるが、其の販路は新潟に移出せらるゝもの大部分にして之れに次で土崎にも仕向けらるゝも、土崎に至るものは更に同地商人の手に依り、鐵道に依りて各地に販賣せられつゝあり。消費する原料は其の大部分を民有林より仰きつゝありて總量の

七分を占め、残り三分は國有林より産出するもの消費に居るが、主産地は郡内の矢嶋、仁賀保、龜田の各地方にして、殊に矢嶋附近より出づるもの最も多し。而して同製材所は子吉川に臨み矢嶋方面より供給を仰ぐ原料は悉く同河川を利用して流下するを以て頗る便益にして、一方新潟及び土輪等に移出するもの、工場より直ちに舟積として運搬し得るに依り、營經上大に有利なる立場にあり、若し夫れ近き將來に於て羽越沿岸線の開通するに至らば、更に陸上運輸の便開くるを以て製品の輸送上至大の便宜を得、販路更に開拓せられ、事業益々發展するに至る可きは火を見るよりも瞭かなり。

調べて同製材所の製材設備を見るに、汽鑪及汽機各一臺を備付けありて、大割丸鋸一臺、小割丸鋸三臺、其他三臺、小計六臺の製材機械を運轉しつゝあるが、平素職工及び人夫三十五六名に従業しつゝありて（一ヶ年約二萬五千石を製材するの見込みなりと謂ふ。何分移轉後に於ける規模擴張經營以來、未だ一ヶ年をも經過せざるを以て既往の成績を見る能はず、従つて同製材所の將來に關して具體的の根據ある豫測を下す事能はずと雖も、事業の性質と、原料の豊富なるを、近き將來に於て運輸の便開くるを綜合し、而して其の販路廣汎にして今後益々需用多きを加ふると、經營者其人を得たるに思ひ到れば、今後の發展や期して待つ可く、殊に子吉川流域は本縣に於ても無盡藏と稱せらるゝ潤葉樹の鬱林を有するを以て、雜木の利用に關し一

段の工夫を凝らすに於ては本縣特産として聲價を博するに至るべきを信じて疑はざるなり。

木材各種製材販賣

杉樽丸雜割各種



樽木

丸材

商

大

塚

勇

助

秋田縣大館停車場通リ

電話百十一番

醬油樽丸
大桶各種

製造販賣

秋田縣大館停車場通



大樽

桶丸

商

渡

邊

直

一

郎

電 署 (ワ タ)

今藤喜八郎

秋田縣本莊町中嶋

電話 二三番

木材各種

並二製品販賣

營業種目

木材業
金錢貸附業
問屋業



合名
會社

本莊商會

秋田縣本莊町

特設電話 七〇番
電 署 (〇本) 又八 (本)